

「おばあちゃん、急変してこれから緊急手術をする事になったから。」

北海道の祖母が脳梗塞で倒れた。一命はとりとめたが、長い長い入院生活が始まった。県外への移動自粛が続く中、母は北海道の祖父と度々電話で連絡を取り合っていた。

「領収書は全て、ひとまとめに保管してね。医療費控除の還付金申請をすることから。」

コウジョ？キャンプ？聞きなれない言葉だったので、どういう意味なのか母に尋ねてみた。

「一年間の医療費の支払い金額が高額になってしまった時、控除の申請手続きをすると、お金を還付してもらえるんだよ。」

確か医療費は、健康保険や税金で補助されているので、個人の負担は少しく済むようになっていると、小学校の税の教室で学んだ。そうやって負担を減らしていても、大きな病気やケガで金額が高額になったら、確かに大変だ。そんな時のために、きめ細かい救済の制度があるとは知らなかった。

他にも控除されたり還付されたりする場合があるのか調べてみると、雑損控除や寄付控除など、初めて見る言葉が色々出てきた。

寄付というのは、誰かの善意で送られる任意のお金なのに、それについても控除される。少し不思議な気がしたが、よく考えると、そうすることによって、世の中の慈善活動をしやすくしているのかもしれないと思った。税金が、社会の善意を支えているのだ。

税金を使って国際協力をする政府開発援助、これも国としての善意といえる。日本の税金が国際社会で役立ち、巡りめぐって私達を含む世界中の多くの人達の生活を支えている。

そう考えると、税金というのは、地球を大きく回り続ける水のようなのだ。

水は、雨となり川となり、氷や水蒸気のように姿を変えながら、地球上のあらゆる生物を巡り、命に息吹を与え続けている。地球の全ての存在が、同じ水を共有しながら、何億年も、その営みを繋いでいる。

税金も、単なるお金としてだけでなく、誰かを支えたり、守ったり、時には命を救ったりしながら、世界を巡るようにはたらき、私達の生活を支えている。

水は自然界に恵んでもらった限りある資源。

税金も、互いに助け合い、未来へ繋ごうとする人々の心がうみだした、限りある大切な社会資源だと思う。

今回の祖母のように、思いがけず起きた人生のアクシデントにも、柔軟に対応してくれる制度があると、本当に困った時、どれほど心強いだらう。社会に支えられているという安心が、誰かの生きる力になるかもしれない。

限りある、大きな善意と支え合いの資源を大切に使いながら、私達は成長している。

そして、大人になった時には次の世代、また次の世代へこの大切な社会資源を引き継いでいかなければならないと思う。

文化学園大学杉並中学校3年

いしづか
石塚 りさ

私には弟がいる。弟は生後13日目で大きな心臓手術をした。3つの疾患が複合した難しい手術でその時の手術痕は弟の胸に1本の線として今もくっきり残っている。幸運にも手術は成功し、再発することもなくすくすく成長していて身長は150cmを越えている。バスケが大好きな小学六年生だ。

12年前のその出来事は父にも母にもかなりの衝撃だったらしく、めったに口にしない。弟の「2分の1成人式」の時にお決まりの「僕が生まれてからいままでの話を教えてください」を父と母にした時、2人共急に表情が変わってしまいぽろぽろと涙をこぼし始めた。隣で聴いていた私はあの光景が忘れられない。

その話の中で、父がボソッと話したことがある。

「少しでもたくさん働いて1円でも多く税金を納めるんだ。あの時に助けてもらった恩返しをしているんだよ。」

私には父が何を言っていたのかさっぱりわからず勇気を出して父にどういう意味なのかをたずねてみた。

7月初旬に入院した弟が9月中旬に退院する時病院で医療費を払おうとした父はその金額にがくぜんとしていた。しかしすぐに病院職員さんが、この区では15歳まで医療費がまったくかからない為今回も1円も支払わなくて良いことを教えてくれてとても安心したという。父はこの時に「息子さんのご恩は税金でしっかりお返しする」ことを胸に誓ったのだ。

この夏、税について考える機会をいただいたおかげでこのエピソードを2年ぶりに思い出した。そして自分なりにいろいろ考えてみた。税金というものは、その時に自分が人生でどういう場面を迎えているのかによって、まったく見え方も感じ方も違ってくるものなのではないだろうか。税金を支払う＝お金を取られてしまうと見えたり、感じたりすることもあるが、また違う視点から見ると税金を通して誰かを助けたり自分が助けられるかもしれないと感ずることもあると思う。事実12年前、私たち家族は税金に救われた。弟の生命はもちろん、父も母も経済的にも心理的にもどれだけ税という存在が心強かっただろうか。父はその事以来、税を納めることへの意識がまったく変わったそうだ。私もこの我が家のエピソードを聴いて改めて税を納めることに對する考え方が確かに変わった。

これからの私は、人生でいろいろなものがたりを体験するのだろう。そして時に税という「魔法」に助けられ、救われたりするのだろう。そしたら次は私が誰かに「魔法」をかける番だ。税を納めて見知らぬ誰かを救ったり、助けたりすることをぜひしてみたい。

ふじみ野市立葦原中学校3年
福寿 莉央

二〇二〇年、夏。

中学三年生の夏休みは、私が想像していたものとはまるで違っていた。

例年であれば、夏休みに様々な高等学校で進学イベントが開催されるが、新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐために、今年は開催しない学校が多かった。そのため、私はオンライン説明会に参加したり、受験情報誌を読んだりして情報を集めていた。少しでも自分の将来の選択肢を増やして、可能性を広げたいと思ったからだ。するとあるとき、興味深い記事を目にした。

WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業。二〇一九年度から始まった文部科学省による高校生のための事業で、イノベティブなグローバル人材の育成を目的に行われている。これは、高等学校等と国内外の大学、企業、国際機関等が協働し、高校生により高度な学びを提供する仕組みを構築するものである。

公立学校に通う中学生、高校生の教育費として一人につき、年間およそ一〇〇万円の税金が使われていることや、SSH、SGHなど、教育に関わることに多くの税金が使われていることは知っていたけれど、私はこの記事を読んで、昨年度からまた新たな事業が始まっていたことを知った。税金制度は、私たちの教育を常にいろいろな形で手厚くサポートしてくれている。学校という垣根を越えて、より良い教育環境を生み出すこの事業は、私たちに新たな選択肢を与えてくれる素晴らしいものだ、と感じた。

そして今、世界は新型コロナウイルスに関する多くの問題を抱えている。この難局を乗り越えるためには、世界の国々が協力し、一丸となって立ち向かう必要があるのだ。このような世の中だからこそ、WWLコンソーシアム構築支援事業は、今まさに求められている教育事業なのだと思う。

私たちに与えられた豊かな教育環境は決して当たり前なものではない。今回、新型コロナウイルスによる臨時休校を経て、私は改めてそう強く思った。学校に行くことが当たり前であったときには気づくことができなかった、教育を受けられることのありがたさ。一度、非日常を経験してみて初めて「見失いがちな本当の豊かさ」を知った。また、良い教育環境を整えてくれる税金制度も当たり前のもではなく、みんなが助け合い、協力することで存在しているものなのだ。

だから私は、今ある日常と税金制度にもっと感謝をして、残り少ない中学校生活を大切に過ごしていきたいと思う。そして将来、社会に貢献できる人となるために、今は受験勉強に励んでいく。

二〇二一年、春。

桜が満開に咲くことを信じて。

宮古市立崎山中学校3年

まえかわ かおる
前川 郁

僕は生まれつき視覚障害がある。

小さな頃から「見える」と「見えない」の間を行き来し、ぼんやりとする視界、見えそうでどうしても見えない世界にとまどいながらも、今まで過ごしてきた。

そんな僕は、色々な存在に支えられることによって、生活できている。家族やクラスメイト、そして様々な道具達が挙げられる。

拡大教科書は、小学校一年生の頃からお世話になっている。小さな文字が見えない僕は、文字や資料がはっきりと大きく載っているこの教科書を使うことで、みんなと同じ教室で、授業を受けることができている。

みんなと同じ環境で授業を受ける際に、もう一つ欠かせない道具が単眼鏡だ。長さ八センチメートルほどのそれは、遠くのものが見えない僕の目となり、黒板の字を読み取る手助けをしてくれる。使い慣れた今では、まるで体の一部のように扱える。

他にも、光に弱い僕の目に合わせて特別に作ってもらった眼鏡。慣れない道や、初めての場所を歩く時などに、様々な用途で活躍してくれる白杖。

たくさんの道具が僕を支えてくれていて、一つ一つが「相棒」のような大切な存在である。そんな道具達が税金でできていると耳にしたのは、つい最近のことだ。

それは、ある日母が言った一言がきっかけだった。

「あんたが今、拡大教科書や単眼鏡を使えているのは、みんな税金のおかげなんだから、たくさんの人に感謝しなきゃいけないよ。」

と言われ、初めて知ったのだ。視覚障害者である僕が、今までみんなと同じ教室で勉強したり、行事や部活に積極的に参加でき、みんなと同じように、泣いて笑って、充実した学校生活を送ることができているのが、税金のおかげだと思うと、感謝してもしきれない。

また同時に「とても心強いな」とも思った。まるで、僕の背中を押してくれる、応援団がいるような気分になったからである。

そんな応援にこたえるために、

「自分には何ができるだろう？」

と、必死で考えた。そして、その答えは「勉強すること」に至った。

理由は二つある。まず、僕の学校生活を支えてくれていることに感謝し、そのことに純粹に応えるため。

そして、その学びが未来へのバトンとなり、夢へ向かってつき進む力となると信じているからである。さらにその先には、税金を払う立場となり、将来生まれてくるかもしれない、同じ境遇の子供達を支えてあげようと、決心した。

税金は障害者と健常者、そして過去と未来を繋ぐバトンのようなものだと僕は感じた。バトンを繋いでくれる人がこれからもたくさん増えていき、自分もその一員となり、新たな世代に繋ぐ、立派なランナーになりたい。

こんなに近くに…

札幌市立篠路西中学校 3年 石戸 柚衣

私の伯母夫婦は、青森で飲食店を経営しています。ラーメン屋です。昨年初めて私がそこへ行った時、すごく繁盛していたのを覚えています。注文の電話も絶えずにかかってくるたくさんの人に愛されているお店です。私の家にも頻繁に生麺を送ってくれるので、私は毎回その日を楽しみに過ごしています。

しかし今、新型コロナウイルスの影響により、お客様の数が急激に減少してしまったと聞きました。私はそれを聞き、お店がすごく心配になりました。そのため、伯母に聞いてみることにしたのです。すると、「売り上げが全然なくて困ったよ。お店の準備はしてあるのにお客さんが来ないから食材も余る。でも人件費はかかる。大変だったよ。」私は不安で胸がいっぱいになりました。けれど次の言葉を聞きホッとすることができたのです。「でも県や市などから支援金があったから、お店をなくさなくて済んだんだ。本当に感謝してもしきれないよ…。」

その後、私はそれが税金からでているお金だと知りました。こんなに感謝の気持ちでいっぱいになっている伯母を見るのは初めてでした。新型コロナウイルスによって国全体が大変な状況にあるにも関わらず、第一に国民のことを考えた税の使い方をしてくれていることに私も感謝してもしきれないです。そして、このようなことを身近に感じられたことにより、私は“税は国民が健康に幸せに安心して生きるために使われている”と知ることができました。税はたくさんの人々を救っているのです。すなわち、税は人が人を助けるシステムであると言えます。そして、それこそが税が存在し、私たちが税を納めなければならない最大の理由であると考えます。

普段、普通に生活をしていると、税の意義が気がつくことは難しいと思います。だからこそ、そのことを知ることができた私が、周りの人に税の大切さを伝えていくべきだと考えます。そのためにはまず、人々が税についてどのように考えているかを知る必要があります。内閣府のデータによると、まず税金に興味がないという人が二割以上いることがわかっています。そして七割以上の人が税について不公平があると思っています。しかし、そのように考えている人々も何度も税に助けられているはずです。今年は、新型コロナウイルスの影響を受け、ほとんどの人が税に助けられました。

中学生の私たちが払う主な税は“消費税”です。私たちは消費税によって、たくさんの人々の生活を支えています。そのことを理解しておくことで、税について興味がない人々や不公平だと考えている人々の考え方が変わると思います。だからこそ私は多くの人に広めていきたいです。

こんなに近くで感じられた税の大切さ、ありがたみを。

収入がなくなった日

幕別町立札幌内中学校 3年 佐藤 柚衣

「北海道は、大変な状況だけど大丈夫？」

一本の電話がかかってきた。母の同業者からの一言だった。

私の母の仕事は習字教室の先生だ。月曜日から金曜日までフルで働き、充実した毎日を送っていた。そんな中、今年の二月、日本各地で新型コロナウイルス感染症という病気が広まり、北海道ではいち早く緊急事態宣言が発表された。学校が休校となり、外出を自粛するようになると会見が開かれた。母は自営業なので、仕事の休業中はもちろん収入がない。ここから数ヶ月、収入がなくなることはまだ想像していなかった。三週間の自粛期間が終わり、母も仕事に復帰しましたが、借りている施設では、感染拡大を防ぐため、いろいろなルールが決まり、以前より練習の回数も時間も減りそれが理由で収入が、半分になってしまった。通常の仕事へ戻ることを祈りながら四週間経ったとき、新型コロナウイルス感染者の拡大が収まらず、今度は国に緊急事態宣言が発令された。復帰できることを期待していたが、そのまま緊急事態宣言の延長が決まり、いよいよ生活に支障がでてきた。三月から五月末までほとんど収入がなくなり、仕事で支払わないといけないものは待ってもらっている状態だった。母は、この状況がいつまで続くのだろうというものすごい不安の中暮らしていた。

そんな中神奈川県に住んでいる同営業の先生から連絡がきた。母は今の状況や不安な気持ちを全て伝えた。その先生から「持続化給付金」という制度があることを教えてもらい母はその制度のことを知らなかったのですぐ調べることにした。この制度は、返済の必要がない給付金で今年一月から十二月までのいずれかの月に、売り上げが去年の半分以上減少していることが条件と書かれていた。そして自分もその対象であることが分かり、申請するだけしてみようと早速、手続きを開始した。少し諦めかけていたある日、一通のハガキが届いた。開けてみると、持続化給付金の給付を知らせるものだった。この通知のおかげで母はもちろん家族みんなの不安な気持ちが少しずつ明るくなり、家の中の重い空気が軽くなっていくことを感じた。

「税金」と聞くと、消費税が自分の一番身近にあり今までは良いイメージではなかったが、この給付金が支給されたことで、自分たちが納めた税が本当に困っている人へ届くことを知り、改めて大切なことなのだと考えが変わった。まだまだ、不安定な状況ということには変わらないが、これからも手を差しのべている多くの人に届くことを願っています。

トリセツのすすめ

風間浦村立風間浦中学校 1年 五十洲 ひなた

「十万円って、すごいよね。もらったら、何に使う？」

今、世界中を大混乱の渦に巻きこんでいる『新型コロナウイルス感染症』。日本でも各地で感染が報告され、ある日突然学校が、臨時休校になった。小学校生活最後の日は、保護者だけの卒業式という淋しい形で終わりを迎えた。日本中が、不安に包まれていた。幸い私の学校は、どうにか授業が再開されたが、社会的には外出自粛、休業要請などによる悪影響が広がっていた。

そんな中、国は経済対策として、日本に住む全ての人に一律十万円の支給を決定した。誰でも一人十万円というところに公平性を感じたが、同時に、年齢制限もなく受け取れることに、とても驚いた。中学生に十万円なんて、信じられない。けれど、根が単純な私は十万円という金額に、いろいろな妄想が頭の中をかけ巡った。(ディズニーランドに行こうか、美味しい物を食べようか、いや、やっぱり貯金しておこうか。)と、億万長者気取りで心が浮かれた。しかし、つらいニュースを見る度に、そんな気分は薄れていった。

私は今まで「税」について、全く関心を持ったことがない。知っていたのは、買い物をする時に払う消費税ぐらいだ。授業では、私たちが毎日、学校に通えること、教科書、机やイス、教材などのほとんどが、税金で支えられていることを学んだ。他にも救急車や警察、道路や橋、ごみの処理など、私たちが安全で快適に生活できるために税金が使われている。それだけではない。税金は給付金という形で、使われていることが分かった。私も受けとった「特別定額給付金」だ。この給付金は、納税者が一生懸命働いて納めてくれた大切な税金であり、それによって苦しんでいる人、困っている人の支援につながると考えたら、とても素晴らしいことだと思った。私は初めて、税の大切さやありがたみを感じた。すると、その大切なお金を安易にもらってよいのかという気持ちがわきあがってきた。私のように、お楽しみ目的で使おうと考えた人も、きっといるはずだ。では、どうしたら納得のいく使い方ができるだろうか。

私は、以前から考えていたことを実行したいと思っている。貧困に陥っている外国の子どもたちに、六年間お世話になったランドセルを送りたいのだ。姉に相談すると、自分のランドセルもそうしようと賛成してくれた。また、自然災害に見舞われた人に役立ててもらえるように、ささやかでも募金をしてはどうかと、家族で話し合った。こうして、我が家の「取扱説明書」(トリセツ)ができた。

新型コロナウイルスの感染拡大は止まらず、さらに深刻化している。災害もいつやってくるか予測できないものだ。そんな今だからこそ、みんなで支え、助け合うことのできる税の制度に関心を持ち、もっと真剣に考えていきたいと思う。

次世代科学技術の発展に向けて

茨城県立並木中等教育学校 2年 野末 紗良

六月に、理化学研究所のスーパーコンピュータ「富岳」が、超大規模グラフの探索能力で計算機を評価し、ビッグデータ分析などの性能を示す「Graph500」に四部門で同時に一位を獲得した。驚くべきことにまだ本格的に始動していないが、新型コロナウイルス対策の研究などに既に利用され始めている。私はこの記事を目にした時、四つもの分野で首位を取ったことに驚きを覚えると共に、現在の私達の生活に直結した問題に「富岳」が利用されていることに敬服した。

このような偉業を成し遂げ、今後も開発が進むであろう「富岳」だが、実はこれを生み出すのに約一一〇〇億円もの国費、つまり税金が使われている。それは、文教及び科学振興費だ。

文教及び科学振興費は、令和二年度の予算では、五兆五〇五五億円と税の歳出総額の約五・四%を占めている。主に、科学技術の育成や教育に役立てられている。例として、宇宙・航空分野の研究開発の推進に必要な「科学技術振興費」や、公立小・中学校の教員の給与の一部を負担している「義務教育費国庫負担金」や、国公立大学法人、私立学校の援助のための「教育振興助成費」が挙げられる。私たちが日々当たり前だと思っている教科書の配布や年間教育費の負担などは、我が国の税金の恩恵を受けているのだ。

また、私の通っている学校の活動においても、税金で支えられていることを知った。それはSSH（スーパーサイエンスハイスクール）指定校の支援だ。SSHに指定された学校は年間七～十三百万円の支援を受けている。私たちはこの支援のおかげで、日々、様々な化学実験を体験することができ、さらには全員分のタブレットやパソコンが支給され、最先端の教育を受けることができる。私は、この事実を知ることによって、私たちが受けている教育は、将来、我が国の未来を支える私たちへの貴重な投資なのではないかと考えた。そして、私たちは、我が国の科学技術の発展に貢献するため、更なる努力をしなければならないと痛感した。

最後に、我が国が抱える深刻な問題として少子高齢化がある。二十一世紀半には、国民の二・五人に一人が六十五歳以上の超高齢化社会が訪れると言われている。少子高齢化の問題は、高齢化により社会保障関係費が増え、少子化によりその費用を負担する担い手が減ってしまうことだ。将来の我が国を支える私たちが今できることは何だろうか。

私は、少子化を補うために、人工知能を備えたロボットなどを開発することだと考える。これらのロボットは、高齢者の介護支援、農業や漁業等の第一次産業の担い手になり得ると思う。それらを実現するためには、現在の教育システムを活用し、最先端の科学技術を学ぶことが大切だ。そして、近い将来、我が国を支える人材になりたい。

幸せな暮らしと税

大田原市立大田原中学校 3年 君島 陽依

「どうして私だけお金貰えるの？」

当時小学生だった私は、時々先生に渡されるお金を疑問に思い、母に尋ねた。

私は幼いころから母子家庭で育った。母は仕事が忙しく、小さい頃はよく祖父母の家で母の帰りを待っていた。小学校高学年になると、一人で家で過ごすことが増えたが、私は何不自由なく暮らしてきた。そして私は母に見送られながら毎日元気に登校した。ある時私は、先生に渡される少し重たい封筒を疑問に思った。その封筒には決まってお金が入っていたのだ。いつも封筒を渡されるのは私だけだった。私は思い切って母に聞いてみた。

「ねえお母さん、この封筒何？ どうして私だけお金貰えるの？」

すると母は静かにこう答えた。

「うちはお母さんだけだから、市から支給してもらえるんだよ。」

初めて知った。私が今まで普通に生活できてきたのは、一生懸命働いてくれていた母と、市からの支援のおかげだったのだ。その時、母にこんなことを言わせてしまったことの罪悪感と、母への感謝の気持ちが同時にこみ上げてきて、何も返すことができなかった。

私がもらっていたのは「児童扶養手当」という、税金からまかなわれる補助金だった。今回、税について調べたところ、他にも医療費を助成してもらえる制度など、たくさんの支援を受けていたことが分かった。私は税金からの支援のおかげで普通の生活ができていたのだ。普通の生活ができることがどれだけ幸せなことなのか、私は税金を通し改めて知ることができた。

税金は払うばかりでなく、思わぬところで私たちの暮らしを支えてくれていた。このことを身をもって感じた私は、税金に感謝しなければならない。自分が納めた税金は誰かの暮らしの支えになり、誰かが納めた税金が自分の暮らしの支えにもなっている。こうして国民が国民を互いに助け合っていたのだ。現在、私はまだ中学生で、税金を納めることよりも、税金にお世話になっていることの方が多くある。幸せな暮らしがあたりまえにできていることに心から感謝し、進路の実現に向け学習に励んでいこうと思う。そしていつか私が社会人になったとき、社会に貢献できる仕事に就き、今までの恩返しを社会貢献という形で返していきたいと思っている。

そして今回、税について真剣に考えたことで、日本国民の生活が豊かになっているのは税金のおかげだということが分かった。国民一人一人が納めている税金で、日本国民全員の幸せが実現することを私は願っている。

税金について

富岡市立富岡中学校3年 菊地 祐衣

夏休みが始まってすぐに、私はある実話を耳にしました。それは、二十歳という若さで病気により亡くなってしまった女性の話です。彼女は、東南アジアの貧しい農村に暮らしていました。彼女の家はとても貧しく、稼ぎ手の父親には仕事がなく、母親は病死してしまい、残されたのは彼女とたくさんの弟妹たちでした。そのため彼女が家族を養っていくため働きますが、大人たちの暴力や恐怖にあい、怯えながらも必死に働いていました。そんな時、病気を発症してしまったのです。

その彼女が亡くなる前の最後の言葉は「私には夢があった。学校へ行って勉強というものをしてみたかった。もし勉強することができたら、私みたいな子どもを売る人を捕まえる警察官になれるから…」とありました。

私は、これを耳にして、とても衝撃を受けました。日本では小学校、中学校は義務教育でみんなが当然のように学校に行くことができます。病院を受診した時も富岡では中学生まで無料です。学校で学ぶことや医療費が「税金」という制度により補われ、今こうして安心して生活できていることを当たり前と思っていました。そうではない人達がいることを知り、「私たちは税金の助けがあるからこそ学校に行け、病院にかかれるのだ。」と考えさせられました。

何より、彼女がなりたかった警察官も税金があるからこそ働ける仕事であって、税金がなければ犯罪の防止や社会の安全と秩序を維持する事も出来なくなり、怯えながら生活をしていかなければならなくなってしまうと思います。そして、毎日、三六五日、怯えながら生活していくのは精神的ストレスなど心身に悪影響をおよぼし、倒れるような事があっても、税金がなければ救急車も呼べず、そのまま命を落としてしまう、そして誰もその人の亡骸を葬り、供養することもできないと思います。

今、私は、税金という制度があるおかげで小学校を卒業し、中学校で勉強や部活をしてきました。でも、これは当たり前ではないという事に改めて気付くことができました。彼女がしたかった勉強、病気を治すための病院、なりたかった警察官、この全ては税金があるからこそ成り立っているのです。

税金とは人が安心・安全に暮らせるために必要なものなんだ！と思います。この世界のどこかに、教育を受けられない人がいると知り、勉強ができることは幸せなことなんだ、と私は感じました。私にはまだ明確な夢は無いけれど、将来なりたい職業、彼女で言うならば警察官のように、私はなりたいものになり、きちんと税金を払って、彼女のように教育を受けることが出来なかった人の為にも、しっかりとこの国に貢献していきたいと思います。

税があつてこそ

さいたま市立浦和中学校3年 野口 花鈴

みなさんは、ヘルプマークというものをご存知でしょうか。

私は、WPW（ウォルフ・パーキンソン・ホワイト）症候群という持病を抱えています。これは、簡単にいうと不整脈を起こすことがある病気です。このような、内部障害や難病の患者、義足や人工関節を使用している患者、精神障害、知的障害の人等、援助や配慮を必要としていることが外見では分からない人々が周りに配慮が必要なことを知らせることで、援助を得やすくなるように作成された東京都によるピクトグラムというのが、ヘルプマークです。

私はこのヘルプマークのデザインを用いて作られた、ヘルプカードをいつも持ち歩いています。緊急連絡先や病名などが記載されており、万が一の時に周りに理解や支援を求めるためのものです。

そして、そのヘルプカードは、税金によって作られているそうです。

それを知った今、私は税金というものの意義を身に染みて感じました。いつ発作が起こるか分からない病気を抱えながら生活するには、不安が伴います。しかし、私は毎日をととても楽しく、笑顔で過ごせています。ヘルプカードがあることで周囲の人々は病気について理解してくれて、いざとなったら助けを求めることができるからです。

つまり、税金によって、私の生活はとても支えられています。

また、ヘルプカードに限らず、税金は様々な所で私の生活を支えてくれています。登下校時に安全で整備された道を通れるのも、学校で授業を受けることができるのも、消防や警察がまちを守ってくれることで安心して暮らせるのも、税金があつてこそです。

私の生活に、税金は必要不可欠です。

しかし、私は税金にありがたみを感じられているのでしょうか。答えはNOでしょう。今の安定した生活に慣れてしまっているのだと思います。もし税金が無かったら、今の生き生きとした私の姿はないでしょう。私はこの作文を通して、二つの強い意志を持つことができました。一つ目は、税金を納めてくださっている人々への感謝を忘れない、ということです。私の生活は、笑顔は、納税してくれる人がいなければ成り立ちません。それはとても大切なこと、忘れてはいけないことだと強く感じました。二つ目は、将来しっかりと納税をしようという思いを持てた、ということです。納税をして今まで助けてくださった人々に恩返しするとともに、税金の大切さや重要さを後世の子どもに伝え、より良い社会をつくるのに繋がっていくと思います。

社会をつくる一員として、立派な大人になりたいです。

世界で一番幸せな美しい島

新潟大学附属新潟中学校 3年 福井 愛朝

「All's right with the world.」

私は昨年夏、小説「赤毛のアン」の舞台であるカナダのプリンスエドワード島を訪ねた。島在住のメイソン夫妻に案内をお願いした。島は小説に描かれたとおりの美しい島であったが、何よりもメイソン夫妻をはじめ、島の人たちの温かさにふれられたことは嬉しいことであった。冒頭の英文は、小説の最後でアンが、義父が亡くなったことにより夢であった大学をあきらめ、義母のため、家の近くの学校の教師になるという新しい夢に向かって走り出す時の言葉である。「きっと全てうまくいく。」という意味である。私は旅行中ずっとアンという言葉と島の人々の姿と重ねながら過ごしていた。プリンスエドワード島は、決して夢の国ではない。日本人と同じく、島の人々も生活のため、毎日一生懸命働いている。しかし、私たちより幸せそうに見えた。

「カナダでは、医療費と幼稚園から高校までの学費は全て無償なんです。」

メイソンさんの言葉に驚いた。しかし、その理由が分かった。カナダでは消費税が、国税と州税、それを併せた HST という三種の税がある。プリンスエドワード島州では、HST を導入しており税率十五パーセント。日本に比べてかなり高い。大抵外税のため、買い物をした思ったよりも高額になってしまうということがよくあった。しかし野菜など、毎日の生活に必要なものには税金はかからない。私は消費税の意味を改めて考え直した。島の人にとって、消費税は自分に返ってくるお金であると同時に、社会の人に還元されるお金なのだ。自分の生活にちょっと潤いがほしいときに、同時に他の人もちょっと幸せにできるお金なのだ。それを島の人たちは知っていた。このようなお金の使い方もあるのだ。

私の祖母は、佐渡で小さな小売店を営んでいる。この春より、新型コロナウイルスの影響で、お客が激減した。売り上げが減少し、生活も苦しくなった。その時救ってくれたのが、特別給付金の十万円だ。人によってはたかだか十万円かもしれないが、祖母にとってどんなにありがたかったことか。このお金も税金から賄われている。

脳科学者の茂木健一郎さんは、赤毛のアンは希望の物語だという。希望は人と人のつながりによって紡がれ、人を勇気づける。税金も本来同じ役割があるのではないか。人は税金によっても繋がれるし、助け合える。私は来春高校受験に挑戦する。私の目指す高校もまた多くの税金によって支えられている。

「All's right with the world.」

人生もきつとうまくいく。なぜなら助けてくれる多くの人がいるから。そして、私も誰かを助けられる「多く」の一人だから。

私はアンのおふくささと、プリンスエドワード島の人たちが私たちより少し幸せに見えた理由が分かったような気がした。

少子高齢化と向き合う

白馬村立白馬中学校 3年 奥野 結愛

「日本は少子高齢化が進んでいる」日常生活でよく耳にする言葉だ。事実、日本人の平均寿命は四〇年の間で十歳も伸びており、二〇一九年には男性が八一・四一歳で世界三位、女性が八七・四五歳で世界二位となった。

日本では社会問題の一つとして少子高齢化が挙げられるが、世界でもまた、日本とは異なる社会問題が起きている。例えば、ヨーロッパの国々では、飼い犬への虐待や放棄するといった社会問題が起きている。また、オーストラリアでは「貧富の差があって教育を受けられない」という社会問題が起きている。これらの問題に対して、各国で税金を使った対策が行われている。まず、ヨーロッパの国々では犬税が課せられている。これは、人に住民税が課せられるのと同じように、犬にも税金が課せられるものだ。そして、税金は街に備えられている犬のフンを始末するためのエチケット袋などに使われる。次に、オーストラリアでは学位税が課せられている。これは、国立大学の入学時に国が授業料を負担し、卒業後に自分が学費を負担するものだ。しかし、学位税を払うのは卒業後に一定の収入がある人のみであり、それがない人は無税となる。そして、税金は大学の運営のために使われる。このように、世界では税金ごとに使い道を分け、社会問題の解決に役立てている。

一方、日本では税金全体を分配している。このやり方の利点は、税金による一部の使い道への偏りが少ないことである。

では、日本の税金はどんなことに使われているのだろうか。最も割合が高いものは社会保障費であり、全体の約三分の一を占めている。この割合は近年増加しており、これからも少子高齢化に伴って増加していきだろう。少子高齢化が進む日本にとって、社会保障費の割合の増加は、せざるを得ないのだ。

社会保障費の中でも年金の割合が最も高く、次に医療、介護・福祉と続いている。この割合を見ると、高齢者が望むものが上位を占めていることが分かる。しかし、若い世代が望む、子育てや教育の割合の増加についても重視しなければならない。これらを充実させなければ、少子化が進む一方だからだ。

現在の日本のように、税の使い道の中で社会保障費の割合を増加するのは、少子高齢化が進む日本に適している。しかし、これからの時代を担っていく若い世代を育てていくことも必要だ。高齢者が望むものと若い世代が望むもの、この二つにバランス良く税金を使っていくことが、少子高齢化が進む日本で生きていく上で大切なことである。

復興特別所得税に興味を持って

足立区立第四中学校1年 御山 理子

保育園の昼寝のときでした。「ズドン」という激しい揺れと、みんなの騒ぎ声で起きた私は、すぐにこの揺れが地震だと分かりました。先生や友達と部屋の真ん中に集まり、友達が泣いていたことを今でも覚えています。その日、テレビからは、津波で家や建物がすべて流されてしまっている東北の被災地の様子がたくさん放送されていました。まだ四歳だった私も、それを見て子どもながらにとっても大変なことが起きているのが分かりました。ここに暮らしていた人たちは、この先どうなってしまうのだろう、と考えていました。

あれから九年たち、私は中学校の宿題で税金について調べてみようと思いました。普段の生活で知っている消費税以外に、どんな税金があるのか調べてみると、所得税、住民税のほか、数えきれないほどの種類があることが分かりました。その中で特に目に止まったのは、「復興特別所得税」という税金です。

この税金は、私も経験した東日本大震災の復興に必要な財源を確保するための税金で、二〇一三年からの二十五年間、所得税額の二・一パーセントを納めます。そうして集められたお金は主に、仮設住宅の提供、堤防や道路などの復旧、放射能汚染地域の除染などに使われています。私は生まれてからずっと東京で暮らしていますが、東北以外の場所で生まれ育ち、親せきや知り合いも東北におらず、旅行にも行ったことがない人達もみんな、被災地が復興するように願い、公平・平等に協力しあって税金を納めているのだと分かりました。この集め方こそが、税金の仕組みで最も大切なことかもしれないと思います。

しかし、残念なことに、この税金が直接復興に関係しているとは考えづらいことに使われていることも知りました。一つ例を挙げると、ご当地アイドルのイベントなどへの支援です。もしかしたら、極めて間接的には、関連することがあるのかもしれませんが。ただ、このような分かりづらいことに使われているのは、私たち国民が税金の使い道に興味を持っていないことも一つの原因だと思います。自分が納めた税金が、どのような仕組みで何に使われているのか、もっと多くの人に関心を持つことが必要です。

ここで取り上げた復興特別所得税は、さまざまな税金の中のほんの一部です。税金は、私たちの暮らしに必要な施設や道路の建設や維持、また年金や医療などの社会保障、子どもの教育などを国民全体に広く行き渡らせるためのものです。よってしっかり納めるのはもちろんのこと、同時に、納めた税金が何に使われるのか、使い道にも関心を持ってもらいたいし、私も将来そのようなことに関心を持って、税金を納めていくつもりです。

私はあと五年で選挙権を得ます。そのときには、税金の使い道の公約について、学んだことを生かし自分なりに考えて、投票したいと思います。

未来へ繋ぐ税のバトン

板橋区立赤塚第二中学校 2年 佐藤 なな

「税金が高いなあ。」税についての作文を書こうとした時、おじいちゃんがつぶやいていた言葉を思い出した。そのおじいちゃんは、昨年5月に68才で亡くなってしまった。つぶやいていた言葉の意味は分からず、尋ねる事ももうできない。自分で調べてみる事にした。おじいちゃんは会社を経営していたため、所得税の他にも法人税をたくさん納めていた事が分かった。働きはじめてから約45年間、ひと月もかかさずしっかり税を納めていた。

そして調べていくうちに疑問がでてきた。税金により年金、医療、福祉、教育、公共サービスが支えられている。病気になった時や老後の安心の為の貯金とも言えるのではないだろうか？しかし、おじいちゃんは頑張ってたくさん働いて納めていたのに、年金も医療も福祉もあまり受ける事なく亡くなってしまった。納めてばかりで自分は貰えなかったなんて悲しいし、可哀想だと感じた。おじいちゃんの納めていた税金は一体どこへ行ってしまったのだろうか？ちゃんと使われているのか、誰に使われているのか？無駄にされていたらもったいない！雑な使い方をしている人がいるならきちんと使ってほしい！その行方を知りたいと思った。

令和2年度の歳出額内訳をみると、社会保障や公共事業、教育、地方交付金に約70%があてられていた。病気になってしまったら病院へ。万が一の場合は警察や消防、救急へ。整備された安全な町で安心して学び、働き誰もが暮らしていける。その日々のために税金が使われていた。あたりまえにある日常のために。朝起きて、ゴミをだし、綺麗な道で信号を渡り学校へ行く。おいしい給食を食べて帰宅後図書館で好きな本をたくさん借りる。時には風邪をひいたり持病の鼻血で病院へ行き綺麗な水で体を洗い寝る。

おじいちゃんの納めていた税金の行方。使っているのは他にもない。私だった。

これから先、事件や事故にあってしまうこともあるかもしれない。きっとその時は警察や救急に助けてもらうのだろう。今の私だけではなく、未来の私も守られている事に気づいた。この平和な日常がいつまでも続くように、大切な人誰もが守られ続けるように、大人になって働くようになったら私も税金を納めたい。そのために今はしっかり勉強をして高校に行き、さらに学びたいと思う。

過去から現在。現在から未来へと税のバトンを繋ぐリレーの中に私はいる。たくさんの人々が繋ぎ、築いてくれた助け合える今に感謝したい。そしていつの日か「高いなあ」とつぶやけるくらい税金を納めて感謝される側になりたい。

君のために

鎌ヶ谷市立鎌ヶ谷中学校 2年 升谷 文音

「ピーポー、ピーポー。」

「コロナの患者さんかな。」

病院の近くにある私の家ではよく救急車の音が聞こえてくる。その音を聞くと、私が救急車で運ばれたことを思い出し、感謝の気持ちがわいてくる。小学校四年生の時、不注意で大怪我をし、救急車で運ばれたのだ。救急車の音を聞きながら、今、乗っている人も私と同じ気持ちなのかなと思った。

あの時、こうも思った。周りの人が救急車を呼び、運ばれていく流れの中で私は何か足りないものを感じていた。バスやタクシーは料金を払う。ジェットコースターも料金を払う。でもこの救急車に私は料金を払っていない。「誰が払うんだろう…。」

調べてみると、救急車は税金で動いているということだった。そればかりではない。例えば、新型コロナウイルスの感染者が増える中、必要な医療機材、医療体制の整備、隔離するために必要な費用など、多くのものも税金で賄われているということだった。

さらに調べてみると、他にも様々な用途で使われていた。道路や橋、水道や電気などの日常生活にかかせないもの、災害や事故に遭った人達への生活保障、そして世界の人々を助けるためのODAなどである。

このように、税金は国民の命や健康と豊かな生活を守り、世界の人々を助けるために使われていることが分かった。つまり、税金は現代に生きている人々を支えているのだ。

調べていく中で、もう一つ気が付いた。学校や研究所である。

教科書の裏表紙には『これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。』と書かれている。私達が将来大人になった時に、たくさんの人の役に立てるよう、素晴らしい社会を築ける人になれるよう、願いが込められている。

また、南極でのオゾン層の観測、介護に役立つ福祉ロボットの開発、自動・安全運転を可能にするAIなど、税金は未来の環境や技術を支えている。

よく考えてみると、今の私達の生活や技術が前より発展しているということにも過去に納めた税金が役立っていると分かる。とすると、今私達が納めている税金が将来の新たな日本につながっているということである。つまり、税金は未来に生きる人々を応援しているのだ。そう思うと、なんだか少しうれしくなった。

今夜も救急車の音を聞きながら、私は思う。今の私達が幸せにいるのは、過去に税金を納めてくれた人と現在税金を納めてくれている人のおかげであるということ。そして、これから私は、現代の私達と未来の人々のために税で支えていきたいと。

十五の私にできる納税

木更津市立太田中学校3年 鈴木 さくら

昨年の春、私はSDGs（エスディーゼーズ）について学ぶ研修に参加し、開発途上国のインドネシアを視察しました。この研修は、自分の目で現状を見て、それぞれの国の抱えている問題を知ること、自分には何ができるのかを考えることでした。SDGsとは、世界が公平に今も将来も幸せに暮らせる持続可能な社会を目指して、一人ひとりが行動を起こそうというものです。そして、全てに共通するテーマは「誰も置きざりにしない」です。一部の国や一部の人が幸せになるのではなく、人間も生き物も自然も、未来のよりよい生活を目指そうという意味があります。

現地では、スマトラ島のジャングル地域に暮らす子どもたちの教育事情や、水・トイレの衛生と安全についての厳しい現状を目の当たりにしました。社会保障が不十分で、小さなコミュニティーに対する下水道の普及の遅れが深刻な問題となっていました。また、学校を建てても、親の就労事情により、弟や妹の面倒をみるために学校に通えない実情があることも知りました。私は、日本での自身の生活環境の安全・安心・インフラの充実など、当たり前と思っていた生活環境のありがたみを改めて感じました。

私たちの生活の安全が税金によって維持されていることは学校でも学んでいます。社会全体で助け合う「税」という仕組みが、日本国内だけでなく、国際協力活動の資金として使われていることも学習しています。先進国と位置づけられている日本でも、国内資源だけでは生活できません。食料自給率は低く、エネルギー資源の八十パーセントを外国に頼っています。世界の国々が、地球という一つの生活圏を共有している以上、足りない資源や技術、食物、資金等で、お互い助け合うことが不可欠です。一部の国だけ、一部の人が幸せになるのではなく、皆が幸せに暮らせる社会づくりに協力していく責任が私たちにはあります。それらを実現するために必要なお金こそが、一人ひとりの納税によってプールされるのです。十五の私も、日常的に税を納め協力しています。それは「消費税」です。

皆、貯金が増えることは喜ぶます。しかし、税金という響きは「とられる」というマイナスのイメージに捉えられがちです。でも税を正しく理解すれば、なくてはならない助け合いの貯金と捉えることができます。私がいちばん買った時に納める消費税も、「とられる税」ではなく、「相互援助のための助け合い貯金」に協力していると捉えることができます。

十五の私にできる納税ー買い物プラス消費税に「ありがとう」そして「よろしく頼む」という思いを込めて、これからも、日本と世界を救う「税」に向き合っていきたいと思います。

その日常に感謝を込めて

横浜市立義務教育学校西金沢学園中学部 9年 盛田 海

毎日学校に行くことができ、部活動に打ち込み、学習塾で学ぶことができる。私たちは、このように自分の為に費やせる時間が一日の内のほとんどを占める。そんな自由な日常の土台は税金によって築かれているのだ。「税」の存在をどこか遠いもののように感じるのは、私たちが税について考える機会が少なく興味関心が薄いことで、身近に潜むあらゆる「税」に気付かないからだと思う。

「もし税金を誰も払わなくなったら」そう考えたことはあるだろうか。世界には、実際に教育面にあまり税金が回されていない国がある。その一つがネパールだ。私は、「ヒマラヤに学校をつくる」という本を読んだことがある。この本は、二十二歳でネパールに渡った著者が貧困を目の当たりにし、子供達のために学校設立に尽力する二十二年間の軌跡を描いた物語だ。私はこの本を読み、当時のネパールの子供達の生活に衝撃を受けた。日もまだ昇らぬ薄暗いほどの早朝に起きて家の仕事を手伝い、それから何時間も山道を歩き学校に通う。しかし、学校でも慢性的な教師や施設不足により、十分な教育を受けられない。更に下校後も家族を手伝う。学校の建設は募金によって集められた資金で賄われ、そこに税金は使われないため、教育の必要性も伝わらず環境を整えるだけでもかなり厳しい。現在のネパールでは、就学前教育、初等教育、前期中等教育、中期中等教育、そして後期中等教育という教育システムが成り立っている。また、初等教育の五年間のみ無償で授業を受けられるため、入学率はとて高くなった。しかし、いずれも義務教育ではなく、貧困などの理由で卒業できるのは六割強にとどまり進学率も低い。ジェンダー格差も解消されていないのが現実だ。このようなネパールの状況から、社会全体で教育を推進しその必要性への理解を広めるためにも、税金で多くの子供達が新たな扉を開くきっかけにするべきだと思う。

私は今は税金を払う側ではないが、見知らぬ誰かが納めてくれた税金によって自由に暮らすことができる。何の障害もなく学べることは、とても幸せな事だと心から思う。これも、税に関する制度が整った日本という恵まれた国だからこそだ。私は将来、小学校や国語科の教師として教育に関わりたい。その時には、全力で学び遊べる当たり前の日常は誰かに支えられて作られていること、その優しさは自分の近くに溢れていることを伝えたいと思う。教科書も、机も、椅子も、図書室の本も、全て未来を担う私たちへ向けられた期待が込められている。私も大人になったら、誰かに支えられてきたように、今度は私が社会を支える番だという自覚をもって未来へ投資をするように税金をしっかりと納めたい。お互いに助け合うようにして広がった輪が、これからも小さな幸せにつながることを願っている。

僕の使っている公民の教科書のある一ページに飢餓に苦しむ幼い子供の写真が載っています。世界には日本のような比較的裕福な国もあれば飢餓に苦しむ貧困な国もあります。

僕は2年前オランダで生活をしていました。隣の国のドイツに家族旅行に行った時の事です。一人の男性と六歳くらいの男の子が道路に座り、お金を溜める為の缶を置き、プラカードを持っていました。そのプラカードには「この子に十分な教育を」と英語で書かれていました。世界には十分な教育を受ける事の出来ない子供がいる事を目の当たりにしました。

そしてこの作文を書くにあたって税金の仕組みについて調べたところ税金が発展途上国などの貧しい地域への支援となっている事を知り、驚きさらに詳しく調べてみる事にしました。

日本は発展途上国の方々に税金からお金を出し公共施設建設の援助や結核や肺炎などの病気を治す為の薬などを送る活動であるODAを行っているそうです。僕はこの活動の内容を知った時、国民のお金を他国に渡す必要があるのかと疑問に思いました。

しかし、よく調べてみた結果僕たちがジュースを買う程のわずかな金額で発展途上国の子供達に予防接種を受けてもらえる事が分かりました。僕は少し我慢をする事により子供たちの命を救えるのならODAは素晴らしい活動であると考え直しました。そして僕はODAで使用される税金は日本と世界を繋ぐ「架け橋」であると考えました。さらにODAは世界への恩返しでもあると思います。東日本大震災の時や、熊本地震、西日本豪雨などの災害の際資金援助やボランティア活動など日本が困難な局面で様々な復興支援を外国の方々にしてもらいました。日本はそれに応える使命があると思います。

僕は以前オランダであるNGOに所属する方の話を聞きました。その方は、「世界には十分な教育を受ける事が出来ない子供。十分に食事が出来ない子供。病気になり命が危ない子供。その子たちを救う事が私たちに出来る事なのです。」

とおっしゃっていました。僕は税金の力も必要だと感じました。世界には約八億人もの人が飢餓に陥っています。さらに発展途上国では千人のうち五十人が五歳の誕生日を迎える前に亡くなっているそうです。僕たちはこの現状をしっかりと受け止めなければいけません。

僕の教科書に載っている飢餓の子もドイツで見た子も税金により救われるかもしれません。僕はまだ税金を納める事は出来ませんが今後出来る事は架け橋を延ばす事です。橋を作るには鉄鋼が必要ですが架け橋の場合は、税金が必要不可欠な材料になります。

僕は教師になる事が夢です。もし夢が叶ったなら子供たちに税金の事や税金により助ける事の出来る人たちの事を、教えたいです。

かけ算九九が言えること

丹波山村立丹波中学校 1年 鶴田 佳宏

僕の父は海外で働いています。そのため、僕は小学校6年まで家族みんなでアフリカのいくつかの国々に住んでいました。毎年日本に一時帰国していたのですが、日本の街並みを見て毎回思うことがありました。(日本の道路はどうしてこんなにきれいなんだろう。)

僕が住んでいたアフリカの国々は、人々は優しく、美しい自然でいっぱいでしたが、道路に関してはとてもひどい状態でした。大きな穴があちらこちらに空いていて、中央の白線も消えかけてほとんど見えませんでした。雨になるともっとひどく、雨水がたまって穴が見えなくなるのでとても危険です。父はゆっくり運転しながら、いつも「マリオカートの世界みたいだな。」と言っていました。

また、日本との違いを強く感じたのは小学校3年の算数の授業です。僕は日本大使館から日本の教科書を支給してもらっていたので、家では日本のカリキュラムにそって勉強していました。ある日の算数の授業で、僕がかけ算の問題を解いて全問正解すると、クラスみんなに「えっ、頭が壊れちゃったの?」とビックリされました。どうしてかという、その時僕のクラスではまだ、足し算を勉強していたからです。

日本では、2年生が終わる頃には、多くの小学生がかけ算の九九を言えるようになります。しかし、僕の住んでいたアフリカの国では、2年生でかけ算ができる人はほとんどいません。5年でもできない人もいました。

道路がきれいに整備されていることや、小学校2年生でかけ算九九が言えることは、どちらも税金に関係します。かけ算九九が言えるということは、四則計算などの基礎的な教育がしっかり習得できているということです。これは将来専門的な知識や技術を習うためには絶対必要です。もしかけ算ができないまま大人になってしまったら、将来「みんなが困らないようにしっかりした道路をつくる仕事に就きたい」と思っても難しいでしょう。

今回、これをきっかけに日本の教育の歴史について調べると、日本の義務教育の無償化は一九〇〇年から始まっていることが分かりました。もう一二〇年も続いていることになります。また、授業料の無償化に加えて、僕たちが使っている教科書や、先生方の給料も税金から払われていることも分かりました。このように、税金を教育のためにしっかり使い続ける積み重ねによって、教育が安定するのだと分かりました。

国が発展するためには教育がとても重要です。今の大人の人たちが納めてくれている税金で僕たち中学生が教育を受け、自分たちが大人になった時は、今度は自分が納める税金で子どもたちが教育を受けられる。税金が教育や社会づくりにつながっているんだということを、もっともっと自分のこととしてとらえたいです。そして、勉強も運動もいろいろな活動もしていこうと僕は思いました。

日本のために、世界のために

入善町立入善西中学校 3年 本田 遥紀

みなさんはカンボジアという国を知っていますか。カンボジアはインドシナ半島の中心にある人口約1140万人の気候が温暖な国です。僕はそのカンボジアに昨年十二月に行つてある一つの驚くべき体験をしました。

僕があるカンボジアの有名なショップで買い物をしていた時の話です。お土産のバックを買い店員さんからおつりを返されました。そのおつりをよく見ると、なんと日本の国旗と大きな橋が描かれていたのです。なぜ日本の国旗がカンボジアのお金に描いてあるのか。大きな橋と日本はどんな関係があるのか。気になった僕は日本に帰国した後、調べてみる事にしました。お金に描いてあった橋は、「つばさ橋」と呼ばれ、日本が資金提供して2015年に架けられた橋です。この橋のおかげで今まで7時間かかっていた道をわずか5分で移動できるようになり、生産効率がとても上がったそうです。また、今まで日本は四回カンボジアに橋を架けていて、橋を架けるための資金は日本の税金によって賄われています。日本はODAという発展途上国への開発援助に税金を使っています。日本が発展途上国への支援をするメリットはないのではないかと思うかもしれませんが、支援をして支援した国の経済が発展していけば日本製の電化製品や車を買ってくれるかもしれません。支援をすることは結果的に日本の経済にも影響を与えることにつながるのです。

また日本は戦後まもなくして日本を復興させるための資金や力を外国の国から援助してもらい日本のインフラを整備したという過去があり、国際社会に対する恩返しをしたいという想いで他の国への援助を行っています。

このような理由から日本の税金はカンボジアの国道の整備や首都のプノンペン水道のインフラを先進国と変わらないぐらいまで整備したり、日本にカンボジアの留学生を受け入れ行政・公共政策・経済・法律などの分野で学びカンボジアに学んだ知識や技術を持ち帰るための人材育成奨学計画などの事業を立ち上げカンボジアの発展のために使われています。

僕はこのお金に描かれている絵は日本とカンボジアの友好の証であるということと、その関係を支えているのは税金であるということを知りました。僕の今までの税金に対するイメージはとても多くのお金を払わないといけないという大きな負担のようなものでしたが、調べていく内に生活を幸せにしたり、国と国が仲良くして互いに発展していくための原動力となるものだと思ふようになりました。

カンボジアの人々の笑顔を作った税金について深く学び、使い方を国民全員で考えていくことが今の国際社会に生きる僕達のすべきことだと僕はこの体験を通して学びました。

私の身のまわりである税金で支給されているものといえば教科書だ。

「この教科書はこれからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」

この二文は、教科書の後ろに書いてあるものだ。この二文に、深い意味を感じた出来事があった。これから、それを紹介していこうと思う。

私の祖母から聞いた話である。私の祖母は2歳の時に終戦をむかえ、福井地震にもあった。兄弟もたくさんいて、お金もなく、その時の生活は今では考えられないくらいだったそうだ。

ある日、私が新しい教科書を見せたとき、

「きれいな教科書。ばあばのときは、おふるだったわ。」

どういうこと？この言葉が頭に浮かびました。教科書は無料でもらえるのが当たり前で、もちろん、おふるなんて考えられない。教科書は内容が少し変わることだってある。だから教科書がおふるなんて考えられなかったのである。私はわけを聞いた。

「そのころは、教科書を税金でもらえるものじゃなかったんだよ。自分たちの家のお金で買っていたんだ。」

また、祖母と祖母の兄は年ごだったため、買ってもらうことなんてできなかったそうだ。

この話を聞いて、教科書が無料でくばられるのが当たり前なんじゃない。お金をはらわずにもらえることがすごい事なんだ、と強く感じた。

そして、最近、祖母と母がよく言う言葉がある。

「勉強が一人で出来ていると思うな。」

という言葉だ。先ほどの祖母の体験した話とかさね合わせると、とくに分かる言葉だ。また、今も一人でできていない。教科書や文房具などの勉強道具。それを買ってきてくれたり、ごはんを作ってくれたり、生活を支えてくれたりする家族。暮らしを支える税金と家族がいなければ、勉強はもちろん、生活すらできなくなってしまうだろう。

税金は私たちの暮らしで必要なもの。道路をつくったり、公園をきれいにしたり、学校や図書館をつくり管理したりする。普段生活しているなかではなかなか気付かない。でも、祖母の体験を聞いてから知った税金の役割はとても大きなものだと感じた。

教科書に書いてある二文には

「これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ」

と書かれている。私たちは、税金の役割と必要性を知り、大人になったときにそれを恩返しできるように暮らしていけたら良いと思った。

税を身近に感じた日

小牧市立北里中学校3年 加藤 芳望

身近なようで遠く、遠いようで身近な存在、これが税に対する正直な印象でした。ところが、昨夏の終わり頃、そのぼんやりとした距離感が、ギュッと縮まるような出来事が起きました。祖父が病気になったのです。その後のリハビリを懸命に頑張りましたが、身体の一部が元に戻ることはありませんでした。退院して自宅に戻る日を、誰もが待ち遠しく思っていました。しかし、介護を必要とする祖父が、自宅で安心して生活するには、今までと同じという訳にはいきませんでした。祖父が移動しやすい箇所に手すりをつけ、安全かつ楽に立ち上がることが出来るように電動ベッドを設置しました。また、入浴時の事故を防ぐために浴室の段差を解消しました。これらの住宅改修があったからこそ、祖父は安心して自宅へ戻ってくることが出来たのです。これらの費用のことが気になり、母に聞いたところ、自己負担分以外は介護保険制度で保険給付されたそうです。そこで、介護保険制度をひも解いてみると、財源は保険料と公費で成り立っていることが分かりました。税の使われ方の幅広さに驚くとともに、私はこれまで、自分だけを中心に税の繋がりを見ていたことに気付きました。その狭い視野では、税に対する理解が深まるはずもありません。「もしかしたら、ここにも税金が使われている？」と考える柔軟な発想力が、税をより身近に感じていくことに繋がると思います。

また、退院した祖父にとって、確定申告は大きな難所でした。毎年その時期になると、祖父自身が会場へ行き申請を行っていましたが、それも今の状態では難しくなりました。そこで祖父は母の手を借りながら、会場へ行かなくても申請ができる、e-Taxというシステムを初めて利用しました。申請に必要な書類を手元に用意し、母と二人三脚でインターネットを利用して確定申告をしました。会場の段差を気にする必要もなく、退院後の低下した体力を心配しなくても、例年と同じ様に確定申告が出来たのです。想像していたよりもずっと簡単に、短時間で手続きが終わったと、祖父と母はとても喜んでいました。

祖父とのつながりを通して、以前よりも明確に税を身近に感じるようになりました。そして、税を身近に感じた先に、感謝の気持ちが自然と沸きました。その気持ちの更なる先は、税を快く納めようという気持ちに繋がっていくはずです。幅広い世代の人々が安心、安全に暮らしていくために、様々な場面で税の支えが必要です。その制度を円滑に維持していくためには、一人一人が、税の理解力を高め、感謝の気持ちを大切にすることを忘れてはいけません。私たち世代が日本を支える日は、今よりもっと介護保険を必要とする高齢者が増えているでしょう。将来、私も担い手の一人として、安心で安全な日本の社会を力強く支える人になりたいです。

八月一日は、私の姉の命日です。姉は五年前の八月一日に天国に行きました。生まれる前から色々な病気を持っていることがわかっていて、両親はとても心配し不安な毎日を過ごしていたそうです。姉は無事に誕生しましたが、未熟児だったので病院の新生児集中治療室に入院し、様々なケアを受けていたそうです。その時未熟児が入院養育する時は公費、つまり税金で医療費を負担してもらえらることを聞き、とても助かったと母は言っていました。

退院してからも定期的に病院に通い、少し体調を崩せばすぐ入院という生活を送っている時に私が生まれ、姉と私の二人を育てる毎日が始まりました。

二人の育児は大変ながらも、毎日とても幸せで楽しい暮らしだったそうです。たくさんの写真を見ると、両親が愛情いっぱい育ててくれたことが伝わってきます。私も大きくなるにつれて、姉の状況がわかるようになっていきました。姉は医療ケアと言って、日常生活で医療行為が必要でした。人工呼吸器や酸素吸入器、たんの吸引や経管栄養。それらを両親だけで行うのはとても大変なので、訪問看護師さんに毎日来てもらい、色々なケアを手伝ってもらっていました。その訪問看護師さんを頼むお金も、全て税金でまかなってもらえたんだと母は大変感謝していました。

どうやったらそういった制度を利用することができるのか、母は必死に調べたそうです。病育手帳、身体障害者手帳、小児慢性特定疾病対策など、様々な制度があり、手続きは難しく大変なこともあったそうですが、そのおかげで本当にたくさんのことを助けてもらえ、ありがたかったとも言っています。

例えば障害者手帳一級を姉は取得していましたが、その手帳を高速道路の料金所で見せると料金が半額になるそうです。姉のような子どもは地域の小学校ではなく遠くの特別支援学校に通う子も多いそうなので、高速道路を利用して毎日学校まで送迎する人もいて、そういう時はすごく助かるんだろうなと思いました。

また、車いすや様々な装具を製作する時も補助が出るそうです。医療ケアが必要な子ども達が使う車いすや吸引器、歩きやすく作られた靴などは、市販されているものよりはるかに高額で、もしそれを実費で購入していたら大変なことになっていた、本当にありがたかったと母は事あるごとに言っていました。

残念ながら姉は十一歳で亡くなりましたが様々な人に助けられ支えられ、短い人生を精いっぱい生き抜いたと思います。私も姉の存在があったからこそ、将来医療従事者になりたいという夢ができました。大人になったら一生懸命働いて税金を納め、かつて我が家がそうであったように、誰かの助けになればいいなと思っています。

税は僕らの未来を守る。

島田市立金谷中学校 3年 秋山 泰庸

今年の梅雨は、とくに激しい雨が続いた。夜中に大きな大雨と雷鳴が聞こえると、身の危険を感じた。そして恐れていたことが起きた。大井川の堤防の一部が崩れたのだ。しかし大事にはいたらなかった。なぜならば、すぐにテトラポットを置き堤防を補強してくれたからだ。僕の家は堤防から 100mほどの地点にある。もしも、決壊していたら僕の家も最上川周辺の家のようになっていたのだろう。このことをきっかけに、堤防は、誰が管理しているのかを調べてみようと思った。

大井川について調べていくと、大井川は、一級河川であり、国が管理していることがわかった。また、今回の堤防の応急復旧は、国土交通省静岡河川事務所が行ったということがわかった。現場を見るとかなりの数のテトラポットが置いてあった。僕もふくめて、かなりの人がこれを見て安心したのだろうと思った。

また、これだけではなく、H15年の台風10号の大洪水の他にも、度々氾濫を起こす大井川。さらに最近頻発する50年に一度の豪雨災害を防ぐために平成の大改修と呼ばれる牛尾山の開削が行われた。僕が調べた資料によると、この事業を行うことにより川周辺の浸水予想水位が4m下がると言われている。この公共事業は、国が78億円という巨額な、工事費を使って行った。そしてこの78億円はもちろん税金だ。僕にとって、78億円は途方もない金額だ。しかしこのお金で、今回の豪雨のたくさんの方の命が救われたと僕は感じた。

去年の台風19号も忘れられない。島田市に避難準備情報が出された。大雨により大井川が氾濫することを恐れた僕たちは、牧之原にある避難所に行った。僕がそこで見たのは、温かい毛布と多くの災害備蓄品だった。これらも島田市に納められた地方税によって、用意されたのだと思う。

僕は、以前社会科の授業でハザードマップを見たことがある。この金谷地区には、大井川の氾濫以外にも大雨による土砂崩れの被害が心配される地区が多く見られた。このような災害を防ぐために県が行っている事業は森林づくりだ。森林の荒廃により起こる山地災害の防止をし「森の力」を回復させるために行われている。森林を整備するために毎年9億5000万円の森林づくり県民税が使われている。この事業は15年間限定で、効果しだいで再検討される。令和2年と今年までの事業とされているが、僕は、もっと継続してほしいと思っている。なぜならこれは僕たちの安全と未来を守ることにつながるからだ。

今まで僕は税金は、負担だと思っていた。しかし、今回自分の身の周りを見回してみると、税によって僕たちの安全が守られることがわかった。税を納める意味や税の働きを知ることができたことは、これから働き始める僕たちにとって、大きな意味をもつ。だから、今後も税について考えていきたい。

税金を納める意味とは

彦根市立西中学校 3年 谷村 和奏

私は今住んでいる家に幼い頃引っ越してきましたが、当初、近くの車通りの多い道路には信号機がありませんでした。

信号機は、私が小学生低学年くらいの時に設置されましたが、設置されるまでの間、母はその道を通る時「曲がる時に、前からくる車が多くてなかなか曲がれない」「ぶつかってしまいそうで危ない」と言っていたのを覚えているし、小学生だった私が見ても危険だと思う状態でした。それに、歩行者としても反対側の歩道に安全に渡りにくい状態でもありました。だから、設置された時は「安全に渡れる」とうれしく思ったし、とてもスムーズに進めるようになり、交通事故のニュースを見るたび、大きな事故が起こる前に設置されて本当によかったです。他の道でも、通学中、車が歩道の中に勢いよく曲がってきて、ものすごく「ヒヤッ」としたことが何度もありましたが、二年前くらいにそれを防止するための棒が設置されたり、見えづらくなっていた横断歩道が、車の運転手から見やすくするために塗り直されたりもしました。

このように、日常の交通安全を守り、かけがえのない命を守るために使われているのが税金です。

また、警察や消防の活動、ゴミの回収や処理といった公的サービスなどをうけられるのも、税金があることによるものです。これまで私は、税金の使い途について詳しく知りませんでした。税金は私たちが交通事故にあう危険性を減らしてくれるものでもあり、安全に生活すること、きれいな町で生活することを叶えてくれるものでもある、私たちにとってなくてはならない大切なものだと思えるようになりました。

税金は、大きな負担になるものです。だから、納めない人もいます。確かに私も、毎年五月くらいに両親が色々な税金の払い込みに行っているのを見て、「税金なんてなかったら、もっと貯金ができるのに」と思うし、買い物に行った時も「このお菓子は消費税さえなければもっと安く買えるのに」と思うことが多々ありました。税金がどんなことに使われ、どのように自分たちの役に立っているのかを知らないから、納めたくなくなるのかもしれない。だから、一人一人が税金の使途を知り、みんなが納税で協力することによって、今の豊かな生活が成り立っていることを心に留め、私自身も納税の義務をしっかりと果たせる大人になりたいと思います。

私には双子の兄がいる。兄は幼い時に知的障がいと診断された。小さい頃はよくてんかん発作を起こし何度も入院していた。そのため発達が遅れ話せる言葉も多くはない。けれど最近では文字の読み書きがだいぶ出来るようになった。兄は小学生から支援学校に通っている。

兄は電車が大好きで家族で出かける時電車に乗るといつも楽しそうにしている。切符を買う際、緑色の手帳を窓口で提出すると兄と介護者として親一人分の料金が半額となる。緑色の手帳とは療育手帳のことである。療育手帳は知的障がい者が持つことの出来る手帳で障がいの重さでAとB判定に分けられ更に各自治体により細く分けられている。療育手帳を「愛の手帳」や「みどりの手帳」、「愛護手帳」と呼ぶ自治体もある。電車の交通費だけでなくバスやタクシーなどの交通機関、映画、遊園地、博物館などの公共施設を利用する際にも受けられる。兄はそういった公共施設もよく利用するのでとても助けられている。療育手帳について調べてみると所得税、住民税、相続税などの障がい者控除が受けられることを知った。将来兄が大人になった時更に様々な支援が受けられより多くの人に支えられるのだなと思った。他の事も調べてみると療育手帳は障がい者手帳の一つで療育手帳以外にも身体障がい者手帳、精神障がい者保健福祉手帳があることを知った。それぞれ対象となる障がい、受けられるサービスは異なるが多くの人が手帳を持っている。手帳を持っているという事だけではないがそのような制度があり税金があることで多くの人が安心して暮らし障がいと共に生きている。

兄は来年私と一緒に高校生になる。支援学校では高等部になる。兄は学校を卒業すると障がい者を支援している共同作業所で働くらしい。前に兄は私にこう言った。

「僕、一人やったら生きていけへん。」

私はこれから自分に関わってくる税金の事はもちろん兄が関わる税金の事についても知っておかなくてはならないと思った。そして将来、兄が社会の中で生きれるように、誰かが少しでも安心して暮らせれるように税を納めて社会に貢献したい。

ひと缶に込める復興への思い

学校法人近畿大学近畿大学附属中学校 1年 大川 さくら

私は、酒屋を営む祖母と一緒に暮らしています。

歴史をたどれば江戸時代から酒屋を営んでいたようですが、祖父が亡くなった今は、祖母は少しの配達と自動販売機のビールやお酒の販売で暮らしを立てています。6年前に私が祖母と一緒に暮らすようになってから、自動販売機にビール缶やお酒のビンを入れる作業を手伝うようになりました。

私にしたら、「お茶やジュースはおいしいけど、ビールってどんな味がするんやろう。お酒っておいしいの？」という気持ちで、ビールやお酒が売れる理由も分からず、そんな気持ちもあって、私のお手伝いもあまり身が入っていませんでした。その中で、祖母が、「なるべくお客さんのことを思って、安く値段を設定してあげてるんやで。」とか「ビールの値段が上がったから、自動販売機の値段をまた変えないとあかんわ。」というようなことをいつも話しているのが印象に残っています。

お酒を買うということは、消費税とまた違って、実は酒税という税金も含めて支払いをしているということです。祖母が話すビールの値段があがる、という話は、税金が上がるということを意味しています。消費税も上がったし、お店で何か食べたり飲んだりしても、持って帰るより税金が高いし、祖母が売値の値段に小さな努力をしても、どんどん税金が上がっていくのかと思うと、少し苦しい気持ちにもなっていました。

しかし、税金のことを祖母に詳しく聞くと、お酒の税金は国にとって、とても貴重な財源と言うことを教えてもらいました。10月に税金が上がる第3のビールについても、よく売れるんだと笑って教えてくれました。そして、この貴重な税金が多く国民から集められることによって、東日本大震災・熊本地震・西日本豪雨災害への復興資源として使われていることも同時に学びました。

私の父方の祖父母は、7月の熊本の豪雨で氾濫した球磨村の近くに住んでいて、とても怖い思いをしたと言っていました。そして芦北町の親戚の家では、1階部分が全て浸かってしまったと聞きました。

たった一人の力では、復興へのお手伝いはなかなかできませんが、税という形で資金を集めてもらって、大きな力・全体の力で親戚や日本全体の復興の手助けをしてもらいたいと思いました。新型コロナウイルスで今年は九州に行くこともできず、被害の片付けの力にもなることが出来ないことが本当は残念ですが、祖母と税金の話をして、祖母のお手伝いをすることで、商品を買ってもらい、それがずっとずっと先にある災害復興支援につながっているかもしれないと思うと、少し気持ちが楽になりました。

これからは、ひと缶ひと缶に思いを込め、必要としている人の力になっている、そう信じてお手伝いを続けていきたいと思っています。

「君の夢を必ず守ってみせる。」日曜の午前、ヒーロー物の番組が始まる時間だ。

誰もが一度は憧れたのではないだろうか。怪人や悪者を颯爽と倒し、人々に夢や希望を与える日曜午前のテレビの中のヒーロー達に。彼らはいつだって輝いている。彼らの存在はあくまでフィクション、そう考えている人は多いだろう。しかし私は誰もがこのヒーローであると考えている。そう考えた理由には税金と夢が大きく関わってくる。

税金と夢の関係性とは何だろうか。まず税金が何に使われているのか。国民の医療費、公共事業、教育費など例を挙げたらキリがないが国民の安定した生活を保障するために使われていることが分かる。税金はこのように使われながら人々の夢を支えているのではないだろうか。私がこう考えたのは私自身、税金に夢を支えられた経験があるからだ。

私の家は母子家庭だ。だからとってこの環境を悲観している訳では無いのだが、どうしても金銭的な問題は無視できなかった。その頃から私には夢があったのだが、その夢を叶えるためにはどうしても大学へ行き、資格を取ることが必要だった。しかし、大学にはもう行けないと明確に言われてしまい、これはさすがに参った。そんな時に私が知ったのは大学の無償化というものだった。正確には高等教育の就学支援制度と言って低所得世帯の子らを支援するもので消費税が財源らしい。ショックを受けている私を不憫に思った母が色々調べてくれていたようだ。その制度は私にとってまさに救いだっただ。ヒーローであった。大袈裟だと思うかもしれないが、本当にそう感じたのだから仕方がない。

税金は公共事業だとか福祉などに使われながら人々の夢を支えている、この作文内で私はそう述べたが、自分は中々に良い例ではないだろうか。私は今でも税金に夢を支えられて生きていると感じる事が多々ある。今、これを読んでくれている人にも税金に支えられている所があるのではないだろうか。でも私達はただなされるがままに救われている訳では無いはずだ。何せ税金は降って湧いてきた金では無い。税金によって救われているのは私達国民、そして税金を払っているのも正しく私達国民なのだ。税金を支払う行為は誰かの夢を救うことに必ず繋がる。私は今は税金を払う年齢ではないが、払える年齢になったら必ず払いたいと思う。自分が誰かのヒーローになれるなんてそんな素晴らしいことはないじゃないか。

今、税金を何となくでも払えているのなら、それは誇って良いことだ。君が幼い頃に憧れた日曜午前のヒーローになれたのだから。

税をデザインする

学校法人関西学院関西学院中学部 2年 小島 英理子

「え？違うわよ。」と母が言う。

「だって『税』でしょ？」と私。

「ん…寄付。回り回って税が関わってくるけどね。」

美味しそうな牛肉やスイーツが並ぶ返礼品申し込みサイトを眺めて、やっぱり生まれ故郷を応援しようかなとつぶやきながら母は微笑んでいる。

謎の暗示のような母の返事に釈然としないまま、私は「ふるさと納税」について調べた。寄付したい自治体と返礼品を選んで申し込むと、所得税や住民税の還付・控除が受けられる。

なるほど、母の暗示に間違いはなかった。寄付された自治体はこれをきっかけに特産の返礼品を担う地場産業の育成、ひいては地域活性化にもつながり、経済活動が活発になれば税収も上がる。

一方で、住民税が控除された地域の減収や、自治体の返礼品に関する考え方の違いが問題だ。税の歴史をさかのぼると明治時代には地租改正により米の収穫量で税収が左右されにくい、貨幣での収税がおこなわれるなど時局に適した税制を整えるために繰り返し改善されてきたことがわかる。ふるさと納税においても解決に向けた見直しを積極的に検討する必要があるだろう。また、国等が使い道を定める現行の税とは大きく異なり、寄付する側が寄付先や用途を指定することで社会への貢献を実感しやすい仕組みだが、国民が寄付金の用途の選択権利を持つからこそ、より一層責任を持って利用しなければならない。

これらの特徴を踏まえた上で、今後ふるさと納税を学校教育に取り入れて、税に関心を持てる機会を設けられないかと考えた。たとえば、子どもたちから地域をPRする返礼品のアイデアを募ったり、授業の中で実際にふるさと納税を体験させるなどである。そこから寄付金の使われ方を知ることによって税特有の役割を学べ、さらに返礼品などから寄付先の地域について理解を深められる。私のふるさとである神戸市では、阪神・淡路大震災をきっかけに始まった神戸ルミナリエを安全に開催するための支援にも、寄付金が使われていることを今回改めて知った。

ふるさと納税は自治体によって特色があり、「税」という言葉から抱く強制的でマイナスなイメージを一新する画期的なものだ。納税者が税に目を向けること、率先して意識変化を行えるように議論することは重要である。また、教育現場でも子どもたちが未来を担う社会の一員としての自覚を持って税に参加する環境を作るなど、長いスパンを見据えた土台を確立していくべきだ。行政と国民が共にデザインできる税は、日本の発展に大きな影響をもたらすのではないだろうか。

ゴールデンウィーク直前の日曜日、我が家に新しいパソコンがやってきた。新型コロナウイルスによる学校の休業を受けて始まるオンライン授業に備えるために、両親が急遽購入を決めたのだ。その資金となったのは、国民全員に支給された特別定額給付金だ。予定外の買い替えだったが、給付金のおかげで必要な環境が整い、初めての授業形態に対する私の不安もやわらいだ。

今回の給付金を、我が家ではパソコン代の他に、休業中に増えた食費や、新しい生活様式の中で欠かせない、マスクや除菌剤の購入等に当てた。新型コロナウイルスの感染拡大で出費が増え、また、先が見えず気分も落ち込んでいた中、本当に有難いと話していたが、同じように、給付金に金銭的にも精神的にも助けられた家庭は多かったのではないだろうか。他にも多くの助成金制度が次々に発表され、コロナに感染した場合も、医療費は公費負担と聞き、私は日本で暮らすことに心強さと誇らしさを感じた。

そして忘れてはならないのは、これらの費用のほとんどが、税金であるということだ。国民や住民から、広く、いろいろな形で集められたお金を使って、必要なところに必要なタイミングでまとまったお金として投入する。多くの人にとって今年は税金の重要性を改めて実感する年になったに違いない。我が家は四大家族で、一人十万、計四十万円の給付金をもらったが、兄も私もまだ学生で払っているのは消費税くらいだ。生まれたての赤ちゃんにも支給されたというが、逆にたくさん税金を納めていても、単身者なら、受け取れるのは自分の分の十万円のみだ。税金は払った分に合わせて見返りを受け取るものではない。社会をうまく動かしていくために使われる。税金は、みんなのために納め、みんなのために使われるものなのだと思う。私が感じた日本で暮らすことの心強さと誇らしさは、日本にしっかりとした税の制度があり、一人ひとりが税を納めてくれているおかげなのだ。税には、社会を明るくする力があると言ってもよいのではないだろうか。

今、私には何ができるだろう。まずは今感じている感謝の気持ちを忘れないでおこう。私は税金で社会に育ててもらっている。だからどんなことにも真剣に取り組みたい。社会が抱えている問題についてもしっかりと学んでいきたい。税金の使われ方についても関心を持ち、選挙権を持てる十八歳になったら、必ず投票に行こう。そして将来、就職して働くようになったときには、きちんと納税して、明るい社会に貢献したい。

私達の暮らしを支える「税」

和歌山県立日高高等学校附属中学校 2年 寺井 巴菜

連日、新型コロナウイルス関連のニュースが報道されている。世界中にこの感染症が広がり、大変な事態となっている。私達は、三月から休校となり、約三ヶ月間、不要不急の外出を避け、自宅での自粛生活をした。その期間、テレビや新聞を見聞する機会が増え、その中でも「税金の使われ方」に、日本国民が注目したのではないだろうか。私も、その中の一人である。

まず、大きく税金が使われた事は、布製のマスクの配布だ。各世帯に二枚配布され、私達の中学校では、二回配布があった。使い捨てマスクが一時品薄になり、洗って再利用可能なマスクはとても有難かった。しかし、賛否両論の声が寄せられた。サイズが合わない等の理由でマスクを使わない人がいる。市町村などで回収ボックスが設置され、使わない人が寄付をし、必要としている人のもとに配布されたのである。今でも深く心に残っている事だ。その後、全国民に一人あたり一律十万円の現金給付があった。どちらも「税金」が使われ、私達に届く。改めて「税」の凄さを感じ、感謝の気持ちでいっぱいになった。

税金が大きく使われたのは新型コロナウイルスに関してだけではない。令和二年七月豪雨があり、熊本県を中心に甚大な被害があった。日々の生活の中で、何が起きるかは予測不能だ。救助隊の方々のお陰で助かった命がたくさんあると思う。被災地の方をニュースで見た時、本当に心が詰まる思いになった。被災地への物資や再建、復興に税金が少しでも多く使われて欲しいと強く願う。

また、私の出身校では、隣の地区の小学校と統合する事が決まり、増築、改修工事が現在、進められている。運動場に仮校舎が建てられ、一定の期間児童はその仮校舎で授業を受けるそうだ。校舎が綺麗になるのは、とても嬉しい。新しい校舎に通える児童はもっと嬉しい事だろう。そして、その工事にはたくさんの税金が使われている事を決して忘れてはならない。

このように「税」は私達の暮らしになくてはならないものだ。その莫大な費用は、国民が納めた「税」である。だからこそ、どのように使われたのかは知っておくべきだと思う。日々の社会問題について関心が薄い人は多いように感じる。「税」についても、一度学習し、知っている事や理解した内容であっても、より理解しようという気持ちが大切である。今、日本は少子高齢化が進み、これから先、税を納める働き手が減っていくと予想される。私達がどのような未来を築いていけるのかは分からない。よりよい未来、よりよい暮らしを「税」が見つないでくれるのだと信じて。

「今月も結構な額が引かれてるわ」
と、母はパートの給与明細を見ながら呟いた。パート勤めの母には徴収されている所得税や住民税が負担になっているようだ。もちろん、母は納税の義務や、意義も知っているだろう。しかし、毎月のように機械的に徴収されている税に納得していない様子だった。

そこで、ある時私は母に尋ねた。

「ママは税金を払うのが嫌なの？」

すると、母は、困ったような顔で

「どこにどのように使われているか分かんないからね」

と答えた。

一方、父はスーパーで買い物をした時に、可愛らしい盲導犬のフィギュアのついた募金箱にお金をよく入れている。その父に「どうしていつも寄付しているの？」と聞いたことがある。すると父は、

「もし、自分が何も見えない世界で生活することを考えると、怖くてたまらないよね。それでも一生懸命にがんばっている方たちに盲導犬を通して力になってあげたいからだよ」

と答えた。

母と父は同じように社会のため、人のためにお金を使っているが、その気持ちや姿勢に違いを感じる。一言で言えば、母は「仕方無く」父は「喜んで」だ。その原因は、お金がどのように使われるのか分かっているのか、そうでないのか。という所にあると思える。母の税金は強制的に引き落とされる物なので、給与明細を見る度に憂鬱になるのか、それとも、社会に貢献できたという喜びを感じるのか。その差は大きいと思う。

このことから、納税者が税の使い道をよく知り、税に対して前向きな姿勢であることが大切だと感じた。

納税者は、税を払ったことに意識を向けがちだが、今年は税（支援）に救われたケースも多いように思う。実際、我が家でも特別定額給付金を受け取ったし、マスクが品薄で手に入りにくかった時、アベノマスクが送られてきた時は勇気づけられた。

また、感染症（コロナ）のみならず、豪雨災害も多く、沢山の支援金も送られた。

税金によって私たちの基本的な生活基盤は支えられている。同時に、様々な緊急支援に税が使われている。そのことを、母のような人に分かりやすく伝え、税が有効活用されていることを実感してほしいと思った。

私にとって「税」は、縁の下の力持ちのような存在だ。税が様々な状況で社会を支えている。その税と納税者に感謝の気持ちを感じると同時に、時には、縁の下から出て来てもらい、惜しみ無い称賛を送りたいと思う。

もちろん、毎月納税を欠かさない母も含めてだ。

税金とは、何だろう。

松江市立玉湯中学校 3年 多野 彰真

税金とは、何だろう。私たちが店で買い物をする時に払う、消費税。働くようになって、給料から支払われる所得税。世の中には税と名のつくものがたくさんある。広辞苑で税について調べてみると、「国費・公費支弁のため、国家・地方公共団体の権力によって、国民から強制的に徴収する金銭など。」と書いてある。つまり、国などが使うお金をみんなで負担しよう、ということだ。

私には弟がいる。障がいを持った弟だ。幼い頃は体が弱く、しょっちゅう入退院を繰り返していた。私はまだ、その頃は小学校の低学年だった。病院の病棟の前で、弟につきそう家族と別れた記憶は今も残っている。今の弟があるのは、病院に入院し、そこで治療をしてもらったからだ。

でも、弟の命を救うために行う治療にもお金がかかっている。さらに入院の費用なども含めると、その額は膨大なものになる。それを全て私たちの親が払っていたら、私たちの家族はとうに破産していただろう。でも、実際はそうではない。

障がい者には「障害者手帳」という手帳が配られる。この手帳を持っていると、医療費の助成が受けられる。さらに、私たちの住んでいる地域では、小学六年生までの全ての子どもは、病院に行っても本人負担は無し、私たち中学生も三割負担で済む。だから、私の弟が幾度となく医療機関を利用しても、高額な福祉サービスを受けても、我が家は破産しなかったのだ。

では、その分のお金はどこから出されたのだろうか。答えは「税金」だ。つまり、市や県、国が税金を使って払ってくれたのだ。

税金とは、何だろう。私は、みんなで助け合って生きていくための、助け合いの象徴だと思う。誰か一人のためにあるのではない。私たち全員の生活のためにあるのだ。そして、みんなの生活を支えている。税金を払える人は平等に払わないといけなし、みんなが平等に幸せな毎日を送れるように使われないといけなし。生活していくのに必要な助け合いの一つの形、それが「税」のシステムだと思う。時代によって米だったり、現金だったりしても、このシステムはずいぶん昔から存在している。そして、より平等なものへと進化し続けているはずだ。

私も、大人になって、一人前に税金を納める年齢になれば、この「助け合い」のシステムに参加することになる。その時には「自分たちの納める税金が何かの役に立っていること」を忘れないようにしたい。税金を払っているのは私たちだ。どうやったらこの「助け合い」のシステムが絵空事になってしまうのを防げるか、どうやったらもっと「税金」が進化できるか、考えていきたいと思う。

そして、一人一人に考えてほしい。

「税金とは、何だろう。」

と。

夢や希望につながる税金制度を

琴浦町立赤碕中学校 3年 浅田 真唯

毎月の給料日が来るたび、父は給料明細を見つめながらいつもこうつぶやく。「こんなに引かれちゃうんだよな。」

税金は稼いだ給料から持っていかれてしまうもの。これが私の税金のイメージだ。父の給料の手取り額が高ければ、私のお小遣いやお年玉が増えるのに。税金は私のささやかな幸せを邪魔する嫌なものだ。この作文に向き合うまでの私は税金のことをよく知らず、こんな思いを持っていた。

最近の日本では、災害が増加している。災害により被害をうけた人、災害により親を亡くした子供、学校が破壊された地域、そういったものが増えている。そして、今世界で感染が拡大している新型コロナウイルス。この感染対応のために悲鳴をあげる医療関係者たちもどんどん増えている。大切な人を亡くしたり、自分のやりたいことができなくなり、めざしていた道をあきらめざるを得なくなったりした人がたくさんいる。必要なものが不足し、大きな苦勞をしている人がたくさんいる。

この現状を打破するために、自分個人では、直接助けたりはげましたりすることは難しい。だが、税金を使えば、今困っている人たちに少しでも支援することができると思う。税金が困っている人たち、大変な人たちに役に立つ形でもっと多く使われるようになるとよいと思う。個人のできることは限られているが税として多くの人々の支援が集まれば、大きな力に変わる。自分の納めた税が、誰かの夢や希望につながる。

私は、この税についての作文を通して税に関してたくさんを知り、知った。学んで、知ることで税金のイメージが変わった。自分も納税という形で支援者の一人になれることを知った。夢と希望を叶えるためにも教育は大切。学校が失われたり、学費が払えなくなったりした時でも、教育を受けられ、安心して学べ進学をあきらめることなく、自分の将来を自信を持って切り拓いていける税金制度の充実が必要だ。支援を求める人に素早くかつ十分に対応できる税金制度であってほしい。誰もが安心安全に、幸せな気持ちで生活できる日本であってほしい。こうした成果が日々のニュースで実感を伴うように伝えられるようになると、父のぼやきも無くなるだろう。そして私も安心して自分の未来を描くことができるだろう。税金を集め必要な支援事業を打つのは国や自治体の仕事。加えて、マスコミを通じて税制度の有意義な面を伝えるのも国や自治体の重要な使命であるはずだ。

税について今思う事

学校法人今治明德学園今治明德中学校 2年 奥津 音乃

ここ近年で消費税が十パーセントに増加された。私は、買い物をする度に、消費税が増えて少し値段が高くなって、いやだなと思っていた。また、何のために消費税を払わなければならないのか、本当に増税は必要なのか、疑問に思っていた。そんな時、ある人から聞いた話がある。

その人は、双極性障害という精神疾患を持っている。この病気をわずらってから、その人は気持ちが落ちこみ、食事や睡眠、お風呂などが何もできなくなった。生きていくことがとても辛かったそうだ。精神科に通院することになったものの、診察と薬の必要費用として、高額な医療費を支払わなければならない、その人にとってはかなり負担になったそうだ。そんな時、その人は、自立支援医療という制度を主治医から教えてもらった。

自立支援医療制度とは、心身の障がい除去・軽減するための医療について、医療費の自己負担を軽減する制度である。一般的に、医療費は三割負担であるが、この制度を使うと、医療費は一割負担になる。

この制度のおかげで、その人は高額な医療費を支払う必要がなくなり、治療を前向きに受けられるようになったそうだ。

精神疾患は、内科的な病気と異なり、長期にわたる治療が必要だ。適切な治療を受けるには、根気強く治療を受ける必要があり、それには多くのお金が必要である。そのお金のほとんどを、税金でまかなわれていると知り、私は自分が払っている税金が、誰かの役に立っていると思うと嬉しくなった。

これからの日本は、色々な人が共に生きる社会になると考えられる。例えば、介護の必要な人など、精神疾患を持っている人に限らず、様々な事情をかかえている人はたくさんいる。私は、今回の話を聞き、必要な人に適切なお金が配分されるべきだと思った。

しかし、私が最初に思ったように、何のために税金を払わなければならないのかと思っている人は少なくないと思う。それは、何のために税金が使われているのかわかっていないからだと考えられる。税金は、社会の中で必要としている人々に使われている。そのことを、たくさんの人々に知ってもらい、理解してもらう必要があるのではないだろうか。

今後、私や家族が、自分たちではまかなうことができないような病気になったり、災害に遭うかもしれない。何が起こっても安心して暮らすことができるというのは、とても幸せなことであると私は考える。そのためにも国民一人一人がしっかり納税の義務を果たさなくてはいけないと思う。税金をただ支払うだけでなく、その税金がどのように使われているかについて、いつも関心を持たなくてはいけないのではないだろうか。

「救急車が通ります」サイレンが街中に響き渡ります。私がまだ幼いころ、私の祖父は倒れ、救急車で緊急搬送されました。すばやい対応により、祖父はなんとか一命を取り留めることができました。

私はあるテレビ番組で、救急搬送するのに高額な代金を支払う必要があり、緊急事態でもなかなか救急車を呼ぶことができない国もあるということを知りました。では、なぜ日本では誰もが緊急であれば、救急車を利用することができるのでしょうか。

それには私達国民の納める「税金」が深く関わっていました。この税の作文を書くにあたって、私なりに税について学びました。「所得税」「贈与税」「法人税」など私にはまだはっきりと分からない難しい税がたくさんありましたが、その中の「消費税」は私にもよく理解できました。商品の購入やサービスを受ける際に私達消費者に課せられる、私にとっては一番身近な税です。ただ、この税金が何に使われ、私達に何をもたらすのかは、まだよく知りませんでした。しかし、今回税金について調べてみた結果、意外にも税金が私達の暮らしをしっかりと支えてくれているという事が分かりました。私の通う学校はもちろん、道路や橋など、私達がごく当たり前に利用するものにも、全て税金が使われていると知りました。そして、祖父の命を救ってくれた救急車も税金によって運用できているのだと分かりました。現在、新型コロナウイルスの影響でさらに多くの救急車が出動し、命を救ってくれていることだと思います。私は、税金の大部分を消費税が占めていると知ったとき、消費税からつながる命もあり、中学生の私でも誰かを救うことに少しでも貢献できているのではないかと嬉しく思いました。今まで知らなかったけれど、税金は私達の生活に安全や豊かさをもたらしてくれるものであると今は素直に考えられるようになりました。

私達日本国民は憲法で国民の三大義務として納税が義務づけられています。税金を通して、国民同士が支え、支えられるというサイクルができています。税金を納める額は一人一人異なり、それを不公平だと不満を感じる人もいるのかもしれませんが、しかし、私も納税を通して国民の一員として、支え合いのサイクルを広げたい、そのために将来たくさん税を納められる人になりたいと思います。

税が広げる世界、税からつながる人々、私の大切な人が救われたように、今日もどこかで誰かの大切な人が救われています。私達は国民として、納税する意味についてもっと深く学ぶ必要があります。そうすることが自分の生活、そして誰かの生活を守っていくことにつながると思うのです。

「救急車が通ります」私は今日もまた、遠ざかっていく誰かと救急隊員の方々にエールを送っています。

誰かを笑顔にする税金

福岡教育大学附属福岡中学校 2年 横山 祐希

私は読書が大好きだ。中学生になってからも隙をみて様々な本を楽しんでいる。本のない生活なんて、とても考えられない。そしてもう一人、私と同じように読書が大好きな人が身近にいる。それは私の祖父だ。

私の祖父は他県に住んでいて、月に一回程家族でテレビ電話をする。その度に祖父は、最近読んだ本の話をしてそれは楽しそうに聞かせてくれる。祖父に本から仕入れた雑学ともいえる知識を聞かされる度に、私はへえー、知らなかったなあ、と言う。祖父の読書量に私はいつも驚いてばかりだった。

ところが最近聞いたところでは、祖父は目の病気を持っていて、細かい字を読むのがあまり得意ではないという。一体どうやってあれだけの読書をしているのだろうか。私は疑問に思っ母に尋ねてみた。明らかになったことは、祖父は読書をしていただけではなく、「聴書」をしていたということだった。祖父は「オーディオブック」を利用していたのだ。

オーディオブックとは、本を読み上げて音声化したものである。このおかげで目の不自由な祖父も、情報を耳から取り込むことができていたのだ。

「それ、どこで売ってるの？」と、私は母に聞いた。

「自治体から支給されるんだよ。」

「ふーん。いくらするの？」

「お金は払っていないの。」

私は驚いた。

「誰が払ってるの？」

「その分のお金は、税金で賄われるの。」

私は学校で、国民から集めた税金は、道路を直したり、新しい橋を架けたりするのに使われるということを学んでいた。しかし道路や橋は自分だけではなく皆で使うものなので、これらに税金が使われることに特に驚きは感じていなかった。しかし税金は、祖父のオーディオブックのような、一人一人の幸せのためにも使われていたのだ。税金が使われる対象である「国民」の中に私も含まれているのだということが、その時はっきりと感じられた。私と「税」という言葉との距離が、ぐんと近くなったように思った。

最近、消費税をはじめ、「増税」に対する否定的な意見をよく耳にする。私自身は納税者ではないが、それでも「増税って必要なのかな。国民にとっては負担になるんじゃないかな」とは思っていた。けれど税の使われ方を新たに知った今、私の中での「増税」に対するイメージはプラスの方向に向かっている。

『聴いた』本について語る祖父の笑顔が思い出される。将来私の払う税金が、こんなふうに誰かを、そしてその周りの人を笑顔にするのかもしれない。この気づきを胸に、前向きな気持ちで税金を納めることができるような大人に、私はなりたい。

笑顔を守る税

福岡教育大学附属福岡中学校3年 金丸 桜歌

「行ってらっしゃい！」

デイサービスの車に乗り込む祖母をそう言って見送るとき、私は税金のありがたさを痛感する。

私の祖母はアルツハイマー型の認知症だ。それを知ったときは目の前が真っ暗になる思いだったが、家族一丸となって祖母の病気と向き合っていこうと決意した。しかし、現実は甘くなかった。何度も何度も同じことを繰り返し聞いてくること。毎日話し相手になっても、それを忘れて「誰も相手にしてくれない」と怒ること。支える側の私たちも傷ついたり、悲しんだり、イライラしたり…。お互いに苦しい状況が続いた。

そんな中、我が家に一筋の光が見えた。祖母が要介護一に認定されたことで、社会保障制度の一つである介護保険を受けられる対象となったのだ。これにより、祖母と私たち家族に寄り添い、一緒にこれからのことを考えてくれるケアマネージャーの方の担当も決まった。早速、ケアマネージャーに現状と悩みを相談すると、「デイサービス」を勧められた。デイサービスとは、祖母のようなお年寄りが日帰りで通える施設で、レクリエーションのほか、食事や入浴などの生活援助サービスも合わせて受けることができる。毎日祖母につきっきりだった我が家からすれば、とてつもなくありがたいサービスだった。

祖母の説得なども含め、試行錯誤の末、ようやくデイサービスに通える準備が整った。祖母を送り出した後、うまくやれてるかな、楽しめてるかな、と心配になったが、帰ってきた祖母の笑顔を見てその心配は杞憂に終わったのだと悟った。こんなことがあった、あんなことがあった、と早口で報告する祖母からは、何歳も若返ったかのような活気が感じられた。聞いているこちらにも自然と笑顔が移っていた。デイサービスに通い家にいる時間が減ったことで、言い争いなども減り、家族の負担が軽減したことは紛れもない事実である。それを可能にしてくれた税金には感謝してもしきれない。

これまで私は、税金を何に使うのか、何に役立っているのかと疑問を持つ側の人間だった。しかし、このような出来事が身近で起こって初めて、こんな風に税に救われる人たちがたくさんいるのだということに気づかされた。税というフィルターを通して、計り知れない素晴らしい恩恵を受けた私たち家族。大人になったら、その感謝を今度は税を納める側として返していこう。そう強く感じた。

今日も祖母は元気にデイサービスへと向かう。最後に、税金と、それを納めている人たちへ。祖母と私たち家族の笑顔を守ってくれて、ありがとう。

もう一度、空を見上げるために
学校法人大隅記念早稲田佐賀学園早稲田大学系属早稲田佐賀中学校 3年
板垣 仁菜

「もう、おわりだ」そう思う瞬間があつて。それは、心が弱いからでなく、愛する家族を守っているからこそ、絶望に打ちのめされることが起きてしまう。だけどそんな時、それでも、生きて夢を目指すことだけは保障されている。それが、どんなに人を救うのか、それがどんなにか連鎖して、多くの不幸を止めるのか、多く的人是きつと、気づかずに生きていくだろう。だから、必要に迫られるまで、そんな保障は税金の無駄だと抗議する声も耳にする。確かに、保障を受けずに済めば幸せなのかもしれない。だが、その闇はすぐ隣にあつて、いつ誰に訪れるのかも分からないのに。闇に覆われた時に、最後の希望の光を自らが消すことがないように。私達は、予期せぬ何かを恐れ、見えない支えに感謝しなければならないだろう。二〇二〇年、私達はそのことを深く教えられた日々を迎えている。

二〇一九年十二月、謎の新型ウイルスが他国に出現した時、その闇が数月後にもっと大きな闇になって、自分の現実を変えていくなど想像していた人がどれだけいたろう。

二〇二〇年四月緊急事態宣言が発令され、学校に行けなくなった。毎日通える場所があることがどんなに幸せであったかを思い知った。それだけでない。私達がどんな時も教育を受けられるように、各地で授業のオンライン化が検討されている。私達の毎日を税金が支えていることを実感した。経済は低迷し、休業者・失業者が増加したが、雇用保険の拡充や特別給付が連日報道されていた。そして、他国で容易に医療にアクセスできない人々が亡くなっている現実を目の当たりにし、国民皆保険という日本の制度が当たり前でなく、手厚い保障であること、税金が支える医療制度が私達の健康を守ってくれている有難さを痛感した。さらにはワクチンや治療薬という命を守る最後の希望の光すら、税金が支えている。ついには、高騰するマスクや消毒液、店から消えるトイレットペーパー、いつもと違う物にお金を費やした私達一人一人に10万が給付された。それは、見えない税金を目にした瞬間だった。

税金って何？公民や現代社会をただ淡々と他人事のように聞いていた自分が、今その闇にいて、税金が自分の毎日を支えていることを実感し、深く感謝している。同時に、今後税金を納めていく責任も強く感じている。

だから、今。私達はこの闇を抜けるために、その光を支える税金を学び、税金を納め、適切な活用を考えなければならない。予期せぬ苦境を迎えても、誰もが希望を持って生きられるように、最後の砦を担う税金を深く知らねばならない。どんな時も、誰もが、もう一度空を見上げることができるように、税金を運用する。それは予期せぬ今の苦境を乗り越えた私達にしか語りすることができない大切な教訓だと思うのです。

未知のウイルスと戦う国民と税の役割

～医療を通じて考えたこと～

福岡教育大学附属久留米中学校3年 平野 結愛

今年、新型コロナウイルス感染症により世界中が未曾有の事態に陥り、この数か月で生活は一変した。未だ治療薬、ワクチンの有効性は確立されず、未知のウイルスは、私たちの生活、命を脅かし続けている。日本は、巨額の財政支出を行い、国民の生活と命を守り経済再生を図るという試練に直面している。

私の母は、高度救命救急センターで看護師として働いている。日々重篤な患者が搬送されてくる過酷な現場に加え、新型コロナウイルス感染症患者の受け入れにより、なお一層過酷さを増しているという。日頃から呼吸器や人工心肺装置装着等の重症患者を対象とする救命センターは、24時間体制で治療、看護を行う必要がある。その分、今回の新型コロナウイルス感染症患者の受け入れは、24時間、常に感染と隣り合わせとなる。救命センターで職務に当たる誰もが、自分も感染するのではないか、他の患者や自分の家族に感染を持ち込んでしまうのではないかという不安や恐怖を抱きながらも奮闘していると母は話していた。そして、その新型コロナウイルス感染症は、指定感染症に指定されるため、入院治療の医療費一部は公費負担となる。このような突如として巻き起こった未知のウイルス感染に対する治療に対しても、誰もが最小限の負担で医療を受けることができるように備えられていることを知った。国民が納める税金は、いかなる不測の事態に対しても、国民に還元されることを今回の新型コロナウイルス感染症で強く感じた。テレビなどのメディアで、医療従事者が防護服に身を包み、自身への感染の恐怖を感じながらも、かけがえのない命を救うべく奮闘している姿を幾度となく目にしてきた。きっと母も同じように戦っているのだろう。今回の新型コロナウイルス感染症は、医療従事者の懸命な努力と、税金からの医療補助により、かけがえのない命が救われていることを忘れてはいけないと感じた。今なお、新型コロナウイルス感染症は収束せず、先行きの見えない不安の中にある。しかし今回、未知のウイルスにより生活、命が脅かされる事態に対し、巨額の財政支出から医療に限らず、様々な形で私たち国民は支援を受け、守られていることを忘れてはいけない。国民が納めた税金が一人ひとりの生活、命を守るべく、還元されている現状をしっかりと見つめるべきだと思った。

今後も、豊かで安心して暮らすための社会保障制度等の充実と財政の構築は重要である。明るい未来へ向け、社会の一員として暮らしていくために、公平な租税負担と給付について、私たち国民一人ひとりが税金を正しく理解し考えることが重要だと改めて考えさせられた。

「やったー！」

昨年十二月二十四日、二学期終業の日のことです。翌日から冬休み、でも、これまでの冬休みとは大きな違いがありました。家へと向かう私のわくわく感、自転車をごく足へと伝わり、前へ前へと踏み進めていました。

「ただいま！」

家の奥からたくさんの

「おかえり。」

そうです。この日は、親戚がたくさん帰ってくる日だったのです。そのうえ、いところが、スウェーデンから友達を連れてきたのです。他県から、そして外国から、総勢十一名で新年を迎えることとなりました。

次の日、みんなでおそばを食べに行きました。スウェーデン人の彼は、お箸が上手に使い、美味しそうに食べていました。お味噌汁が好きで、スポーツが好きで、日本のゲームやアニメが好きだと、いところが通訳をして教えてくれました。彼の国スウェーデンの話もたくさん聞きました。一番驚いたのは、スウェーデンでは、買い物に行った際の消費税が二十五%だということでした。そのとき私は「消費税がそんなに高かったら、ものの値段が高くなり、大変なのは。」と思いました。しかし彼は、そんなに大変ではないと言います。スウェーデンでは、消費税率が高い代わりに、小学校から大学までの教育費が無料だったり、十八歳までの医療費が無料だったりするそうです。また、福祉や介護も充実していて、とても生活しやすいのだそうです。税金がこのように使われる国があることを知り、日本はどうなのだろうと考えてみました。学校の授業で、現在の日本は高齢化が進み、高齢者の方々が安心して生活するためには、多くの費用が必要で、その中心は税金だということ、一方で少子化が進み、税金を納める人が少なくなってきたと学びました。スウェーデンでは、育児休業制度に力を入れ、一度落ち込んだ出生率を上げることに成功していました。両親合わせて四百八十日もの休業給付があるのだそうです。スウェーデンでは、こうした税金の使い方、子どもを育てやすい環境を作り、少子化を食い止めたのです。

これからの日本は、暮らしやすい環境を作るために、スウェーデンから学ぶことがあるのかもしれない。スウェーデン人の彼に会わなければ、こんなにも税金に興味をもったり、調べたりすることはなかったかもしれません。様々な税金のあり方を知ることができ、とても充実したお正月になりました。

いつか、消費税が「笑日税」になり、日本国民すべてが、笑顔あふれる日々を送ることができるよう、税についての知識を深め、しっかり税金を納めていきたいと思います。

昨今、税金の使われ方について賛否の声をよく耳にする。今、多くの人々が、会社が、地域が国の支援を必要としているからだ。

私たちは、かつて経験したことのない困難に直面する日々を過ごしている。打ち勝つ方法が確立されていないウイルスとの闘い、何度もやってくる災害からの復興に身をすり減らしながら生活している。あきらかに変化してしまった日常。その中で、私たちの学校生活も大きく変わってしまった。

私は陸上部に所属している。三年生で、今年が最後の集大成の年となるはずだった。短距離のシーズンがやってきたと思ったとたん大会は次々と中止になり、部活動も制限され、走ることさえ出来ない日々が続いた。でも、仕方がないこと。それは私たちだけじゃない。日本中、世界中で同じ悔しさを味わっている人がいるのだから。

そんな中、とうとう今年初めての大会が決定した。八月の選手権大会。当日は、観戦の方々の制限があり、観客は少なかったものの、大会運営のスタッフは逆に多いように感じた。そうだ、コロナ禍の中で大会開催の為に尽力されている人たちがいるんだと改めて感じた。

国の補助事業をうけて成り立つものが多くある中で、このような陸上大会もその中の一つだということは分かっている。競技場の維持にも運営にも税金が使われている。それに加えて今年の大会は、感染症予防の対策費もかかっている。また、三十度を超える気温の中、熱中症で倒れてしまう人も出てしまい、何台もの救急車が会場を出入りした。大会を開催するに当たって、人の力はもちろん、多くの税金が使われているのだ。私たちのこれまでの努力が報われる場所を、夢や希望を持てる場所を、このような形で用意していただいていることに感謝したい。今年は三つの大会に出場することができ、私は、全力で悔いなく陸上競技を終えることが出来た。

多くの人が支援を必要としている中、要望に対して、国や県は様々な対策をとっている。十万円の特例定額給付金の配布、持続化給付金、学費支援、税金の減免や支払いゆう予など。私たちの命と生活を守る為に、税金は大切な役目を果たしている。税金の使われ方に賛否両論ある中で、確かにそんなもの必要ない、そんな使い方は納得できないと思うところもあるだろう。実際私もそう。しかし、今大会のような場所を与えていただいたおかげで、コロナ禍の中での生活は、悔しい思いをしていただけた不安な日々ではなくなった。同じように救われた人が多くいるはずだ。

終息の兆しが見えず、不安が続く中で、私たちは一生懸命に生きなければならぬ。これまでどおりにはいかないだろう。失うものも多いだろう。でも、心は潤っている日々を過ごしていきたい。

私は四人姉妹の長女だ。私たち姉妹は、今でこそ毎日喧嘩したり爆笑したり、うるさすぎるくらいの四人だが、小さい頃は病気で入院したり大けがをしたりと、何かと病院にお世話になることも多かった。

特に私たち姉妹が病院にたくさんお世話になったのは、今から約八年前、まだ三番目の妹が母のお腹の中にいるときのことだ。三番目の妹は、私と二番目の妹が帝王切開で生まれてきたため、無条件で帝王切開で生まれてくることになっていた。そのため、母は出産予定日の数週間前から入院することになっていた。その入院予定日の直前に、一番目の妹がマイコプラズマ肺炎にかかって入院してしまった。私は今でも、妹の入院していた小児病棟と母の入院していた産婦人科病棟を毎日行き来していたのを覚えている。さらに、妹が生まれた数か月後には、今度は二番目の妹が川崎病にかかって入院してしまった。しかも、後遺症などが残る恐れもあったので、退院しても小学校に入学するまでの約四年間は、定期的に病院で検査をしてもらう必要があった。

そんな短期間で立て続けに病気や出産のために病院にたくさんお世話になった私たちは、本来なら多額のお金を支払わなければならなかっただろう。五百万円、一千万円、もしかしたらそれ以上かかっていたかもしれない。しかし、この日本には税金という素晴らしいものがある。「こども医療費助成制度」や「出産育児一時金」といった素晴らしい仕組みがある。そのおかげで、父と母は食費とその他身の回りのものの費用を支払うのみ、三回の入院を合わせても約三万円で済んだという。今私たち姉妹が元気で幸せに毎日を送れているのは、もちろん病院の先生や看護師の方々のおかげでもあるが、税金と助成制度があったおかげともいえるだろう。

もし、税金や助成制度がなかったら、私たち家族はどうなっていただろう。入院や通院の費用を払うために、食事や洋服も必要な分しか買えず、欲しいおもちゃも我慢しなければならなかったかもしれない。私は塾にも入れず開邦に合格することもできなかったかもしれない。まずそもそも妹が三人もいなかったかもしれない。そう考えると、私は日本に生まれてくることができすぎてすごく幸せだなと思うし、消費税が高いなどと言っている場合ではないと感じる。むしろ、私たちはたった十パーセントの消費税くらいしか払っていないのに、医療・教育・治安保護・ごみ処理など、身の回りのことをすべて税金で賄ってもらっているのだから、早く大人になって自分でお金を稼いで納税できるようになりたいとすら思う。きっと、私が働いて納税できるようになり、それが日本の色々なところで、色々な人の役に立っているのを見ると、私は税金という仕組みにさらに感謝するだろう。そんな日を楽しみに、私は今日も机へ向かう。

私たちの未来のために

旭川市立広陵中学校 3年 工藤 侑和

日本は災害の多い国だ。地形や気象などの自然的条件から豪雨や洪水、土砂災害、地震津波などによる災害が発生しやすい国土となっているのだそうだ。今年の夏も、豪雨による洪水や土砂崩れなどで、各地で大きな被害があった。北海道でも大雨の予報があり地域によっては大雨や暴風の警報が出ていた。幸い私の家に被害はなかったが、たくさんの地域で多くの人たちが被害にあっている。川が氾濫して泥水が家の中に流れてきたり、車が流されたり、土砂崩れで家が壊されたりした。泥で埋まった家の中はどのように片付けるのか。住んでいた人たちはどこで生活したらよいか。食べる物はあるのか。着替えは？持病がある人の薬はすぐに手に入るのだろうか。突然起きた災害では、逃げ出すだけで精一杯。持ち出すものを選ぶ余裕はないだろう。事前に避難していた場合でも、必要最小限のものだけ持って逃げていると思う。だから、無事に避難所に行けたとしても、大変な生活になるだろう。そう考えると、このような大きな災害が起きた時は、私たちの力だけではどうしようもないことがたくさんある。だからこそ、こんな時には住んでいる町や国の手助けが絶対に必要になる。しかし十分な支援をするためには十分な資金が必要だ。

大変なことは災害以外にもある。新型コロナウイルスだ。今までなかったものが突然現れて、世界中が混乱した。学校は休校になり、卒業式や入学式に在校生が出席できなくなるなどはじめてのことがたくさんあった。外出自粛によって仕事ができない人もいて生活が苦しくなる人も出てきた。そんな人たちを助けるために各家庭に給付金が支給された。自分の家はもう申請したという話が学校で出るくらい、私たち学生の間でも関心がある出来事だった。このように私たちが本当に困っているときに支援してもらうために、私たちの税金が使われるのなら、税金というのは本当に大切なものだ。

今回、税金について色々調べてみてわかったのだが、東日本大震災後には、復興のために必要な財源を確保するため、復興特別税というものができたそうだ。これは、とても必要なものだと思う。私はありがたいことに何の被害も受けずに生活できているが、同じ日本の中で大変な思いをしている人たちがいるのなら、みんなで助け合っていくべきではないだろうか。災害が起きた地域に直接行ってお手伝いすることができなくても、私たちの税金が支援に使われるのなら、しっかり税金を払うことで困っている人に協力できるかもしれない。

今、私が払っている税金は消費税くらいしかないが、大人になった時にはきちんと税金を払って、自分の義務を果たしていきたい。それがきっと自分たちを助けることになるはずだから。

この夏休み、私と母は事前に申請しておいたマイナンバーカードを受け取りに、一緒に区役所へ行った。とても混雑していて、私達は半日かかりでようやくカードを受け取ることができた。

うさぎのキャラクターのこのカード。果たして一体何のために必要なものなのだろうか。せっかくの機会なので調べてみた。

マイナンバーカードは行政や税金に関する事務の効率化などを目的に作られたもので、特に大きなメリットが、e-TAXを利用して自宅や事務所から確定申告などの税の手続きが可能になることだ。

そういえば、先日、母がスマホを使って自宅から確定申告をしていた。ふるさと納税や高額な医療費の支払いなどをすると、確定申告をすることで、お給料から天引きされた所得税が還付してもらえそう。

「忙しくて税務署で手続きできなかったからイータックスのおかげで助かったわ」

と還付金を手にした母は喜んでいて。なんと、母は三年分の申告をためていたらしい。

「事前に税務署で本人確認をしてもらって、IDパスワードを登録をしてもらえば、マイナンバーカードがなくても、e-TAXの確定申告作成コーナーを使って確定申告ができるから、便利になったわよね。」

母によるとこの方法は暫定的で更に色々なe-TAXのサービスを利用するためにはマイナンバーカードが必要になるとのことだ。

なるほど。インターネットを利用して税金の申告などの手続きができれば、税務署に出向く必要もなくなる。コロナウイルスで外出自粛の時でも安心だ。また、紙を使わなくて済むので資源の節約にもなる。

「それにね、e-TAXから申告すると添付する書類も省略できるしね。」

インターネットの利用で手続きが便利になったので、母も重い腰を上げることができたようだ。

小学生の時受けた租税教室で私たちが平等でよりよい教育を受けられるようにたくさんの税金が使われていることを学んだ。そして一番多くの税金が使われているのが医療や年金などの社会保障費である。高齢者が増え、働くことができる若い世代が減少し、国の借金は増え続けている。

今、私はまだ中学生で、二才の時から始めたバレエに夢中だ。大人になったらきっと確定申告をするだろう。その時どういう社会になっているだろうか。将来のために勉強を続け、少しでも少子高齢化の社会を支えていける大人にならなくては、と思った。

一人に一枚のマイナンバーカード。このカードで税金がより身近なものになり、税の使い方や社会について考える機会になった。

この小さなカードには、大きな未来と可能性が詰まっていると感じた。

税金の大切さ

新庄市立新庄中学校 3年 藤原 未憂

私は毎晩コルセットを装着して寝ています。私の上半身をかたく固定するものです。苦しいし、重いし、動きづらいし、できれば着けたくありません。しかし、私はこのコルセットのおかげで税金の大切さを理解することができました。

私は中学二年生の時、脊椎側わん症と診断されました。正常なら真っ直ぐなはずの背骨が曲がってしまう病気です。痛みはありませんでしたが、私は重症で背骨を金属で真っ直ぐに固定する手術をする必要があると言われました。手術後のレントゲン写真を見せてもらったのですが、鳥肌がたちました。自分の体の中に金属が入ることに萎縮したのです。しかし、症状は刻一刻と進行していきます。勉学のことも考え高校一年生の夏休みに行くことになりました。それまでの間はこれ以上進行しないように、寝ている間はコルセットで固定して過ごします。側わん症は人によって曲がり方が大きく異なるので一人一人に合ったコルセットを作る必要があります。そのため製作するのに十七万円もかかります。冷蔵庫や洗濯機が買ってしまうほどの金額です。最初に聞いた時は不安になりました。代金を払うのは父です。経済的に負担になるはずです。娘の病気に、手術に、十七万円。私自身は手術の経験もなく、痛みの予想もつかず、実感が湧かなかったのですが、父は心労が大きかったはずです。そんな時、病院の方から育成医療のお話を聞きました。育成医療とは身体上障がいをもつ児童又は現存する疾患を放置すると、将来において障がいを残すと認められる児童が治療効果が期待できる自立支援医療を受けたとき自立支援医療費が支給される制度です。私の場合は放置すると将来、肺や心臓が圧迫され肺活量や余命に支障をきたすので育成医療で治療を受けることができました。それによりコルセットの製作費がほぼ全額が手元に返ってきました。私は家族の負担が減ることにととても安心しました。しかし、その十七万円は一体誰が支払っているのだろう。という疑問が浮かびました。新庄市の医療制度なので市がどうやって収入を得ているか調べてみたところ、市民から税金を徴収して主な収入を得ていることが分かりました。私は身近な税である消費税をなんとなく支払い、使い道も理解していないまま、値段が上がるからなくなればいいのにと思っていました。しかし、私はその税金の恩恵を大いに受けていたのです。税金はとても大切なものだ、と理解しました。税金は私のように病気になった人やその家族の負担を軽減してくれます。私は自分が払う税金で誰かを救うことができることを身に染みて実感しました。税金を納めることはこんなにも誇らしいことなのだ、と理解できました。私は、子供から大人まで納税者全員が誇りを持って税金を納められる世の中になることを強く望みます。

税金に感謝

吉川市立吉川中学校 3年 北野 紗英

「こんなに綺麗な学校でラッキー！」令和二年四月、吉川市立吉川中学校が開校したときに思った。私はこの吉川中学校の第一期卒業生になる。開放的で近代的な建物は人に優しいユニバーサルデザイン、校舎は地域の防災拠点としての機能も備えている。図書室とPC室が一体となったメディアセンターには驚いた。将来的にICT教育の実現をするための設備が整っている。当たり前だが、机・イス・パソコン・本などすべての備品が新品だ。新しい中学校の開校に合わせ、歩道、横断歩道、街灯などが設置されるなど、学校周辺の環境も整備された。すべては私たちの安全を守るために。また、吉川市では昨年から市内すべての小中学校にエアコンが設置され、暑い夏でも快適に授業が受けられるようになった。これらの費用には、教育費として多くの税金が使われている。もし税金がなかったら学校に通うために、一人ひとり高額な費用がかかってしまうに違いない。

税金は大人が納めるものだと思っていたが、私が買い物をした時に支払っている消費税も税金のひとつなのだと気が付いた。憲法第三十条では納税の義務が定められている。「消費税が十パーセントも取られて高いなあ。」とつい思ってしまったが、納税とは納めるものであって取られるものではないのだと思った。

日本では納税の義務がある一方、主権は国民にあると憲法で定められている。つまり、国民から集めた税金の使い道も主権者である国民が決めることができるということだ。実際には税金の使い道は議員が決めているが、その議員を選挙で選んでいるのは国民である。つまり、自分たちの代表者である議員を選ぶことによって間接的に私たちも税金の使い道について関わっているということになる。選挙や政治は難しい問題だと思っていたが、本当は自分たちの生活に密着した身近なものなのだ。私も、三年後には十八歳になり選挙権が与えられる。ぜひ選挙に行き、私たちが納めた税金を正しく使ってくれる人を選びたい。

税と暮らしの関わりを知り、納税の大切さを知った。限りある税金を有効活用することによってみんなが健康で安全な暮らしができ、日々の生活に困る人がいなくなるような社会になって欲しい。私たちの税金がどのように使われているのかについて、今のうちからもっと関心を持っていきたいと思った。先人が納めてくれた税金のおかげで日々生活ができることに感謝し、今は一生懸命勉強を頑張って、将来しっかり働いて納税できる大人になりたいと開校したばかりの校舎を眺めながら、ふと思った。

未来をつくるのは私たち

村上市立荒川中学校3年 笠原 菜央

皆さんは、税について、どう考えていますか。私は、中学校で教わるまでは税についてあまり知らず、「税は何のためにあるのだろう」「なぜ税をはらわなければならないのだろう」とばかり思っていました。しかし、ある事をきっかけとして、私の考えは変わりました。

ある日、母が病院から帰ってくると、母に病気があることが分かりました。私の母は、私が小さい頃から、女手一つで育ててくれたので体へのふたんが大きく、病気にかかりやすかったのかもしれませんが。いつも、朝から晩まで一生懸命働き、家に帰れば家の仕事もしっかりとこなしていた母。つかれていて、私の事まで手がとどかないと言いながらも毎日のご飯や学校の送迎などをしていてくれました。お金によゆうがない中、私のために必要なものをそろえてくれていました。私は、そんな母のことが大好きだったので、病気があると知った時は、ショックでとてもつらく、母も少し涙ぐんでいました。その後、母は入院することになりました。そこで私が気になったのは、お金です。私は当時、税についてよく知らなかったので、退院後、母はお金に苦しめられ、つらい思いをするのではないかと、とても心配でした。

二週間後、母はぶじに回復し、退院することができました。病院の帰りの車の中で、母は私にこんなことを言いました。

「菜央がまだ中学生で良かった。」

と。母は私に、入院するお金などは、税金に支えてもらっていることを教えてくれました。私たちは、税金に助けられたのです。

私は、このことをきっかけとして、税について、色々調べるようになりました。税金がないと、私たちが普通に学校にかよえないことや、いつも飲んでいる水が飲めなくなるなど色々なことが分かりました。税金という制度があるから、今私たちはこうして暮らしやすい生活ができているのだと思います。税金によって、たくさんの人の命がすくわれていたり、色々な場面で守られているのは確かです。今、少子高齢化が進み、社会保障の費用が増え、その費用を負担する働き手が減ってきている中、私たちは、自分にどんなことができるのか考えなければいけません。未来をつくるのは私たちです。しっかり税金をはらい、社会をより良くするための一人だということにほこりをもてる大人になるため、今は自分のできることをしっかりとしていきたいと思います。

新しい税システムの提案

学校法人聖啓学園佐久長聖中学校 3年 重藤 絵音愛

私は現在、十五歳。十五年間で、私個人ではどれくらいの税金を納め、そしてその税金は何に使われてきたのだろうか。

中学生である私自身が、直接納めてきた税金で思いつくのは、間接税である消費税だ。昨年、消費税率が八%から十%にあがった。しかし私自身は学生であり、高額な消費行動をすることがないため、増税を実感したことも負担に感じたこともない。

そこでふと、冒頭で述べたことを疑問に思った。

未就労者である学生、はたまた全ての人が、この世に生を享けてからの間接税を含めた自分の納税額は把握していないだろう。国のシステムでも、各個人の間接税を含めた自分の納税額はデータ管理していないと思われる。

現在、国民にはマイナンバーがふられ、社会保障、税、災害対策の3分野で情報が管理され、複数の機関が同一人の情報を確認できる。しかし、企業のマイページのように、私達がその一元化された自身の情報を自由に確認することはできない。

もし、中学生の私でも自分の納税額がサイトで確認でき、納税先や使用用途を自ら決められるシステムがあったら、普段何気なく支払っている消費税も「意識なき納税」から「意識ある納税」へと変わるだろう。そして、私たち若い世代が納税を実感することは、未来につながる大きな意味をもつと思う。

実際に今「ふるさと納税」という、応援したい好きな自治体へ寄附をする仕組みがある。希望自治体に事実上の「納税」が可能というものである。寄附金の使い道を選ぶこともでき、私の家では、大都市ならば子供の教育に、高齢者の多い比較的小さな市町村ならば福祉医療に役立ててもらいたいという考えのもと毎年寄付をしている。

この仕組みをさらに発展させたような、老若男女だれもが参加可能な新しい納税システムを構築するという、思い切った大改革がこれからの日本には必要ではないだろうか。もちろん一元化されたデータを自由に個人が使用することは、セキュリティの関係でハードルが高く、費用対効果も問題だろう。しかし、私たちでも納税の意識を持ち、税金の振り分けという政治活動の一端を担うことで、政治への関心が早くから芽生え、のちの選挙の投票率の増加にもつながると思う。

昨今、世界が協力してSDGsに取り組んでいるが、総じて必要なのは固定概念を捨て、荒唐無稽だと感じるアイデアでもまずは議論し、リスクを恐れずチャレンジしてみることはないだろうか。

地球の輝きや未来の明るさは、私たちの税が出発点であると、強く思う。

税からもらった命

守谷市立愛宕中学校3年 大平 あやの

国民の二人に一人ががんになるということはよく知られている。また、小児がんにかかる子どもは十万人に一人程度であるそうだ。偶然にも、その十万人に一人になってしまった私は、税金に命をもらった一人でもある。

病気であることがわかった時、治療の不安と同時に、高額な治療費の負担に関する心配が私の脳裏をよぎった。がんの治療費は、抗がん剤や先進医療のために時には一月あたり数百万円にもなることがあるという。

「もし、私に必要な治療が経済的な問題のためにできなかったら？」
これから必要となる治療費の問題は、両親ばかりではなく、私にとっても気がかりなことだった。しかし、本格的な治療が始まる前に「小児がんは大人のがんと比較して、治療効果が高い。また、小児慢性特定疾病医療の対象となり、治療費が高額になる心配はない。」と、説明があった。治療を受けるための公的な支援があることを知り、「がんイコール高額な治療費」というイメージを持っていた私は、どんなに勇気づけられたか分からない。

あまり知られていないことかもしれないが、小児がんの治療では、医療的な関わりの他にも、臨床心理士によるカウンセリング、院内学級による教育環境の確保、行き届いた看護体制など、多角的な支援体制が整えられており、病院では治療を受けながら勉強を続けることができる。

入院生活を通じて、特に印象的だったのは、この院内学級の存在によって、教育を受ける権利が保障されていたことだ。私は入院中も勉強を続けることを希望し、入院と同時に院内学級に転校した。転校後は院内に併設された教室で友人と学び、また、症状が良くない日は先生が私のベッド脇で授業を行ってくださった。一対一で授業を受け、先生とたくさん会話ができる環境に恵まれたことが、治療に前向きに臨むための原動力になった。

そして、私は今、思う。私はなぜ生きていられるのか。私が、もし、違う国、違う時代に生まれていたら、生きていられたらどうか。病気になった私は不幸だったか。安心して治療を受けられた幸運。日本に生まれた偶然。それらが重なったことは、幸せとしか言いようがないと思う。

現在、私は公立中学校に通い、社会の時間に税の意義や役割について学習し、身近な税の使い道として「平等な教育のため」「社会保障の充実」ということがあるのを学んだ。私は、まさにこの恩恵を受けて、たとえ病室にいても学び続けながら、必要な医療を受けることができた。そうだ、私の命はつらい治療を乗り越えたからだけではなく、税からもらったものでもあるのだ。そのことに気づかせてくれたこともまた、税金が教育費に投じられ、私が良い教育環境と先生方に恵まれた証だ。税が活きた使い方をされている証だ。私は、改めてこのことに感謝している。

税と言われて思いつくのは、中学生の私でも払っている最も身近な税金「消費税」だ。私の毎月の小遣いは千円。全額使って何かを買っても、支払う消費税は百円。年間で千二百円にしかない。

しかし、学校でもらったパンフレットを見て驚いた。中学生一人には年間百万以上の税金が使われていた。これは教育費だけの金額である。もちろん両親は所得税など、支払う税金額は多いと思う。だが調べてみると、毎日通う通学路の整備や図書館、公園など教育以外にも税金が使われている場所が多い。支払い額より使用額の方が高いのではないかと思うくらいだ。

今年は特に、「税金」という言葉を聞く機会が多かった。新型コロナウイルスが流行して学校が休校になったので、テレビでニュースをよく見ていた。新型コロナウイルス対策のため、国からのマスク支給や、お店の休業補償金、全世帯への給付金支給が税金で行われていることがわかった。もちろん、私の家も給付金を受け取った。休業や人手の減少で収入が減ってしまった人には、納税の猶予なども行われるらしい。

私の両親は会社員のため、生活に大きな変化はなかったが、祖母の家は観光果樹園を営んでいる。観光客が減ってしまったので困っていた。同じような農家を助けるために、市がふるさと納税の返礼品として、果物の注文を各農家にしてくれていると聞いた。祖母の家に支払われる果物の代金も、集められた税金で支払われていることになる。

今回、身近な税金について改めて考えるいい機会になった。税金を払うときは、商品と引き換えになる訳ではない。私も消費税がなかったらこれが買えたのに、と思う時がある。税金が高くなるのは嫌だ、払いたくないとは誰もが一度は思った事があるのではないだろうか。しかし、この払いたくない税金に助けられながら生活をしているのだとわかった。

税金の仕組みについてはまだわからないことが沢山ある。それでも、私が毎日楽しく学校生活を送り、安全に生活するためには税金はなくてはならないものであることはわかった。また、その税金は、両親や日本の働く人々みんながしっかり納めてくれているから使えているのだという事に感謝しなければならなかった。

いつか私も税金を納める立場になる。その時は自分のお金が減るという目の前の事だけでなく、そのお金が何に使われていくのか考えられる納税者になりたい。そして、税金の使われ方についてみんながもっと興味を持てば、日本はより生活しやすい国になっていくのではないかと思った。

税金で守る私たちの「安心」

藤岡市立鬼石中学校 2年 古田 莉奈

「税金はどんなところに使われているのだろう」この疑問を両親に聞いてみました。すると父から、今年完成した八ッ場ダムが税金で造られたのだと教えてもらいました。そして、去年の台風十九号の時、八ッ場ダムのおかげで利根川の氾濫を抑えた、というニュースが流れていたことを思い出しました。

八ッ場ダムは吾妻川中流の群馬県吾妻郡長野原町に建設された国直轄の多目的ダムで、洪水調節、流水の正常な機能の維持、都市用水の補給並びに発電を目的として造られました。利根川水系の水利用の安定化を図るためなので、群馬県のほか埼玉県や東京都も事業費の一部を負担しています。つまり、私たちの税金が使われているのです。今を生きる私たちや未来に生きる人々が、大雨の時に洪水の心配をしないで安心して暮らしていけるように造られたダムは、とても価値のある税金の使い方だと思います。税金はダムという形あるもので私たちの暮らしを守ってくれるだけではなく、「安心」という精神的な心の支えまで創り出してくれているのです。

次に、私の身の周りにある税金で造られているものを調べてみました。

私が毎日、自転車で中学校まで登校する道も、税金が使われています。入学当初はでこぼこ道で自転車の操縦が難しく、何回か自転車から落ちて怪我をしたことがありました。でも、最近は道路がきれいに整備されて、とても自転車が乗りやすいです。学校まで危ない思いをしないで、「安心」して登校できることは、本当に嬉しいです。

そして、消防署にも税金が使われています。私が小学生のころ、消防署の人たちが消火訓練と避難訓練の指導に学校まで来てくれました。私たち生徒には逃げ方や身の守り方を丁寧に教えてくださり、先生方には消火の仕方を教えてくれていました。実際の地震や火事の時慌てることなく、小学生のころに教えていただいたこの訓練がきっと役に立つと思います。これも将来の私たちの生活の「安心」を守る、重要な税金の使い方だと思います。

また、最近ではコロナのため、一人十万の特別定額給付金や休業した店舗に休業協力金などが支給されています。我が家でも自宅で過ごす日が増え、それに伴い家での食事代が増えたので、母は「特別定額給付金が支給されてとても助かった。」と、言っていました。

このように、実に様々な場面で税金は私たちの生活に密接に関わっていることがわかりました。税金がなくては、今の私たちの安全で安心できる生活は成り立ちません。税金は様々な人々の暮らしを支え、人間らしい社会生活を送るうえで、なくてはならないものなのです。税金で私たちの「安心」が守られて豊かな生活が送れていることに感謝したいです。そして、もっと多くの人が税金に対して正しい知識を持ち、理解を深めてほしいと思います。

税の大切さ

川口市立戸塚中学校3年 島原 千穂

私が、小学校二年生から三年生に変わる春休みだった。自転車で母と姉妹と近くのスーパーマーケットに自転車で出掛けた。祖母から買ってもらったピンクのかわいい自転車だった。スーパーの駐車場から道路へ出てきたところで、左から走ってきた車にぶつかった。ドスンという鈍い音とともに私は宙に投げ出され、背中から道路へ落ちた。一瞬の出来事で、自分が何がどうなったのか、すぐにはわからなかった。車に乗っていた男の人はすぐに車から降りてきた。母は、大きな声で私の名前を呼んでいた。ボーっとしているうちに救急車がやってきた。警察官もやってきた。咄嗟に「捕まってしまう」と思い、恐怖が身体じゅうを包んだ。私は泣くしかなかった。そのあとは、救急車に乗せられ、病院にいき、診察やら検査を受けた。しかし、また、救急車に乗って次の病院に向かった。救急車の中では、隊員の方がずっとそばにいてくれて声をかけ続けてくれた。少しずつ、恐怖は和らいでいき肩から力が抜けていった。それから、大きな病院につき入院となった。どこも痛くないのにその時は不思議だったが、脾臓から出血していたらしい。退院してしばらくして、警察に行った。交通事故のときの様子を詳しく話すためだ。警察官に質問され、そこに自分のした行動を答えた。警察官の方は優しくきちんと状況を整理してわかりやすく話してくれた。なぜ、事故は起こってしまったのか、私は何が悪かったのか、これから自転車に乗るのにはどうすればよいのか、等、教えてくれた。正義の味方こそ、警察官だと思った。

それから、五年生になり、社会科の授業で租税について勉強した。救急隊の仕事や警察官の仕事は税金によって賄われていることを知った。救急車を呼んでもお金はかからなかった。その費用は税金を使っているからだ。だから、誰でも、どんなときでも、傷を負って動けなかったり急に重い病気にかかり一刻を争うときには安心して救急車を呼ぶことができる。警察は私たちの安全を守っている。事故や犯罪が起きた時いち早くかけつけ、解決に導くようにしてくれる。私の事故の時も親身になって考えてくれた。事故の相手の人と私の間に立って一番いい方法を出してくれたと思う。日本中の事故、犯罪にはいなくてはならない存在だ。

その救急隊や警察官を支えているのが税金だ。税金は私を助けてくれたのだ。

次は私の番だ。将来、私を助けてくれた警察官や救急隊の方のように優しい思いやりのある人になり、税金をきちんと払えるように仕事をしたいと心から思った。

そのために今は世の中の仕組みについてきちんと勉強し、税金の制度がどのようになっているか理解しようと思う。将来は私たちの納税にかかっているといても過言ではないはずだ。

これからの日本を

板橋区立赤塚第一中学校 9年 立川 茜

「二千十九年十月一日から消費税十%増税。」

昨年から今まで八%だった消費税が、二%分の増税となりました。ますます負担がかかると落胆する人、ちょうど十%だから計算が楽だと思ふ人など、それぞれ思いは違ふと思ひます。何故、増税が必要なのか、どうしてこの時期に増税をしたのでしょうか。

現在の日本は、少子高齢化による現役世代の減少と高齢者の増加という大きな問題を抱えています。高齢者の増加は医療費をはじめとする社会保障費を増大させます。この増え続ける社会保障費の財源を確保することが消費税が行われる目的の一つだそうです。この事が掲載されている資料を見て、私は疑問を抱きました。

「どうして消費税なんだろう。」

法人税や所得税でも増税を行い、税収を増やす事が出来るはずなのに、なぜ消費税を増税したのでしょうか。それには明確な理由がありました。

所得税や法人税の増税を行うことでも税収は増えますが、それでは現役世代に集中した負担をかけてしまうことになるので、高齢者を含めた国民全体で広く負担する消費税がふさわしいとされました。また、所得税や法人税は利益部分に課税される税金であるため、不景気になると税収が減少してしまいます。しかし、これに対して消費税は景気に左右されにくく安定した税収を得ることができるのです。

今後はどこまで増税されるのでしょうか。

「コロナの負担はきっと増税となって返ってくるんだろうな。」

給付金の支給、アベノマスク配布のニュースがやっていると父や母がそろって口にだします。実際に北欧や、ヨーロッパの国々では消費税率二十%を超える国が多くあります。日本もコロナ負担がこのまま進めば、二十%増税という意見もでてくるでしょう。けれどそれらすべては、現役世代から次世代の人々のための取り組みだという事を忘れないで欲しいです。政治家のように直接的に国造りに関わる事はないですが、その国造りに関わる費用や政治家は全て税で成り立っているのです。増税だと落胆するのではなく、日本国民として国造りに関与するんだという意識で、また増税発表された際に受け入れたいです。

これからの日本を創っていくのは、私たち納税者なのです。

消費税を廃止するといった考え方を持っている人はたくさんいます。しかし、僕はその考え方は間違っていると思います。確かに、消費税をなくせば、国民にとって少しは負担が少なくなるでしょう。けれども、その分他の税金を高くするか、社会保障を減らさなくてははいけません。それなら、消費税が負担になるとしても、結局他で負担になるのなら、消費税が廃止される意味がありません。

日本は今、とても多くの借金（国債）があり、その量はGDPの2倍あり、主要先進国の中で最も多くなっています。その中で、消費税は二〇二〇年現在一番多い税目になります。それをなくすとなると世界で最も多い国債がどんどん増えてしまいます。

では、どうしたらいいのか。僕は消費税などの税金を減らす方向にするのではなく、税金を増やす方向にしていた方がよいと考えます。税金を増やして、まずは、借りるお金を減らして、返すお金を増やして、国債を少しずつなくしていくべきです。

しかし、今の日本の政治家の人たちは、無駄に選挙をして税金を使ったり、その他無駄なところに支出を使ったりして、大事な医療の体制や、高齢者のケア、貧富の差をなくすことに使われていません。そもそも国会議員が七〇〇人以上もいることが、無駄だと思います。国会議員を減らせば、その分のお金を違うことに使えて、充実した政策ができます。また、国会議員になるはずの人が他で働けば、違うところの人手不足が解消されたり、その分税金が増えたりします。ならば国会議員は減らしても問題ないと思います。

話は変わりましたが、増税すると使い方によっては、善い事はたくさんあります。税金が多い国でも成功している国はあります。例としては、スウェーデンやフィンランド、ノルウェーなどの北欧の国です。これらの国は、消費税が高いです。スウェーデンは二五%、フィンランドは二二%、ノルウェーは二四%となっています。国民が負担している程度も日本より一・五倍多いです。これらの国の税金の使い道はなんでしょう。それは、主に子供の教育です。この三国は、大学までの学費が無料で、特にフィンランドは、教育設備が充実していて世界一位の教育大国と言われています。その他にも出産の費用が無料だったり、育児休暇を長く得たり、できます。しかし、こんなにも税金が高いのに対し、幸福度ランキングでこれらの三国は上位にいます。中でもフィンランドは三年連続で一位に輝いています。このように、税金が高くてその分社会福祉が充実していれば、国民からの支持を損なうことにはなりません。そのため、日本は今挙げた北欧の三国のように税金が高くて福祉の充実した国を目指すべきです。

明日を守る税

練馬区立大泉学園桜中学校 3年 石川 那奈

令和二年は、新型コロナウイルス感染症の拡大で生活に大きな変化が起きています。この今まで経験したことのない事態をきっかけに、社会の仕組みや税の使いみちについてあまり興味のなかった私も、日々の報道を注意深く受け留めるようになりました。

中でも感染対応に当たる保健所の重要性に関心を持ちました。公民の授業では、社会保障制度の四つの柱の一つである公衆衛生活動を担うと学習しましたが、社会にとって必要でも、企業の利益が見込めないようなサービスを、政府が税金で提供するという仕組みは、実際このようなことなのだと理解しました。

私はこれまで、食中毒が発生した時に立入検査や消毒を行うのが保健所の仕事だという印象を持っていました。私自身が保健所の方と直接関わった記憶もありません。しかしそれは言い換えると、業務に携わってくださる方々のおかげで私の周りでは環境衛生が整えられ、感染症の予防がなされ、身の危険を感じることなく生活しているということなのかも知れません。思い返して、手元にある母子手帳を見てみると、生まれてから受けた検診や予防接種がいくつも記録されていました。私は父の仕事の都合で、七回引越しを経験しましたが、日本のどこへ行っても適切な時期に通知をもらい、漏れることなくそれらを受診出来たことは見知らぬ土地で育児をする母にとって大変心強かったそうです。私の気付かない間にも様々な場面で公的な支援を受けていたのだと分かりました。

私は今回の感染症の影響を目の当たりにして、自分と大切な人の健康を守る行動の大切さを感じています。今出来ることは限られていますが、ワクチンで予防出来る感染症には積極的に対応したいと考えます。思えば、幼い頃に受けた予防接種は痛くて怖いものでしかありませんでした。それから少し成長すると、大きな病気をしないための注射なのだと教わりました。そして今、予防接種は個人の健康を守るだけでなく、地域の集団感染を防ぐこと、受けたくても受けられない妊婦さんや赤ちゃん達を守ることに繋がることを知りました。予防のため、継続して組織的に接種を行う事は、政府の判断と税金が無くては出来ないことだと思います。また予防接種に限らず、多くの方が健康で安心な生活を送るために納税は必要不可欠だと重ねて思いました。

自分が社会に支えられて成長したと考ええると、感謝の気持ちと責任感が湧いてきます。今、日本では少子高齢化が進行しています。必然的に、社会保障費の増加に伴った納税者の負担は大きくなり続けると考えられています。私は将来公務員になって、日本に住む人々が大切な人と安心して暮らせる社会を築きたいと思っています。そのために私も、社会の一員として怠ることなく、しっかりと納税の義務を果たしていきます。そして、将来の社会に微力ながら貢献したいです。

空は晴れる

野田市立第一中学校 3年 松本 心晴

山はどっしりと大きく、緑色の木々をなびかせ、とてもすがすがしい香りがする。海はキラキラと輝き、水着が無くても膝の辺りまでジャブジャブといつでも入る事が出来る。私の大好きな祖母の住む広島の家は、山と海に囲まれていて一年に一度夏休みに必ず行ける私の大切な場所だ。

一昨年前の七月、私は不安で眠れない夜を過ごした。西日本豪雨と命名され、死者二百六十三名、建物被害は、五万棟を超えたこの大災害は、広島に住む祖母の家も直撃した。

「おばあちゃん崖から離れた部屋にいてよ。」
と、電話で伝えるのが精一杯だった。祖母の家の後ろは、とても大きな山がそびえ立っている。母は、

「斜面が補強工事されていて良かった。」
と、言いながら心配そうな顔をしていた。

翌朝、祖母の大丈夫という声を聞いた時の安堵感は今でもはっきりと覚えている。その夏広島に向かった私達は、自然災害のすさまじさを見せつけられた。車ほどの大きな岩は山から転げ落ちて道をふさぎ山道は途中から崩れ落ち、道がなくなっていた。祖母の家に被害はなかったが、祖母が大切にしていた畑は、土砂で流されていた。目の前の景色が元に戻るのか、想像が出来なかったと同時に、がれきの撤去や道路の補修などに、たくさんの重機が動いている事に希望が見えた。

自然災害などの復興には税金が使われている。人が傷つき、目の前の現実と向き合うのが困難な状況の時、税金が使われる事は困った人達を助けられる大切な力だ。祖母の家を守った裏山の補強工事にも税金が使われていると教えてもらった。税金は私達の生活の中で、誰かを助け、誰かを支え、誰かを笑顔にしている。それは、自分自身の事でもあるし大切な人達の事でもある。守ったり守られたりしながら支え合って生きている。みんなに幸せに生きる権利があって、助け合う優しい心がある。平和な毎日は願うだけでは叶わない。自分達で作り出していくものだ。税金はその土台となり、毎日を支えてくれる大切な役割を果たしているのだ。

西日本豪雨は、たくさんのボランティアの力もあり、みんなが上を向いて頑張った。あの時、私は祖母に何かをしてあげられたのだろうか。母に聞くと、
「心晴の笑顔はみんなに力をくれるんだよ。」
と、言ってくれた。私に出来る事はまだ小さいけれど税金と同じ様に、誰かを支えられる強い人になりたい。

祖母は畑を復活させ今では、作った野菜を千葉の私の家に送ってくれている。
「心晴ちゃん、空はいつか晴れるよ。」
といつも一言、私に大切なメッセージをそえてくれる。私達の未来は晴れると信じている。一人一人が納税という形で支え合い、安心した日常を送れる事に感謝しなければならぬと心から思った。

幸福度から考える税金の在り方

白井市南山中学校3年 高塚 蒔水葉

最近、「世界幸福度ランキング」というものがあることを知りました。これは、国際幸福デーの三月二十日に、国連が毎年発表している幸福度のランキングです。各国の国民の調査に加えて、様々な要素を元に幸福度を計るというもので、今年には百五十六ヶ国を対象に調査が行われました。調べてみると、日本は六十二位、一位は三年連続でフィンランドでした。フィンランドの消費税は二十四パーセント、その他の税金も日本と比べるととても高いにもかかわらず、一位を獲得し続けています。その理由や、日本との違いが気になったので、詳しく調べてみました。

先にも述べたように、フィンランドの税金はとても高く、一見すると「大変そう」、「住みたくない」と考えてしまいがちですが、フィンランド人のおよそ八割が、高い税金を払うことに納得しているというデータがあります。その理由として、学費や医療費の無償化、各種手当など、わかりやすい形でサービスに還元されており、国民がリターンを直接的に実感しやすくなっているということが挙げられます。フィンランドをはじめとした北欧では、社会保障がとても充実していて、生まれてから死ぬまで、国に保障されています。「高い負担」は同時に「多くの安心」をもたらしているのです。

私はこれらのことを知って、私の中の税金のイメージが大きく変わりました。今まで税金が高い国は嫌だなと思っていましたが、国民から集められた税金が正しく国民のために使われ、その結果、国民の生活が豊かで幸せなものになるというのはとても素敵なことだと思いました。みんなで困っている人を助け、支え合う、これが税金の目的なのだ実感しました。私は今、教育、公共交通、医療など、様々な公共サービスを受けていて、その源は税金です。私の生活は一生懸命働いて税金を納めてくれた「見えない誰か」に支えられていると思うと、普段の生活は決して当たり前なことではなく、たくさんの人の思いの上に成り立っている、とてもありがたいことなんだと感じました。あと数年後、自分が納税者になったら、今度は私が「見えない誰か」になって、未来の日本を支える子供達や、困っている人の力になりたいです。そして、なくてはならないものである税の制度を、次の世代へ伝えていきたいです。

私が税を意識したのは、歴史の授業で平安時代に租・庸・調・雑徭が人々に課されたと習ったときです。いままでの知識で税を振り返り、これからの税について考えてみました。狩猟採集生活から農耕牧畜へと生活様式が変わり、人が集団で生活して社会をつくり始めたころは、生産性が低く、社会に属する全ての人々が農耕牧畜に携わらなければ生活ができなかったため税はありませんでした。しかし、生産性が上がるにつれ農作業等に従事しなくてもよい支配者階級が現れ、税という仕組みを作りました。また、余った米などの生産物は財産となりました。平安時代は貴族が税の見返りに人々の生活や財産を守らなかったため、荘園ができ、貴族が税を獲れなくなると、貴族社会は終わってしまいました。税の徴収は納税者への見返りがなければ成り立たないのは、今も昔も変わらないと思います。その後は、武士が台頭して封建時代となり、税の獲得者は領主となりました。ヨーロッパの市民革命や産業革命後の国際競争の波が押し寄せ、明治政府が確立されると、税は物から貨幣に変わりました。国民主権の立憲君主制となった今でも税は貨幣で支払うことに変わりはありません。税の対象という面では人単位、耕作面積単位など人の能力や生産高を考慮しない税負担から、税を貨幣で納めることになり、主に所得単位、消費単位へと人の活動に応じて負担することになりました。明治時代以降直接税の比率は税収に占める割合が高かったけれど、少子高齢化社会となり社会保障の重要性が高まった現代は、消費税などの間接税の比率が高まっています。

このように、社会の仕組みや時代によって税の形や負担の仕方は変化しています。国が存続するために税の在り方は変わっていくものと思います。しかし、昭和四十年代から税収よりも歳出が増え、その補填のため発行した国債は、世界でも類を見ない額に高まっています。今世界的に流行しているコロナ禍への対策でも、税は事業者の休業補償や国民への十万円給付などに使うお金は、税を先取りした赤字国債で補うとニュースで見ました。私は、税の歴史を通じて、税の先取りである国債の発行については疑問を感じています。国の予算不足を国債で補うことは、次の世代に借金を負わせることだと思います。歴史を振り返ると、封建時代には徳政令で借金を帳消しにするといったことがありました。しかし、外国でも日本の国債を買っている現代では、借金帳消しは信頼を失い、国が破綻することを意味するので、とてもできないと思います。今コロナ禍で新しい生活様式が推奨されていますが、税収の範囲内で国を回すことを考える時期ではないかと思います。税が足りないなら増やすことを考えなければなりません。今の大人には、自分たちの時代のツケは自分たちで解決し、次代にはきれいな状態でバトンタッチしてほしいと思います。

「心の架け橋となる税」

伊勢原市立成瀬中学校 1年 伊藤 理緒

先日、私はアルバムの中の一枚の写真に目を止めた。母がやせ細った赤ちゃんを抱いている。シーツの無いベッド、さびたベッド柵、七、八歳くらいの三人の少女が、母の側ではにかんだ笑顔をこちらに向けている。その内の二人は腕にギプスをつけ、骨折しているらしい。また一人の少女は、頭、顔、上半身に火傷らしい大きな傷を負っている。そこは、医療や教育、社会保障が充足していない、中南米の中でも最も貧しいといわれる国。その国の小児総合病院で働いていた頃の母の写真だ。

日本のODA（政府開発援助）の年間予算は、五六一、〇一五、三三二億円。この援助資金は、開発途上国の上下水道等、病院や学校建設等のインフラ整備、かんがい農地への改良、農作物生産の技術指導、専門職種の養成などにあてられている。そして、現地で日本人が直接、援助活動を行っている。

私は学校の社会科の授業で度々、国民の三大義務のひとつは「納税」である事を習っている。物を買うごとに消費税。給料からは所得税。住んでいる県、市へは、市県民税。所有している家や土地へは、固定資産税などが課され、そして徴収された税を原資として、私達への教育費、学校の運営や設備費の負担や、安全な通学路の整備維持。また一定の支給基準はあるが、子ども手当や小児医療費の無償化などを担っている。そして高齢者や障がい者の生活を支える年金支給。万一に生活が困窮した時は、生活保護制度で、最低限度の生活が営める事を保障している。近年では災害復旧や防災対策。現在は、コロナウイルスの感染拡大による、人々の経済活動の急激な落ち込みの緊急対策費として、数々の給付金の支出に当てられている。税の臨機応変な活用に今日の私達の生活は支えられている。

私は、それらの事を思いながら、少し心配な事があった。それは、日本の税が、海外援助に使われて…。という思いだ。「豊かさとは何だろうね。」と母が言った。私は、物質的な豊かさや、教育や医療があたり前に受けられる事だろうかと思った。反面、この写真の少女と私は、生まれた国が違っただけで、この少女は私だったのかもしれないとも思う。

そして後に、日本のODA、国際的な開発援助活動がいかに大切な事であるかが分かった。母の写真の国は、東日本大震災時には一番に支援を申し入れ、弔慰の意を示した。また他のODA対象国も、自国の災害援助チームを被災地へ派遣し困難な援助活動を行った。ODAは、国際社会での日本の地位を支え、そして世界の国の人々との架け橋を築いていたのだと認識した。

私の将来の夢は、助産師だ。日本のみならず貧困や生まれ育った環境で、妊婦や乳幼児が命を落とす事が無い様な助けになりたい。そして、税を納め、また必要な所で、税の活用を担える大人へと成長したいと思う。

税に寄り添う私たちの未来

南部町立南部中学校3年 依田 紗采

「税」とは、国や自治体が行政に必要な経費として住民や法人から取り立てるお金のことである。

中学三年にもなって、社会の色んなことに目がいくようになった。七月頃、授業で租税について詳しく学んだ時があった。税の使い道などまったく知らなかった私は話を聞いてとても驚いた。授業の中では、もし税金がなかった時の視点で人々の生活を考えてみた。すると「道路の整備ができていない」「街中がゴミだらけ」「医療が受けれない」など。私たちが生きている現代社会において比べものにならないほど、世の中がおそろしかった。税金を払っている理由。それは私たち、そして国のためにあるものだと実感した瞬間だった。

授業が終わった後も私はもっと税のことを知りたいという興味があった。

まずは、税との関わりをもう一度詳しく知るところから始めた。調べてみると、「学校、公園、警察、消防」などがあった。日常生活において深く関わりのあるものがあり、大切にしなければならないと感じた。

次は、令和二年度の一般会計予算について調べた。当初の予算は、約百〇二兆七千億円だった。社会保障がトップで全体の三分の一を占めていた。

その他として、私は去年とは違うことと税を結びつけた。今、現在も感染者が多くなっている新型コロナウイルス感染症。この影響で亡くなってしまった人たちも多かった。その中でも、政府が各家庭に給付金を配った。この給付金も今までの私たちが払っていた税からできている。両親は、感謝していたが私は感謝とともにこれからの未来が心配になった。この給付金を全国に配布したことにより今後私のようなまだ若い人たちが多大なお金を払っていくことになるのだ。現在、消費税十パーセントだがこれから十パーセント以上の世の中になっていくかもしれない。私たちの暮らしのためにある税金だがこれからの重要な問題になっていくと思った。

しかし、税金は納めることによって私たちの暮らしをよりよくしていることは変わらない。

税金は、私たちの暮らしを支えているが国民全体で負担しなければならない。国が一丸となり私自身も、もっと税金の使い道を監視していく必要がある。

生かされた命

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校3年 柳 靖奈

「靖奈は生まれてから小学校低学年になるくらいまで、本当に体が弱くて頻繁に病院に通っていたから、子ども医療費助成制度があつてとても助かったのよ。」

この作文を書くにあたり、税金についてどのようなイメージを持っているか母になにげなく尋ねたところ、このような答えが返ってきた。

全く記憶はないのだが、保育園に通っていた二才頃、夜中に突然四十度近い高熱を出し、一分近い痙攣を起こし救急車で運ばれたことがあった。体の症状から髄膜炎が疑われ脊髄から髄液を取って調べた結果、細菌性髄膜炎という診断が下った。夥しい細菌数で五〇%の確率で何らかの後遺症が残り、三〇%の確率で亡くなるかもしれないので覚悟して下さい、と言われたそうだ。しかし、先生たちの迅速な診断と適切な治療によって、山場だと言われた一日目の夜を乗り越え、その後徐々に熱が下がっていった。一カ月におよぶ入院生活の中でMRI、CT、血液検査、視力検査、聴力検査、運動神経の検査など、ありとあらゆる検査を行い無事退院することができた。その入院費用は、付き添いをしていた母の簡易ベッド代と部屋代だけだったそうだ。なぜそれだけしか払わなくてよかったのだろうか。

それは、私たちが安心して生活していくために必要な医療を受けることができる、「社会保障」という公的サービスがあるからだ。もちろんこれは、税金によって賄われている。

小学校五年生まで住んでいた東京都港区は、中学校三年生まで診察、薬、通院、入院が子ども医療助成制度により無料であり、今住んでいる石川県白山市では十八歳になるまで同様に無料である。なんと心強いことだろうか。

退院後、定期的に検査を受けたが後遺症は全く残らなかった。中学生になり、バスケット部でキャプテンを務められるくらいまで元気に成長した。税金によって生かされたことに心から感謝している。

税金は、私たちが気づかないだけで日常生活に深く浸透している。近所を流れる手取川やそれに架かる橋、砂防ダム、道路、それらの管理や整備、冬になれば除雪車、ゴミ収集や公園、図書館、美術館の利用サービスなど全て「税金」の恩恵である。税金がどれだけ私たちの生活を陰で支えてくれているかが理解できた。一方で、税金がないと私たちの暮らしが成り立たないことも感じた。

十五歳の私たちはまだ未成年で、納税といえば消費税くらいであり、与えられてばかりの生活だが、大人になり働き始めた際にはしっかり納税しようと思う。生かされた命を大切に、社会貢献の気持ちを持ち、皆が健康で幸せに暮らせる豊かな社会を作っていきたいと思う。

「えっ、何!?!」

二時間目の授業中、英語のリスニング放送に市役所の同報無線が重なり、周囲がざわついた。後で、Jアラートと呼ばれる全国瞬時警報システムだったことがわかるが、令和二年七月三十日午前、関東・伊豆諸島・東海・東北・甲信・北陸地方の広い範囲に、緊急地震警報が発令された。教室にいた私達は、机の下に潜って緊張した数分間を過ごしたが、誤報だとわかって心の底からホッとした。

その日、学校からの帰り道、

(もしも、大地震が起きていたら・・・)

と、シミュレーションしながら私は歩いた。校舎を出て正面のグラウンドは、私達生徒の一時避難待機場所であり、状況によってはヘリポートにもなるかも知れない。その横にある体育館は、地域の人達の避難所に指定されている。校門を出て少し行くと国道一号線があり、必要な時には自衛隊の人達がこの国道を通って、きっと駆けつけてくれることだろう。

こうして考えてみると、普段何気なく使っている校舎やグラウンド・体育館、平常時には深く考えることもなかった道路や消防防災ヘリコプター、そして自衛隊と、私達の安全で安心できる社会生活の基盤は、物であれ人であれ税金によって支えられていることに、改めて気づかされる。

もしも、正しい納税が行われなかったとしたら、道路はボコボコのまま放置され、災害時に必要な備蓄も不足し、その輸送手段も整わない！なんて事態に陥ってしまうかも知れない。東日本大震災の時に実行できた、県境を越えて助け合うということが不可能になってしまったら・・・と、考えただけで辛くてならない。

「宮城の、あの光景は生涯忘れられない。」当時、災害派遣に幾度も出動した私の伯父が口にした言葉だ。震災後、被災地では避難所生活の住民の方の家や店で、空き巣被害が多発していたそうだ。そこで治安維持のため、宮城県内で活動したという。その時目にした多くの被災地は、まるで、がれき野原というほかにはなく、そこで暮らしていた人達を想像し、胸を締めつけられる思いだったという。

あの震災から九年。その間には、復興特別所得税という、被災地を長く支える味方もできた。税金とは、今在る私達の暮らしを守るだけでなく、これからの未来へとつなげていく、安心・安全の蓄えなのだと、私は考える。

私の母はフィリピン出身で、私をよく夏休みなどの長期休暇の時にフィリピンに連れて行ってくれました。その時の出来事です。

私達は近くのショッピングモールで買い物をするために車に乗ってショッピングモールに向かっていました。そして道路で信号が青になるのを待っている時、私と同じくらいの年の男の子が車がたくさん行き交う道路にもかかわらず、こちらに向かって一人でとぼとぼと歩いてきました。その男の子の格好はボロボロのTシャツとズボンに裸足で、かみの毛も整っておらず、決してきれいと言えるような格好ではありませんでした。どうしたのだろうと車内から様子うかがっていると男の子は手に雑巾を持ち、車の窓を拭き始めました。日本ではこのような光景を見たことがなかったのでおどろきましたし、なぜ見知らぬ男の子が急に窓を拭き始めたのか疑問に思いました。そのようなことを考えているうちに窓拭きが終わりました。その時間約数十秒。本当にきれいになったのか怪しいくらい短い時間でした。すると男の子は運転席の窓をノックし、運転席に座っていた叔父から日本円で数百円ほどもらい、他の場所へ行ってしまいました。何が起こったか分からず、叔父にたずねてみると、貧困で十分な収入を得られない家庭に生まれた子供が窓拭きなどをしてお金を稼いでいるということを知りました。

私はとても衝撃を受けました。家庭事情で私と年もそれほど変わらない子が家のために働くだなんて考えたこともありませんでした。それにその日は平日の午前。本来なら学校にいる時間帯ですので学校にも通えていないことでしょう。

私は同年代の子が学校に行かず、家の収入のために働いていることにとてもおどろき、フィリピンの学校の制度は日本とどのように違うのか母にたずねてみました。フィリピンの学校は日本と同じように授業料は無料ですが、教科書や特別授業、学校設備などは自分で負担しなければならないため、貧しい家庭では学校に通うことができず大人になってからも安定した職業につけず、その子供も同じようになり悪循環が続いてしまうそうです。

しかし日本はどうでしょう。授業料、教科書、学校設備その全てが税金で払われているのです。そのおかげでほとんどの人が学校に通え、好きな職業に就くことができるのです。学校に通って勉強をする。当たり前のことに感じててもこれは本当にすごいことなのです。税金があるから学校に通える。税金があるから当たり前のように生活ができる。それほど税金は私達の生活を支えているのです。

しかし今の私は周りの大人のように働いて収入を得て税金を納めることはできないですが消費税でなら納めることができます。そうして今の自分にできる事を考え、税の大切さを理解し、税を納めて社会を支えたいです。

母と話して気付いた税金の話

名古屋市立一柳中学校3年 坂本 若菜

コロナウイルスの影響で日本経済は大きな打撃を受けています。特別給付金やG o T oキャンペーンなど新しい政策が行われていますが、それらは全て税金が財源になっています。しかし、現在の状況や今後の影響を考えると財源が減って困っていると思うので、必要な財源を確保する為に新しい税を考えてみました。

私が提案したいのは、コロナウイルス対策の為に「移動税」です。その税は県をまたぐ電車や飛行機などの交通費や高速代、ホテルでの宿泊代などに課税するものです。集めた税収は地方の医療対策に使用します。

移動手段に課税することで、移動する人を減らしウイルスの拡散を抑える効果と医療体制が整っていない地方医療を支える事が出来るのではないかと考えました。

そう母に話しをしたら、「移動税を導入したら旅行する人が減少し、ただでさえ観光客が減って苦しんでいる観光地は更に追い打ちを掛けられる事にならないかな。それに移動するのは観光客だけじゃなくて運送業者も関係するよね。その分運賃が値上がりし、物価の上昇で生活も苦しくなり、景気は更に悪化すると思うよ。」と言われました。

また「地方医療対策と言っても、元々医師不足の過疎地ではただ給付するだけでは意味がなくて、どうやって医療体制を構築するのか難しい問題なのよ。」とも教えてもらいました。私は大都市に生まれたので今まで医療体制に不安を感じた事はありません。だから母の話聞いて初めてその地方の状況に合わせた税金の使い方が必要なのだと気付きました。

母と一緒に考えてみた地方医療対策の一例は、効果が出るまで時間は掛かりますが、医師や看護師を目指す優秀な学生に奨学金を出して、その代わりとして一定期間その地方で働いてくれる人を育てるというものです。また進化している遠隔医療システムなど最新の医療機器を導入するための助成金を出すのも一つのアイデアなかなと思います。医療体制が整えば安心して出産も子育てもできます。それによって過疎化を少しでも食い止める事にも繋がるのではないかなと思います。

母と話して、新しい税金を作る事は、対象や税率、徴収のやり方や使い道など難しい問題がたくさんあるのだなと改めて気付きました。

税金は人々が豊かで安心して暮らす為の大切なものです。ただ集めて使えば良いという訳ではなく、様々な問題を解決しつつ経済を循環していく使い方が重要です。だから税金を扱う仕事はとても責任が重いですが、その分やりがいも大きいと思います。

私は将来税金の仕組みを考えるような仕事や、税金と関わる仕事に就きたいです。その為にも、今後の政策がどの様になるか注目しつつ、ニュースを多角的な視点で捉えられる様になりたいです。

働く老人の所得税について。

大津市立田上中学校3年 竹村 誠

「所得税」とは個人の所得に対して国から課せられる税金の事であり、所得税の税率は所得が多ければ多い程高くなる。我が家は父と祖母が税金を払い僕と弟、母は父の扶養家族となり大きな税金は払っていない。父は税金が高いけど仕方ないと受け止めています。でも税金の高さに不満を感じ、ぐちを言う時がある。我が家で税金の事が一番話題になる時は年三回程あり、父と祖母が言い争います。父がボーナスをもらいまず言う事は「一生懸命働いてもこれだけ税金に取られたらきついわ。」それに対して祖母が「税金を納める成人の数が少ないんや。しゃあないな。」「わかってるわ」と父。この会話が逆転するのが二月。確定申告の時です。祖母は定年退職後老人の年金をもらいながら週四日働いています。年金以外に所得のある人は所得税を納めなければならないからです。「働けば働く程税金も保険も高くなるわ。年金が段々へるしちょっと辛い。けど働かな皆に迷惑かけるしな。」と言う祖母に「働けるだけ幸せやと思わな。」と父。僕はいつも思います。祖母が税金を払ってまで何故働くのか。仕事を辞めたら税金を納めなくても良いのか。税金を払う時、腹が立たないのか。父が税金を払うのは理解出来ます。でも祖母は大きな手術をして今でも病院に通って治療代を払い薬代も払いそれでもまだ所得があるから税金を払わないといけなかったのか。そこで税についての思いを祖母に質問しました。すると次の様な答えが返ってきました。

祖母は昭和二十年九月に生まれました。この年に戦争が終わり戦争に行っていた男の人達が帰国し、団塊の世代と言われる現在の老人達が生まれました。祖母達は戦後の貧しい中育ち中学を卒業してすぐに社会人として働きに出た人達が多くいたそうです。高校に進学した人は少く大学となるともっと少なかったそうです。だから税金を納める人も多く、文化的な生活をする為に一生懸命働いて貯金したのです。その結果、産む子供の数は一人か二人、多くて三人でした。昔文化的な生活を望んで働いた事、将来はゆっくりと余生を送ろうと思っていた事等を話してくれました。一つだけ後悔と言うか残念に思う事は子供の数が少なくなった事。一人や二人しか産まなかった結果が今の納税者の減少という結果の一つでもあると思う。だから昔文化的な生活を送った分、今働いて所得に応じた税金を納める国民の義務を果たし、若い人達の負担を少なくすると同時に高齢者の方を支える力にならなければならないと思う。働ける事に感謝し、まだ納税出来る社会の一員である事に喜びを感じている祖母の所得税論でした。この所得税論、これで良いのか、他に方法はないのか、これからしっかりと考えて行く事が僕達に求められていると思う。

納税という社会貢献

京都府立福知山高等学校附属中学校 3年 辰巳 讃良

「税金」って何だろう。私が普段、税金を意識するのは、買物で消費税を払うときくらいだ。それも、少ない小遣いの中から出すことに対し、「どうして子どもの私まで払わなければならないの？」と常に不満を持っていた。だから、税金や国家予算と言われると、難しくて、自分とは無関係のものというように感じていた。

しかし、私自身の生活を振り返って考えてみると、高齢の祖母は老齢年金、父は障害年金を受給している。私も「子育て支援医療費」により、未だに医療費は無料である。なかでも、父は、私の幼い頃に病気で倒れ、その後遺症で働くことができない身体になってしまった。ある意味、母子家庭となった我が家にとって、年金の存在は大きい。とくに、突然父が倒れたとき、当時無職だった母は、収入を絶たれた上、父の看病とまだ幼い私と兄の世話もせねばならず、どう生活すればいいか途方に暮れたそう。しかし、長期間に渡る入院費には高額療養費制度の利用が、生活費としては傷病手当金が出、「経済的にも精神的にも、とても支えになった」と母は言っていた。調べてみると、これらの「セーフティネット」は税金の働きの一つで、私たち家族はそれに救われたとすることができる。

なぜ私たちは、税金を払わなくてはならないのか。それは、人は誰もが「健康で文化的な最低限度の生活を営む」権利があるからだとは私は考える。今、日本には、新型コロナウイルスによる経済困難から、貧困状態の人が増えている。かつての私たちと同じように、様々な施策による経済的支援で救われた人たちがいるだろう。しかし、それは、みんなが協力して税金を出し合うことで、初めて成り立つ。つまり、みんなにとって安心して健康的な社会を作るには、私たち自身が納税の義務を果たす必要があるのだ。

その一方で、今の日本は、多額の借金を抱えている。いわゆる「国債費」だ。今年度の赤字国債発行予定額は約 71 兆円で、累積 1 1 1 4 兆円にものぼる。この借金を返すのは誰か。それは、今予算を決めている政治家ではなく、未来の私たちだ。そう考えると、私たちには、みんなが払った税金がどのように使われているか、その使い道を監視する責任があると言える。

日本では、少子高齢化が急速に進んでいる。これからは、今まで以上に、若者と高齢者も元気な人はみんな働き、みんなが社会を支える——、そんな社会へと変わっていくのではないだろうか。私もいずれ大人になり、納税者の一員となっていく。今までみんなの税金によって助けられていた私が、今度は税金を払うことで、他の困っている人を支えていきたい。そのためには、みんなの意見を尊重する自由と責任ある社会を築き、私自身も政治や社会に興味を持ち、税制や税金の使われ方にも高い意識を持ち続けていきたい。

今、私にできること

大阪市立市岡中学校3年 清水 みなみ

私のお小遣いは、毎月三千円です。消費税が十パーセントに上がっても、母は何くわぬ顔で三千円を手渡してくれました。世間話のように、

「今月から消費税上がるなあ。」

と、最後の抵抗を試みたものの、予想通り私のお小遣いが上がる事はありませんでした。そんな時、店内で飲食すると消費税が十パーセントかかるのに、持ち帰ると八パーセントというお得な情報を知りました。これは良い話を聞いたと思い、大好きなハンバーガーやドーナツは、できるだけ家で食べる様に心がけ、私なりの節約を試みました。まさかこれが、節約ではなく、そうしないといけなくなる日が来るなんて夢にも思わずに・・・。

二月末から、大好きな学校が突然休校になりました。そう新型コロナウイルス感染拡大防止の為に休校です。毎日家で、家族が戻るまで、一人で過ごす日々が続きます。店もどんどん休業していきます。家族で外食という私の楽しみも不可能になっていきます。母が休業要請を受けている店に関わる人達の暮らしを心配し始めます。

「こんな事なら二パーセントなんてケチらずに、お店に支払ってれば良かった。」

と、母に言うと、

「消費税は、国や地方にお店を介して、間接的に納めている税金で、お店の人達の利益にはならないよ。」

と、教えてくれました。それなら良かったとホッとした私に、母は言います。

「でもな、今、国や地方が、困っているたくさんの人を救うために出している給付金は、みんなが日頃納めている税金から支払われているねんで。こんな時の為にも、日頃からきちんと税金を納めていれば、堂々と給付金をもらう事ができるし、少しは役に立てているなって思う事ができるから、消費税分を節約するのに必死になるよりは、支払った方が気分は良いかもな。」

そう言われ、今までの自分が少し恥ずかしくなりました。

今も、コロナウイルスとの闘いは続いています。もっともっと、税金を投入しないとイケない状況が続くと思われます。そんな中ですが、幸せな事に私は、色々な人達に支えられ、学校・部活など日常生活を取り戻しつつあります。今の私に出来る事は少ないですがとりあえず税金を納める事の意味、また、税金がどのように使われ、どのように人々の暮らしに役立っているのかを、今から少しずつ学び、将来の生き方に役立てたいと思います。

でも、やっぱりお小遣いは上げて欲しいです。

私の妹は、生まれつき「心房中隔欠損症」という病気を持っています。この病気は、心臓の右心房と左心房の間を隔てる筋肉の壁にあなが開く病気で、先天性疾患は百人に一人の割合で起こると言われています。

そんな私の妹は、産まれてすぐに病気が見つかり、大きな病院に運ばれました。私はこの時三歳だったので覚えていませんが、父と母はとても不安だったそうです。妹は、幸い命に別状はありませんでしたが、それからは年に一度、電車で一時間ほどかかる病院に通うことになりました。

そして、私が小学四年生になる年の春、妹がカテーテルの手術を受けることになりました。この手術を受けるためには一週間の入院が必要で、私は祖母の家で生活することになりました。父と母は毎日妹のお見舞に行っていたので、私は寂しくてたまらなかったことを今でも覚えています。そんな状況で一週間を過ごし、妹は無事に退院することができました。寂しくてたまらなかった一週間も、家に帰ってきた妹の笑顔を見ると、頑張っただけ良かったなと思うことができました。

妹は、本来なら何百万円もかかる手術を、大阪市の「こども医療費助成制度」のおかげで、五百円ほどで受けることができました。もし日本に税金を納める制度がなければ、もし妹が日本で生まれていなかったら、私は妹の笑顔を一度も見ることはできなかつたかもしれません。私の妹は、私は、私の家族は、税に助けられました。

今、私の妹は毎日元気に学校へ通っています。将来、ファッションデザイナーになることを目標に、日々服のデザインを考えています。また、私が大人になって結婚するときには、ウエディングドレスを作ってねと約束しています。将来の話をするのは本当に楽しいし、妹とそんな話ができるのは幸せなことだと思います。

私の将来の夢は、学校の先生になることです。この夢を叶えるために、私は、税金が大きく関わっている学校という場所で、もっと沢山の事を学んでいきたいと思っています。また、公務員のお給料は税金から払われるので、私はこれからもずっと、税と向き合いながら生活していきたいと思っています。

病院と学校、場所は違いますが、私の妹のように苦しんでいる子ども達を支えて、明るい未来を見せてあげられるような先生に、私はなりたいです。そしてたくさん子ども達に、税の大切さを伝えていきたいです。

今年には新型コロナウイルスの影響で学校は臨時休校になり、お店は臨時休業せざるをえない状況になりました。このことがきっかけで、私は税金について興味をもちました。

新型コロナウイルスの影響で多くのお店が閉店し、失業する方が増えました。なので、日本政府が国民一人一人に一律十万円を給付することにしたのです。一人一人に十万円ずつ給付しては、いくらあっても足りないだろうと思いました。それに、そんなたくさんのお金は誰が払っているのか。疑問に思い、調べてみました。

税について調べて気づいたことが二つあります。一つは、国民全員が納めていることです。お金持ちの人がたくさん払うのではなく、その人の収入にあった税金を納めているということです。この制度によって誰かが損することなく税金が納められるのです。それは、簡単にいうと社会共通の会費のようなものです。ですが、一つの税だけではみんなが納得のいくものではなかったそうです。そこで、今の日本の税の制度はいろいろな税を組み合わせることによって、より公平に税を集めているそうです。

そして、もう一つ気づいたことは公共サービスは税金でまかなわれているということです。例えば、誰かが倒れました。税金のある社会なら救急車は来てくれます。ですが、税金のない社会なら救急車は来てくれません。そんな社会になったら、大変ですよ。

こうして、私たちの生活が守られているのです。私たちが学校に通えるのも安全に生活できるのも税金のおかげです。そして、信号機が使えることも、税金のおかげなのです。ですが、日本は少子高齢化が著しく進んでいます。少子高齢化が進むことによって、私たちが安心して生活していくために必要な公共サービスの費用が増えていくことと、その費用を負担する働き手が減っていくことが大きな問題となっています。この生活が続くと、年金制度がなくなり、医療費を全額払わないといけなくなります。老後の安定した生活や健康で文化的な社会を実現するためには大きな費用を必要とします。その財源の中心は税金なのです。政府の方からどれだけの公共サービスを受けて、その費用をどのように負担すべきなのか考えることが大切なのではないのでしょうか。

税金を納めることは国の三大義務と言われるぐらい大切なことです。今回、何気ないことがきっかけで深く知ることができました。税金は、日本全体を支える役割があると思いました。これからは、税金について正しく理解して、税金を納めることができる大人を目指していきたいです。

私の祖父は緑内障という病気を患っている。緑内障は、視野が徐々に欠けていく病気で、最悪の場合失明してしまうこともある。今、祖父は失明こそしていないが、新聞などの文字はもう見るできない。そのため、日々の生活に支障が出ることもたびたびある。緑内障は進行性の病気なので祖父は検査のために三ヶ月に一回、定期的に病院へ通っている。ある日、検査と一緒についていったときのことである。会計を待っている間、祖父が医療費の負担のことについて話してくれた。

現在、祖父は七五歳だが、普通七五歳以上の高齢者であれば、かかった医療費の一割だけを窓口で負担することになるそうだ。ただ、祖父は緑内障で障がい者手帳をもっているため、一割全てを支払う必要はなく、一回の通院あたり六百円までの支払いでいいそうで、さらに三回目以降は支払う必要もないということだった。これは、重度障がい者医療費助成事業といわれるもので、障がい者手帳の一級と二級を持っている人などに適用されるそうだ。本人が窓口で支払った残りは、税金で賄われているということで、窓口での支払いが安く抑えられて助かると祖父は言っていた。

障がいをもっている方はどうしても治療や検査などで病院を受診する機会が多くなり、医療費の支払いが増えてしまうと思う。そのため、重度障がい者医療費助成事業があれば、そうしたことで困っている人はとても助かるのではないかと感じた。また、調べたところ国民の医療費に対して、年間一人当たり約十三万四百円の税金が使われているそうで、医療費が高いため気軽に病院に行けない国もある中で、日本は税金による負担があるおかげで安心して病院に通える国なんだと思った。

こうして考えると、税金は、困っている人を社会全体で助けるために使われることになる非常に大切なものでもあると思う。今、世界中で蔓延するコロナウイルスの影響で、ここ日本でも収入が減少したりと困っている人がたくさん出てきているそうだ。そうした人たちのために特別定額給付金や休業支援金など様々な種類の給付金の制度が税金をもとにして作られている。一方で、税金を納められない人のために納付を猶予する制度もある。

私たちは、今は健康でもいつ何時、病気や怪我で病院に通うことになるか分からない。世界的な感染症などの影響で困った状況に置かれてしまう可能性も十分にある。そんなときに税金によって作られた制度や事業が、自分とは面識がなくても困っている人を助けることになるんだと分かった。税金を納めることで、社会全体で困ったときに助け合うことができる制度が作られ、毎日安心して暮らせる社会が築かれていくんだと思った。私がこれから納めていく税金が、遠くにいるため、直接手助けをすることが難しい困っている人を助けることにも繋がっていくと分かり、とても誇らしい気持ちになった。

「支え合う未来へ」

上牧町立上牧中学校 3年 鷺谷 春空

僕の祖父は癌だ。僕が小学生になる頃癌が見つかった。家族にも弱音を吐かない祖父の癌は、見つかった時すでに進行しすぎている。

手術は一日がかりだった。僕は大好きな祖父の無事を祈り、手術は成功した。しかし取りきれなかった癌が少し残った。

隣の県に住む祖父の家に遊びに行くと、今も一見何もないような笑顔で祖父は僕達を迎えてくれる。ただ壁には毎日飲むたくさんの薬が、飲み忘れないようカレンダー式のウォールポケットに入れられている。その中には高価な抗ガン剤もあるようだ。定期的に検査も受けているし、風邪をひくだけで重症化し入院することもある。

母は祖父の体の心配とともに仕事を引退している祖父と祖母の金銭的な心配をしていたらしい。ある日祖母にこっそり尋ねると、高額医療費制度という税金に助けられていると聞いたそうだ。

高額医療費制度とは、同一月にかかった医療費の自己負担額が高額になった場合、一定の金額（自己負担限度額）を超えた分が、後で払い戻される制度らしい。

僕は普段病院にかかる時、受付で保険証を出す時に税金で7割負担してもらえる公的医療保険は知っていた。それはとてもありがたいことだと思っていたけど、すごく高額な治療を受けたなら残りの3割でさえ大変な額になると思い、大きな病気や怪我をするのが怖い人も多いただろうと思っていた。

僕は祖父が少しでも金銭的な不安を少なく治療していけるこの制度に心から感謝した。

たくさんの誰かが納税してくれたお金が祖父の命を支えてくれて、周りの僕達の笑顔にも繋げてくれた。考えてみれば、祖父もこれまで納税してきたお金で、見知らぬ誰かの命を支え笑顔を繋いできたのだろう。

さらに僕が今病院の受付で保険証と一緒に出している黄色の紙は、こども医療費助成制度という税制を使わせてもらっているのだと母から聞いた。中学校を卒業する3月31日までの子どもの医療費の負担額がほぼ無料になるらしい。同じように病気や怪我の多い高齢者には、後期高齢者医療制度という税制があることも調べてみてわかった。

僕はこのことをきっかけに、身の周りの税金の使い道を調べた。身近なものだけでも、公園、ゴミ処理、消防、救急車、警察、役所、水道、図書館の運営や道路の整備、毎日使っている教科書等、たくさんのものが税金で支えられているのだと実感した。

見知らぬ大人達の納税の恩恵を、まだちゃんと納税していない僕達子どもも受けて生きている。税金によって支え合う未来を繋いでいくには、僕もちゃんと納税する大人になって、今まで色々支えてもらった分、支え返していきたい。税金の還元の大きさを知り納得するほど、みんな支え合うため前向きに納税できるのかもしれない。

「誰か」を支援する税

学校法人開智中学校・高等学校開智中学校 3年 小泉 佳菜

私は、心に決めていることがある。

それは、「将来、国の税を担う一員として、自分にしてもらったことを返せる人になる」ことだ。

小学一年生の時、私は転校を経験した。私は慣れない環境に動揺していた。

「友達はあるかな」不安しかなかった。だが、給食を食べたとき、不安は安心に変わった。いままでお弁当の味しか知らなかった私にとって、温かな給食は背中を押してくれるものだった。

美味しくて、子どもの学校生活の大きな楽しみとなる給食。なのに安く、また平等に食べることができる。ふと不思議に思った。母に聞くと、

「それは、みんながみんなの幸せのために納めている税によって、支援されているからよ。」

と言った。

今、自分が食べている給食代はがんばって働いて税を納めてくださったたくさんの方の誰かによってまかなわれている。なんだか気が遠くなる気がした。でも、私たちを笑顔にする給食や、教科書、「教育」だけでなく「生活」を保障しているシステムが「税」だということを知るたび、感謝の気持ちがあふれた。

しかし、今の日本の税のシステムは、決して歓迎されてはいない。新型コロナウイルスによる休校中に、新聞やニュースを見る機会が増え、知ったことだが、今は少子高齢化によって社会保障費はどんどん値上がりし、働く世代への税の負担が大きい。友達の意見を聞いていても、負担の大きさ、使い道の不透明さなどから、税に対して好意的で、将来税を納めていくことに対して意欲的である人は少ない。だが、顔が見えないこそ税の意味は見失われがちであるが、自分の納めた税で、本当に誰かが笑顔になっていることを知れば、税に対しての見方も変わるだろうと私は思っている。でも顔が見えればそれは公平性を欠くことにつながるかもしれない。よって、私が今考える最善の策は、「知る」ことだ。大人に与えてもらった教育を活かして、税について学ぶこと。この税の作文を通してそうだし、税についての教室も効果的である。私自身も、税についての教室を通して税についての理解をより深め、税を将来働いて納めたいとより強く思うようになった。そして税の本質について税でまかなわれているものを見るたび、考えるようになった。

家族は私にこう言う。

「自分にしてもらったことを、返してあげられる人間になりなさい。」と。

私を税で支援してくださっている人たち。将来働いて税を納めることで、この方たちへ感謝を表せることを私は知っている。だから、「将来、国の税を担う一員として、自分にしてもらったことを返せる人になる」

父の給料明細

岡山県立倉敷天城中学校 2年 藤原 健真

僕の父は会社員だ。毎月母に給料明細という紙を渡している。僕は幼い頃からこの給料明細に強い興味を持っていた。毎月見せてとしつこくお願いしても、どうしても見せてくれず、中学二年生になっても見せてくれることはなかった。

夏休みの作文の宿題をもらった日は、偶然父の給料日だった。帰宅した父はすぐ、母に給料明細を渡した。母はそれを開き、こう言った。

「税金で引かれている部分が全部お給料だったらいいのにな。でも税金で世の中が回っているんだよね。」

このセリフは給料日に母がよく言っているので、給料から税金が引かれているということは知っていた。そこで僕はひらめいた。

「夏休みの宿題で税についての作文を書こうと思うから、将来の勉強のためにも給料から税金がどれくらい引かれているか見せてくれない？」

と頼んでみた。すると、絶対に他人に内容を話さないという条件で見せてくれることになった。小さい頃からずっと見たかった秘密の紙を見るので、ドキドキした。

僕はその日初めて父の給料の額を知り、同時に税金が自分の想像よりも高いことにおどろいた。父はニュース等でよく見る日本の平均年収も税金が引かれる前の額だと教えてくれた。それを聞き、僕はすごく損をしているような気持ちになった。続けて父は、コロナウイルスの給付金も税金から支払われていること、仕事を失った人や給料が減ってしまった人の命綱にもなるお金だということも教えてくれた。

父の話で、税金は国民のために役立つように使われていることが理解できた。父の給料明細で損をしていると思っていた税金も、世の中のためであり父の納めた税金は世の中に役立っているのだと実感した。

母からは、家や車を所有すると一年に一度納税しなければならないこと、その税金で行政の便利なサービスを受けられることを教わった。給料明細にある税金の他にも、僕が知らない税金が沢山あることにおどろいた。

両親の話聞いた後は、最初に感じた損をしているという感覚は消えていた。税金が世の中に役立っていると理解できたからだと思う。

税金を納めることは幸せに暮らすことに必要不可欠なことで、困っている時に助けてもらえる制度もたくさんあると知り、損をしていると考えた自分が恥ずかしくなった。

僕も将来は働き、もらう給料から納税するだろう。納税は直接ではないが、世の中に役立つことだと思っている。

僕も父のように真面目に働き、納税して社会に貢献できるようがんばっていきたいと思う。

私は五年前に転校した。私の住んでいる地域は、過疎地域であるため児童の数がどんどん少なくなっていき小学校が閉校することになったからだ。私が新しく通うことになった学校は、家から十キロほど離れていたため、スクールバスを利用して通学することになった。それを知った私は、

「お母さん、バス通学になったら私、毎日運賃払うの？」
と母にたずねると

「バスの運賃はすべて市が負担してくれるのよ。本当にありがたいわ」と教えてくれた。当時四年生の私には、その意味があまり理解できず、ありがたさに気づけなかった。しかし、その制度について改めて考えてみると、とても秀れた制度だったことを知った。

私は、その制度について調べてみた。まずその制度により、どれほどのバスの運賃が負担されているのか計算してみると一年間で約『百八十六万円』も負担されていた。市がこんなにも多額の負担をしていることにびっくりした。こんな大金がどこから賄われているのかさらに調べてみると、どうやら『地方交付税』という税のおかげらしい。近年都市圏と地方の人口格差とともに、財政力にも大きな差が生じ地方に住むことが困難にならないよう一定の水準を確保するため必要なお金を国が地方に保障する制度だ。また、地方交付税の原資は十九・五パーセントが消費税であった。私はそれまで、消費税が上がったことにうんざりしていた。しかし、その消費税は巡り巡って、私の生活を支えていたことを知り感謝の気持ちでいっぱいになった。

税金を払うことで、赤ちゃんからお年寄りまでたくさんの方の助けになる。しかし税金は周りの人だけでなく、なにより自分自身の助けにもなっていた。少子高齢化が進む世の中で、子供の数が減少していき私のように遠くの学校まで通わなければならない人がこれから増えていくだろう。しかし、そんな大きな課題の解決を受け持つのは税金だ。

私はこれまで税金が年金や道路、教育に使われていることは知っていたが、どこかひとごとのように感じていた。今まで何も考えずバスに乗ったり、机に向かったりしていたが今回の体験をきっかけに自分が生活をするなかで税に対して意識するようになった。税金は、私たちの生活を支えていくために今日もそしてこれからも大切な役割を担っている。そのことを忘れず、私も一人の日本国民としてしっかりと納税できる大人になりたいと強く思った。

私たちの生活を支えてくれる税金

美馬市立美馬中学校3年 逢坂 羽瑠菜

小学生の頃、夏休みになると、税の書道に取り組んでいました。小学生の頃は、先生からもらった課題をひたすら書き続け、税について何も知らないに等しい状態でした。そこで、自分なりに税の仕組みについて調べてみると、私たちはいろんな税に助けられて生活していることが分かりました。

その中の一つ、医療費です。私は、小さい頃からアレルギー体質で季節によると、鼻が完全につまり、鼻から息をすることもできなくなり、そのせいで味覚もなくなります。そして何より怖いのが咳で夜も眠れなくなります。月に一度、病院を受診してお薬を処方してもらい、お薬を飲んでいきます。先日も病院へ行きました。母がお金を払う時、いつも六百円を払います。私が、

「こんなにいっぱいのお薬と診察代で六百円は安いな。」

と言うと母は、

「そんな安いわけないだろ。美馬市は、みまっこ医療費助成制度って言うのがあって、十八歳までは、税金で補ってくれとるんよ。助かるよな。」

と教えてくれました。

私たちの住んでいる美馬市では、令和元年九月一日より、みまっこ医療費助成制度の対象を十五歳に達する三月三十一日から、十八歳に達する三月三十日までに拡大したそうです。

私は、これからも病院に通い、お薬をもらわなければいけません。でも医療費助成制度があるから、両親への医療費の負担を少しでもかけなくていいので、本当にありがたいと思います。世界には医療保険の費用が高額すぎて病気になっても、治療をうける事ができず、命を落とす人がたくさんいるそうです。私は、日本に生まれて幸せだと思います。

今、新型コロナウイルスで多くの人が苦しみ、亡くなったりしています。それにともない、国からたくさんの税金が使われ、多くの人々が救われています。私たちも学校に行けない、中学生最後の部活で総体が中止、大好きな友達と逢えない日々を過ごしてきました。いつまで続くか、分からず悲しくなります。でも、一人一人の心がけで、自分を守り、大切な人を守る事が税金をムダに使わない事になると信じています。

今回、税の作文を書く事で税について分かった事、またこれから理解していかなくてもいけない事が分かりました。私はまだ学生で税金を納める事はできませんが、今自分に与えられている事をしっかり成し遂げ、感謝の気持ちを忘れず精進していきたいと思います。そして、今は守られている立場ですが、将来守る側の立場になった時、税金をしっかり納められる人になりたいと思います。

どこかの、誰かのために役立つ税金

福岡教育大学附属福岡中学校3年 平井 雨響

二〇一九年夏、私は語学留学のためフィリピン・セブ島を訪れた。初めてのフィリピンであったため、見るものすべてが新鮮で、町中の様々な物に興味を持った。途中、とても大きな橋を渡る機会があった。それは他の橋に比べてまだ新しそうだった。日本でもなかなか見かけないその大きな橋に興味を持ち、帰国後調べてみたところ、「第二マクタン橋」という名前の橋であった。第二マクタン橋は、マクタン島とセブ島を繋ぐ第一マクタン橋の交通量の増加と耐久力の低下に伴って、一九九七年に建設された。そしてそれは、日本の政府開発援助、通称ODAの援助を受けて建設されたものだった。政府開発援助の予算の一部は、私達の納める税金が使われている。私は日本の一国民として誇らしかった。私達日本人の納める税金によって地元住民が快適に過ごせているのだ。フィリピンでのこの活動は、橋の建設による交通渋滞の緩和だけでなく、フィリピン第二の都市圏であるメトロセブの経済活動の拡大にも寄与した。地元住民にとって、生活に欠かせないライフラインの一つになったのだ。

政府開発援助によって行われている内容には、飢えや貧困などに苦しみ、十分な食料や飲み水が得られなかったり、教育や医療を受けられない人々を抱える国や地域への開発協力を通じ、それらの地域の発展の手助けがある。

しかしこの二〇年でODAの予算はほぼ半分に削減された。日本は財政難の真っ只中で、国民の理解が得られなければ、他国のためにお金を使うことはできない。少子高齢化が進む中、社会保険の充実に予算を充てることを望む声が多いのも当然であろう。近年多く発生している自然災害への対策にもお金が必要である。

ではなぜ、日本は他国の援助を続けるのか。それは、困っている国があるから、である。日本も東日本大震災が発生し、とても困っているときに、一五九ヵ国もの国から支援の申し出があった。支援は寄付や援助物資、医療支援など多岐にわたり、それが日本の復興だけでなく、国民の心をも元気にしてくれたことは言うまでもない。他にも様々な場面で日本も他国の支援を受けている。

諸外国への人道・医療協力だけでなく、今日のグローバル化した世界の中において、他国と協力して、平和で安定し繁栄した国際社会をつくりあげていくことはとても重要なことだと思う。

日本が政府開発援助を始めて今年で六六年になる。この六六年の間に、どれだけの人や国、地域を支えることができただろうか。改めて私はこの活動が素晴らしいものであると思う。全ては税金のおかげなのだ。そしてこの税金は国民一人ひとりの大切なお金であって、これらがどこかの、誰かの役に立っていることを私達はもっと知るべきである。

感謝税

宇美町立宇美中学校3年 安藤 雅

「あ、知ってる人。」

流れていたニュースが目に入る。そこにはとある芸能人が“脱税”をしたという内容があった。これをきっかけに私は“税”について知ろうと思った。私はきっと周りの人よりも多くの税に関わっているだろうと考える。

理由は一つ。私は小児慢性特定疾病を患っているからだ。私は治療のために機械を扱うのだが、その物品自体が高額なのである。他にも機材や薬を扱うため、それなりの治療費がかかる。しかしその負担を減らしてくれるのが税だ。また毎年私と同じ病気をもつ子どもが集まってキャンプを行うのだが、その施設も税金が使われている。身近なところで税が使われ、改めて私は税に助けられているのだと感じた。

外国では消費税が25%の国もある。しかし、医療費や教育費の免除が行われているなどとしてその国は“世界一幸せな国”とも言われている。免除という点では私達学生が大きく税に関わっている。それは教科書の無償化である。そして高校では授業料が無償化され、これからもお世話になり続けるだろう。

ところで、この文中で一番伝えたいことをとある形で表していることに気づいただろうか。この作文の段落の頭文字を一文字ずつ読むと、「ありがとう」とでてくる。この文中で隠された想いがあるように、税があるという当たり前の中で隠れている意味を知ることが大切だと思う。そして「ありがとう」と思えるとそれは“感謝税”といえるのではないだろうか。お金やものには変えられないが、何よりも忘れてはならない感情であり、十分な価値がある。だから私は人一倍の感謝税を送ろうと思う。

産まれてから今もこれからもずっと税と関わり支えられていく私にできることは何かと考える。それは「忘れないこと」だと思う。消費税が高くなるにつれて、中には不満をもつ人もいるだろう。だけど、その税が幸せな未来への一歩だとしたら？そう思うとわくわくしてたまらない。誰もが税を支払い、誰もが税に助けられているということを決して忘れてはならない。幸せな未来の国造りのために私は今日も感謝税を支払う。

令和二年七月豪雨を見て感じたこと

糸島市立前原西中学校 2年 小嶋 亜衣子

毎年、様々の地域で災害が起きているが、今年も熊本県を中心に「令和二年七月豪雨」が起きた。大雨の影響で川が増水し、車が流され、家が浸水し、橋が流されるなどの悲惨な現場のニュースが、テレビで何度も放映された。私は毎回、胸をドキドキさせながら、映像を見入っていたが、避難場所に避難している方々の数が少なく、逃げ遅れた方々が多くいるのではないかと心配していた。

次の日、雨が止むと被害の状況がはっきりとしてきた。川に流された車が横転していたり、家の中にまで泥が押し寄せた映像やヘリコプターで救助される人々などがニュースで放映されていた。車が流された被災者は、とっても不便だろうなあ。泥を掃除するのは、大変だろうなあなんて、最初は漠然と見ていたが、そのうち「ヘリコプターをもっと増やせば、もっと早く救助に行けるのに。」とか、「あの赤い橋は早く修理しなければ、住民の人々は困るのに。」などとニュースを見ながら、テレビに向かって文句を言っていた。

ここで文句を言いながら、ふと考えた。この災害の復旧にどれだけの費用がかかるのか。きっと想像もつかない金額だろう。では誰が負担するのか。税金だから、国民が平等に負担するのだろうか。そうに違いないと一旦は納得できたが、別の疑問が沸いてきた。

国は、こんな大変な状況にある被災者に対しても平等に税負担を求めるのか、ということである。

国税庁のホームページで調べてみると、なんとトップページに「豪雨に関するお知らせ」として案内があり、申告手続きが出来ない人や税金を納めることが難しい人にはそれぞれ期限の延長手続き方法がアップされていた。更に、住宅などに損害を受けた場合には、確定申告で所得税などの軽減や還付を受けられることも説明されていて、被害者に優しい制度があることを知ったと同じに安心した。

災害が起きると被害者の救助や救済に多くの税金が必要となるが、納税者である大人の人達はその事を理解しているだろうか。税金を納める事に関して、不平・不満を持っている人がいるとしたら、税金の制度の中には、被災者に優しい制度がある事を知っているだろうか。

私は今、買い物をした時の消費税しか納める事ができていないが、将来は、もっと税に対する理解を深め、正しく税金を納められる大人になりたい。また、税のありがたさや税の大切さを伝えられる納税者になりたい。

離島に思いを馳せて

長崎県立諫早高等学校附属中学校 3年 中島 夕佳

「体感、長崎の島。」

これは、ある長崎県の離島PR動画のタイトルです。長崎県出身の歌手、福山雅治さんが、CGで長崎の島々に「なり」島を体感する、というユニークなものでした。

私は昔、壱岐に住んでいました。壱岐は、長崎県の北西にある人口二万六千人程の小さな島です。とても自然が豊かな所で、私の小さい頃の思い出が沢山つまっています。また、島の方々はとても温かく、幼い私にとってもよくして下さいました。そんな壱岐が、福山さんとコラボできるとは思ってもおらず、授業でその動画を見たときはすごく驚きました。

嬉しいことに、これだけでなく、最近によく壱岐などの離島の話題を耳にします。

調べてみると、離島を活性化させる取り組みには、国や県からの支援が受けられるそうです。特に壱岐などは、「特定有人国境離島地域」にあたるので、多くの補助が受けられます。またこの補助は、島内の農林水産業の活発化や、島民の生活環境改善にも使われているそうです。

私達が納めている税金は、日本にとって重要な役割を果たす離島の、活性化にも役立っているのです。

ところで税金には、公的サービスの「財源調達」、支払い能力に合わせて公平に税金を負担する「所得再分割」、税率を変えることによる「経済安定化」などの役割があるといえます。

私は、税金には「投資」のような性格もあると思います。

私がアイスを買うとき払った十円は、もしかしたら、壱岐の若者が起業する資金になっているのかもしれない。五島の農家さんの笑顔に、貢献しているのかもしれない。

はたまた、誰かがアイスを買うとき払った十円のおかげで、今、私が勉強できているのかもしれない。私の町がきれいに保たれているのかもしれない。

そう考えると、私達は「投資」する側でもあり、される側でもあるのですから、納税とは「恩返し」と言うこともできるのではないのでしょうか。

昨年消費税が10%に引きあげられたときは、正直、「嫌だなあ」と思いました。でも、税の勉強をした今は違います。

これからは、思い出の地壱岐に思いを馳せ更なる発展を願いつつ、今まで私を支えてくれていた、会ったことがない人々にも恩返しする気持ちで、誇りを持って納税していきたいと思います。

私は、生まれつき耳が不自由で、補聴器を装用している。この補聴器のおかげで全部とまではいかないが、大体みんなの会話は聞こえる。補聴器を買い換える時に、

「この補聴器は高校生まで使うから、ちゃんと選んでね」

そう母は言った。補聴器を買うときには、国や県、町からの補助金が出る。このお金は、税金から支払われていることを、母が教えてくれた。みんなが税金を納めてくれているおかげで、私は補聴器を買ってもらうことができたのだ。補聴器は温かい気持ちの表れだったのだ。それを知った今は、もっと大事に使おうと思った。もし、税金がなかったら、国や県、町からの補助金はなかっただろう。そうすると、高額な補聴器を買うことができず、私は不自由な生活を送っていたかもしれない。

税金は、私の補聴器だけでなく他にどのようなものに使われているのか調べてみることにした。私たちが通っている学校や公共施設、病院代にも税金が使われていることが分かった。税金がなければ、学校の改修工事や新しい診療所の建設もできず、病院代などの補助もなく、私たちの生活は不安定になるかもしれない。しかし、税金がこのような使いみちをされるおかげで、今私たちの暮らしは安定し、さまざまなサービスを受けることができている。小学生の時は、「税金って、何のために使われているんだろう」と思っていた。しかし、税金が私たちの生活に密接に関わっていることを知り、今まで買い物をしたときに支払う消費税を、払わなくてもいいのではないかと思っていた気持ちが、支払うことで私も社会に少しでも役に立ちたい、と考えが変わった。買い物をしたときに支払う消費税は私では少額かもしれないが、みんなが支払う消費税が集まれば、もっと多くの金額になるだろう。そうすれば、社会のため、人のために使われる、生きたお金になる。だから、税金の使いみちは、国民が納得できるように、優先順位を決めて使ってほしいと思う。今なら、熊本県を中心に襲った七月豪雨。その被災した地域の復旧工事や被災地への救援物資の調達、仮設住宅の設置などに使ってくれたらいいと思う。

これから高齢化が進み、医療費などが増加し、もっとたくさんの税金がいろいろな分野で必要になってくるだろう。必要なところに税金が使われるように、これからはちゃんと税の使いみちを見守っていききたい。私が補聴器をみんなの税金から補助を受け、購入することができたように、今度はだれかのためになれるように、しっかり納税をしていききたいと思う。私の大事な耳。その補聴器に補助を受けられたことに感謝し、大切に使っていききたい。税金は安心してみんなが暮らすために重要なものだと改めて感じる事ができた。

令和二年七月。九州地方で豪雨災害が発生。私の住む熊本県でも大きな被害があった。幸い、私の住む地域では被害はほとんどなかったが、他地域では、浸水や土砂崩れなどが起こり、甚大な被害を受けた。

このことを受けて、私の中学校では募金活動を開始した。生徒が主体となり、総額十五万円の募金を集めることができ、このお金は無事、被害を受けた中学校へ届けられた。しかし、自分の中で何か引っかかるものがあった。

十五万円、という金額は、私たちにとっては悪い結果ではなかったと思う。しかし、受け取る側からすれば、この金額は大きくない。思いは十分に伝わるが、支援としては小さな支援だ、という悔しい気持ちがあった。

豪雨災害発生から約一ヶ月後。政府が約一〇〇〇億円の支援策を打ち出した。この時、税金がどれほど凄いものなのか気付いた。

私たちがいくら頑張っても十五万円しか集められなかったのに対し、一〇〇〇億円の支援金はすぐに用意された。そんなの当たり前、と思うかもしれないが、「税金」という制度がなかったらこのような多額のお金はすぐに用意ができないであろう。

このように、税金があることで緊急事態の時も、すぐに支援の手を差しだせる。ただしこれができるのは私たちが税金を払っているからだ。

では、なぜ私たちは税金を払うのだろうか。法律で納税の義務があるからなのか、払わないと何か面倒臭いことになるからなのか。確かに、その考え方も分かるが、こう考えてみたらどうだろうか。「人を助けるためだ」と。今回の豪雨災害への政府の支援金もそうだ。私たちが払った税金が大きな支援となっているのだ。自分一人では、何かしたくてもできることはほとんどないが、「税金を納める」ことで人々を助けている、という考え方も持ってほしいと思う。

これからの社会を担っていくのは我々だ。これから少子高齢化が進んでいき、生産年齢人口が減少し、老年人口が増加していくであろう。二〇二〇年現在、高齢者一人を支えているのが二・一人に対し、五年後には一・八人になるだろうと考えられている。それに伴って、税金への考え方も変化していくであろう。将来を背負う我々が、しっかり税と向き合っていくことが大切で、より良い社会づくりにつながってくるのではと思う。

父が忙しそうにパソコンに向かっている。何をしているのか聞くと、持続化給付金の申請手続きの最中だという。ニュースで耳にした言葉だが、詳しくは知らなかったなので、調べてみることにした。

持続化給付金とは、新型コロナウイルスの影響で売上げが大きく落ち込んだ事業者が対象の給付金のこと。私の家も自営業で、新型コロナウイルスの影響により打撃を受けたため、この給付金を受け取ることができた。

驚いたのは、このような給付金には税金が使われているということだ。税金のおかげで医療費の自己負担額が安くすむ、ゴミ収集を無料で行ってもらえる、警察を呼んでもお金がかからないなどは知っていたが、このような所でも、税金は国民のために使われていると知って嬉しくなった。やはり税金は無いといけないものなのだと思う。

去年、消費税率が八パーセントから十パーセントに上がった。その時の私は、深く考えずに、(値段が上がるのか〜。イヤだなあ。) としか思っていなかったが、税金は国民を苦しめるために搾り取られるようなものではない。国民の暮らしをより良くするために使われるものなのだ。そう思うと、たった二パーセント、ケチな事を言うべきではないと感じた。

だが、税金を払わない人も世の中にはたくさんいる。確かに、自分で稼いだお金なのだから、全て自分の好きなように使ってしまいたい気持ちも分かる。しかし、思い出してほしい。そのような人達もきっと、税金のおかげで受けられる公的サービスを日常的に利用していることだろう。そして、気づいてほしい。私達は常に、知らない誰かが払ってくれた税金のお世話になっているのだ。だから、私達は税金を払う。お世話になったお返しとして、感謝の気持ちを込めて、払うべきなのだと思う。

私も、あと数年もしたら大人になって、仕事をして、自分でお金を稼ぐようになる。そのとき、税金を当たり前払える大人になりたい。高齢化が進めば、二〇五〇年には高齢者と若者の比率が一对一・三になると言われている。そのときは私達が頑張って、高齢者を支えていかなければならない。社会のためにと考えれば、払う税金も大した出費ではないように思えてくる。私の夢は、人の役に立つことだ。きっと、納税という形でも、人の役に立てると信じている。

思いやりを持って

砂川市立砂川中学校 2年 山本 千尋

昨年の十月から、消費税が八パーセントから十パーセントに引き上げられた。あなたはこの消費税増税についてどう思っただろうか。賛成の人もいれば、前の方が良かったと、不満に思う人もいるかもしれない。実際に、社会の中心である政治家の人達でも賛否両論、意見が分かれているのだ。この増税をきっかけに、私は税が社会にどのような影響を与え、どのような良い効果をもたらしているのか知りたくなった。

私達があまり税について明確に知らないのは、税が目で見ることのできない、複雑なものだからだろう。しかし、税は日常生活のどこにでもある、人々にとってとても大切なものだ。私がいつも行っている学校は、税金で建てられ、教科書や椅子などのものや、学校で使う電気や水道などの料金は全て税金だ。街を歩けばパトロールをしている警察官がいて、その人たちの収入も、税金で賄っている。災害があった時の復興費用や高齢者の老後の暮らしをサポートしているのも税だ。このように考えると、いつも生活している日常のほとんどが税と関わっているといえる。今までは少し気が引けていた消費税増税も、自分が少しでも社会の役に立てているような実感が持てた。

しかし、税には沢山の問題もある。日本では今、少子高齢化が進んでおり、税金を納める若者が少なくなってきたという課題がある。自分にはほとんど関係ないと思っていたものだが、本当にそうだろうか。未来をつくっていく私達にとって、とても重要で、知っておかなければならない問題だ。あと十年もすれば、私は納税者になるということを感じると、一気に自分と税が引き付けられたような気がした。

では、今自分にできることと言えばどんなことだろう。税には所得税や、市民税、法人税などの様々な種類があるが、十代の頃から出来ることと言えばほとんどない。中学生のうちにはまず、根本的な部分から知っていく事で、将来、税を納める時でも積極的に納税することが出来ると感じた。今のうちから税について沢山の関心と興味を持っていきたい。それが私に今まさに出来る最大の社会貢献だと思うから。

このように、税とは子供などの若い世代から高齢者の暮らしのためなど幅広い世代に役立っている。そして納税は、教育、勤労に続く国民の三大義務でもあるとても大切なことだ。確かに税は、納めたとしてもその税がどこに使われているかはっきりは分からないかもしれない。しかし、たとえそれが自分の知らない遠くの誰かだったとしても、その一人が私の行動によって少しでも助けられている。そんな「思いやり」の心を沢山の人が常に持つことで、日本の未来がより良く、明るいものになっていくのだと思う。

税に支えられて

気仙沼市立気仙沼中学校3年 千葉 天晴

私が今こうして毎日を楽しく平和に過ごしているのはたくさんの人達の納税した税金のおかげなのです。

今から九年前の三月十一日東日本を襲った大震災の津波で私の家も家族で営んでいた店も流されてしまいました。そのため私達家族は避難所での生活を送ることになりました。一番上の姉がちょうど今の私と同じ年のことでした。たくさんの人であふれかえっている中でも姉は黙々と勉強していました。そんな姿をみた市の職員さんは姉や他の学生さんのため勉強スペースを作ってくれました。また中学校の先生も毎日のように避難所に足を運んでくれて姉に本や衣類など差し入れしてくれました。姉は今でもそのことに大変感謝し、その時のことが自分の夢を叶える力になったと私に話してくれました。私にとってもその時の姉の姿がずっと勉強に向き合うための力になりました。避難所を運営してくれた市の職員さん、先生方、そして学校も税金でまかなわれていると少し大きくなってから知り、その時税金の大切さそしてありがたさをとても感じました。また税金からの援助により姉や私達は学ぶことを止めないで毎日を送ることが出来ました。本当に感謝しています。

私にはもっと税金の大切さを知る機会がありました。それは一緒に暮らしていた祖母が震災から半年後百万人に一人という難病になり、そしてさらにその半年後残念なことに祖父までも五十万人に一人という難病になった時のことです。今思えば祖父も祖母も震災のショックが要因だったのかもしれませんが。震災後店の再建に頑張っていた両親は祖父母の看病をしながら仕事をしていました。私を保育園そして学童に預け、迎えに来た帰りに毎日私も一緒に病院に面会に行くという生活を何年もしていました。そんな大変な生活の中でも両親は、「じいちゃんもばあちゃんも税金のおかげでこうしてとてもよい治療を受けられるのだよ。」と私にいつも話してくれました。難病医療費助成制度により治療費や薬の費用を助成してくれるのだそうです。そのおかげで最先端の医療を受けることができ余命よりずいぶん長く生きていてくれて、私も祖父母との思い出をたくさん作ることが出来ました。

私たち家族は色んな困難にあっても、たくさんの人たちの大切な税金に支えられ前に進むことが出来ました。震災から間もなく十年になります。復興していく街並みや、新しくできた橋を見ながら毎日学校に通学しています。この日常が送れるのもたくさんの人たちの税金のおかげです。このことに感謝の気持ちを忘れずに、いつかは私が困っている人の支える力になれるように毎日を大切に過ごしたいと思います。人は税によって支え合って生きているから。

私たちが住む町の未来について考える

鳩山町立鳩山中学校 2年 山室 未来

シェアハウス「はとやまハウス」

これは、近年高齢化が進む鳩山ニュータウンで、空き家を学生向けシェアハウスへ改修し、運営を行うモデル事業である。高齢化が著しい鳩山ニュータウンで展開されている地方創生のためのプロジェクトで、若者とまちをつなぎ、地域の活性化につながる取り組みとして期待されており、今現在三名の学生がシェアハウスに住んでいる。入居者は、鳩山町の公共施設で月三十二時間働けば、賃料が無料になる。

広報はとやまに[はとやまハウス]の紹介記事が掲載されており、このユニークなプロジェクトに興味があった。調べてみると、十三年間住み続けてきた自分の町について、初めて知ることが多く、驚くべき事実がわかった。

鳩山ニュータウンは、東京郊外にベッドタウンとして作られた町だ。私の母が鳩山中学校に通っていた頃は八クラスあり一学年の生徒数は三百を超えていたという。それだけでも驚きだが、現在の鳩山町は少子高齢化が進み、五十%以上が高齢者になっていることがわかった。

税金を納めているのは働く世代であることは知っている。働く世代が減少するということは、それだけ町の税収入も減るということになる。鳩山町にとって、このまま人口の減少と少子高齢化が進めば、町の死活問題に発展する。しかし、広報はとやまに掲載されていた[はとやまハウス]の記事を読み、母も祖母たちも、口を揃えて「素晴らしい取り組みだ」と絶賛していた。鳩山町の未来に光を感じることができた。

[はとやまハウス]の運営にももちろん税金が使われている。税金の使い道は医療や福祉・教育・子育て世代への給付金など様々あるが、[はとやまハウス]のような未来あるプロジェクトに税金が使われることに、私は賛成したい。

空き家を町が買い取り、近隣にある大学の建築学科に通う学生を募集し、入居者自身に空き家のリノベーションに参加してもらおう。学生にとっては実践を通して学習できる素晴らしい経験になるはずだ。さらに、鳩山町に住むことによって、鳩山町の良さを肌で感じてもらうこともできる。高齢者にとっても、若者が公共事業や町の活動に参加することは嬉しいだろう。[はとやまハウス]を体験した学生が大人になって家族ができた時、鳩山町で生活したい、と思ってもらえれば、いつかこのプロジェクトが実を結び、加速する少子高齢化にストップをかけられるのではないかと期待している。町にたくさんの家族が集まり、学校や商店、夏祭りなどのイベントにもぎやかになっている未来を想像したい。

支え合うためのありがたいお金

蕪崎市立蕪崎西中学校 3年 藤岡 礼伊

「れいちゃん、お母さんね、十日間くらい入院することになったから、家のことを色々頼むね。」

私は耳を疑った。いつも元気な母が入院するなんて。

母は、手術をして入退院を繰り返した。そして仕事に行けなくなり、家で療養している。食事が済むといつも沢山の薬を飲んでる。

「薬だけでお腹いっぱいになっちゃうわ。」と、笑いながら薬を飲んでる母に向かって、父があることを尋ねた。

「一万円する薬ってどれ？」

私は、一万円という金額にとっても驚いたので父と一緒に覗き込んだ。母は、その薬を見せてくれた。それは、カプセルに入っていて、普通の薬と変わらなかった。

「この薬、一万円もするの？お母さんは、これを毎日飲んでるの？じゃあ、一ヶ月で三十万円？一年で三百六十五万円もかかっているってこと？そんなに払えるの？そんな大金家にあるの？」

母の体のことはもちろん心配しているが、それよりも家計のことの方がもっと心配になってしまった。

「今は、お父さんしか働いていないのに大丈夫なの？来年私たち高校に行くのだよ。行けるの？本当にお金はうちにあるの？」

矢継ぎ早に質問する私に、母は詳しく説明してくれた。

医療には、高額療養費制度という制度があり、かかった医療費を支払ったとしても、国が定めた自己負担限度額を超えた場合は、後でその差額分が戻ってくるという。母の場合は、先に限度額適用認定証の交付手続きを行ったので、医療費がいくらかかっても、自己負担限度額の上限金額までの支払いで済む。しかも四回目以降はさらに安くなるという。今までの手術費や入院費も上限金額までの支払いだったそうだ。

私は、子ども医療費助成制度は知っていたが、このような制度があり、そこにも税金が使われていることを初めて知った。

父も母も、お給料から所得税が引かれ、五月になると、固定資産税や自動車税の請求書が家に届く。私はいつも買い物をするたび消費税を払っている。今までは、「税金をとられている」という感じがしていた。しかし、母の医療費の件を通して、母の命は税金のおかげで守られ、うちの家計は税金のおかげで支えられ、本当にありがたいと思った。

お金を払える人は命が助かり、払えない人は、つらい思いをしたり命を落したりするのは、同じ命の上では不平等である。税金は、不平等さをなくし、安心感を与えてくれるありがたいお金だ。私が納税者になったときは、「取られる」のではなく、「支え合うためのありがたいお金」として、喜んで納めていきたいと思う。

当たり前の生活を維持するために

福井市足羽中学校3年 柳本 量子

現在、日本では少子高齢化が急速に進んでいます。この影響で働く人が減少し、政府は定年の廃止や延長などの対応を進めています。しかし、少子高齢化が与える影響はそれだけではありませんでした。

二〇一九年十月一日、この日から消費税が十パーセントにアップしました。「なんで消費税が高くなるの。そもそも、なぜ私たちは税を納めなければならないの。」税について何も知らなかった私の率直な疑問です。

気になって調べてみると、驚く情報ばかりでした。私たちが日常の中で利用している公共交通機関や非常時に呼ぶ救急車や警察。それらを当たり前のように、安く利用できたり無料で呼ぶことができたりしているのは、私たちが税を納めているからだそうです。他にも、学校の教科書や風邪をひいたときに病院でみてもらうお金、年をとって介護サービスが必要になった時のお金など、税金は私たち若者から高齢者まで、色々な人に使われています。こんなに身近なところで、私たちが納めた税金がたくさんの人の役に立ち、私たちの生活を豊かにしていると思うと、なんだか誇らしくなりました。もし私たちに税金を納める義務がなくなってしまうたら、みんなが平等に教育を受けたり、老後も安心して暮らしたりすることは難しくなるでしょう。税金は、私たちの当たり前の暮らしを当たり前に、そして、より便利にしているのだと思います。

しかし、そんな税金が今減りつつあります。その原因が始めにも取り上げた、少子高齢化です。若者が減少して国の収入が減る一方で、高齢者が増加して莫大な社会保障費が必要になってきます。所得税や法人税の増税では、現役世代に集中した負担がかかるため、高齢者含める国民全体で広く負担する消費税を増税せざるを得なくなります。消費税が十パーセントになったのも、少子高齢化が原因の一つであると考えられています。この情報を知った時、増税と少子高齢化が関係していたという衝撃よりも、これからの未来の不安や恐怖の方が大きかったです。このまま少子高齢化が進んでいけば、消費税が二十パーセント、三十パーセントと増税し続けるかもしれません。もし、増税し続ければ、食料品や日用品の値段も高くなって、生活が便利になっていくどころか、苦しくなっていくかもしれません。

今、私たちにできることは、増税し続ける消費税を何も考えずに払うのではなく、この当たり前の生活を維持できるように、一人一人が税についてよく学び、無駄にしない努力をすることです。互いを思いやり、国民みんなが心豊かに暮らすための税であってほしいです。

感謝

下田市立稲生沢中学校3年 榎本 琉晟

僕が税の作文について「この宿題って、僕に関係ある？」と母に質問したところ、母が買い物をした時、あなたは消費税を払っているから、少しだけど、誰かの支えになっているんだよって教えてくれました。母は、税について、せっかく学ぶ機会があるのなら、知っておいてほしいこと忘れないでほしいことがあると、僕に黄色紙を差し出しました。

その紙は、僕が静岡の病院に行った時、受付に出す小児慢性特定疾病の受給者証でした。僕は、五才の頃から頻回再発型ネフローゼ症候群という病気になり、十五才の今でも、その病気と戦っています。

母は、初めは、病気の知識もなく、ベッドで点滴や色々な機械に繋がられている僕を見て泣くことしか出来なかった。そして高額な治療費に心が折れそうになったと話してくれました。そんな時に、医療費助成制度をしり、小児慢性特定疾病に僕の病気も含まれていて受給を受けることが出来るようになりました。このことで医療費の負担も軽減され、母は、病気とも向き合え、不安しかない日常から、抜け出す一步になったと声を震わせ話してくれました。

母が僕に教えてくれたこと、名前も顔も面識もない人達の納税のおかげで、十分な治療が受けれていること、高い薬を投与できてること、多くの薬を服用できてること、僕の当たり前の日常は、色々な人の支えがあって、けっして当たり前と思っではいけないこと。

中学生になって、だいぶ病気も落ち着いて、入院することも減り、大好きな部活も、友達とも楽しく中学校生活を送れている。病棟という別世界の中でベットから窓をのぞいて、行きかう車をながめて、早く抜け出したいと願っていた。

その願いを叶えてくれた日本中の人に、僕は生かせてもらっていると感謝しています。僕が社会人になり、税金を納めるようになった時、今の気持ちも忘れずに、誰かを笑顔にできるように誰かの一步になれるように、一人一人がしっかり納税して支え合って日本の暮らしをより豊かに笑顔な国にしていかなければいけないし、僕は誰よりも納税の大切さを知ることができて、よかったです。

エコカーで行こか！

学校法人大阪女学院中学校 3年 野田 七海

私の父は、自動車関係の仕事をしています。そのせいもあり、自動車やバイクが大好きです。先日、父が自動車のパンフレットを見ていたので、私も覗き込んで一緒に見ました。

「新しい車カッコイイな！」

と私が言うと、父は、

「今の車もう九年乗っているし、故障も増えてきたからそろそろ新しい車が欲しいなあ。毎年の自動車税も安くなるし、今買えばエコカー減税に…」

と熱く語り始めました。私は、

「え、毎年の自動車税？なにそれ？」

と、父の話を遮るように質問しました。

「車を持っているだけで毎年税金がかかるんだよ。バイクもね！」

という父の答えに私はとても驚き、将来車を運転したいと思っている自分の為にも、車の税金について調べてみることにしました。

まず、父が言っていた毎年払う自動車税。それとは別に、二年に一回の車検の時には自動車重量税というものが必要だと分かりました。自動車税は地方税として、地域の教育や医療、警察や消防などの公共サービスや福祉などに使われ、自動車重量税は国税として、道路の保全の他、国の教育や医療にも使われていると知りました。私は最初、自分が買った物だし、買った時には車にかかる消費税も払っているはずなのに、どうして更に税金がかかるの？と疑問に思っていました。調べてみて納得しました。確かに街中の道路はどこも整備されていますし、信号機や道路標識なども分かりやすく見やすいように設置されています。こうやって、自動車に乗る人や歩行者の安全の為に税金が使われているのだと改めて実感することができました。

さて、父の話の続きです。二〇一九年十月以降、新しく登録した車は自動車税が減税され、また、自動車を取得した時にかかる自動車取得税が廃止され環境性能割になったこと他にもエコカー減税やクリーン化特例についても詳しく話をしてくれました。父は、

「とにかく、二〇二一年の三月三十一日までに新しい車に乗り換えた方がお得なんだよ。だけど今の車にもものすごく愛着があるからなあ。」と、並べたパンフレットを前に悩んでいました。私はそんな父に、

「ただ乗り換えるだけじゃお得じゃないでしょ？燃費や排ガス性能の良いエコカーじゃないとね！」

と、自分で調べた知識を得意気に言ってみると、父はとても嬉しそうでした。

今、世界で問題となっている地球温暖化の原因ともなるCO₂を排出する自動車において、環境に優しい車に乗ることで税金の優遇を受けられることは消費者にとっても、環境にとっても良い、素晴らしい政策であると、私は思います。また、自動車に関わる税などを使って道路環境を更に良くし、交通事故のない社会になって欲しいと願います。

税金があるからできること

愛媛県立宇和島南中等教育学校 3年 山本 和奏

私が住んでいる町、吉田町はみかんの生産量も優しくて温かい人も多く、町全体がオレンジ色に包まれているような自慢の故郷である。

私の祖母と父は兼業農家だ。土・日曜日は必ず山に行き、みかん作りを一生懸命頑張っている。収穫時期になると毎年、私は姉や妹、母と一緒によくお手伝いに行く。

二年前の冬、例年通りお手伝いに行った。その年は西日本豪雨があり、みかんの木がなくなっている所がいっぱいあった。

「今年は木がなくなっし、あんまりみかんとれんかったけん、残念やね。これからもみかん作り続けるん？」

と私は父に聞いてみた。すると、

「続けるに決まっとんやん。大変やけど今年、補助金もらって助かって、今年はダメやったけど来年頑張るんやで。」

とニコニコしながら父は言っていた。このとき、“補助金”のことについてあまり気にならなかった。

先日、市役所の方を講師に招いて租税教室を行った。税金があるから当たり前前の暮らしができることや納税の大切さを知り、とても勉強になった。そこで気になったことがあった。それは“補助金”のことについてだ。二年前の西日本豪雨の際、父は「補助金があって助かった」と言っていた。何の補助金だったんだろう？と思って調べると、“災害補助金”というものだった。それがあってみかん作りを続けることができたから感謝している。そして、このような所にも税金が使われているのを知りびっくりした。

物を買うと必ず消費税を払わなければならない。今までは、消費税なんて知らないのに、税金なんてなくなった方がいいのにと思っていた。しかし、税金のおかげで私たちの生活は助けられていることを知った。だから今はたくさん働いて税金を納めている父や母、消費税で僅かながらも税を払っている自分を少し誇らしく思っている。

私は三年後、十八歳になり選挙権が与えられる。大切な税金の使い道を決める政治家を決めなければならない。そのときの私の一票は、一人ひとりの暮らしをよりよいものにしようと考えている人を選びたいと思う。

学校で勉強ができること。町にごみがないこと。図書館で本を借りること。いろいろ私たちの生活は税金によって成り立っている。私は将来、仕事をしていたり母親になっていたりするだろう。当たり前のことだが、納税をきちんとして社会に貢献する人になりたい。安心して不自由なく過ごせる日常に感謝して、大人になったとき社会を形成している一人の人間として税金を納めた

祖母が骨折をして病院に運ばれた。五時間の大手術の後、リハビリを含め約二ヶ月間の入院となった。祖父は、自転車で病院と自宅を一日に何往復もし、祖母のお世話をした。

「若か頃から、あれ(祖母)には苦勞ばかりだったけん、お返しはせんといかん。」
祖父は、定年退職後十八年間勤め続けてきた市のシルバー人材派遣をきっぱりと辞めた。

祖母の退院の時、私は嬉しさの反面、不安があった。それは、年金で暮らしている祖父が手術費や入院費を払えるのだろうかということだ。

「おいたちは年寄りやけん、一割でよかと。」
心配している私に祖父は言った。

そこで、私は医療費負担について調べてみた。医療費は、七十五歳以上になると一割負担ですみ、七十歳以上と六歳以下では二割負担、それ以外の年齢では三割負担になっている。それに加え、私たちが住んでいる佐賀市では、小学生までは一受診当たり五百円ですむ制度がある。病気や怪我が多くなる年代や収入が少なくなる年代、子育て等で出費が増える年代に配慮がされている負担割合であると思った。また、働き盛りの年代であっても七割は国がまかなってくれるので安心だ。

さらに、確定申告をすれば、高額医療控除が受けられ、既に支払った税金の中から一定の割合で戻ってくるということも知った。

「最近では領収証ばとっておかんでも、年末に病院から一括で支払った分ば送ってくるし、簡単に確定申告もできるようになったとよ。」
と祖父は続けた。

このようにして、私の心配はなくなっていった。もちろん、年金で生活している祖父らが、怪我や病気をしても安心して暮らしていけるのは、税金のおかげだ。しかし、祖父らは税金の恩恵を受けているばかりではないことも分かった。

祖父は、海技学校を卒業後、定年退職をするまでの四十三年間を船員として働いた。何ヶ月も掛けて東南アジアやヨーロッパ、南北アメリカに行っていたそう。私が幼い頃は、貨物船が運河を渡る話を聞いたり、祖父宅に飾ってあるインド象の木彫りにまたがらせてもらったりしてワクワクしたものだ。その間祖父は家族を養うだけでなく、社会の担い手としての役割をしっかりと果たしてきた。また、祖母はそんな祖父を支えてきた。

祖父は今年で七十九歳、随分と力も弱くなったし体自体も小さくなった印象を受ける。現在の社会の担い手となっているのは父たちの代であるし、もう少ししたら私もそこに加わる。このようにして社会は成り立っているのだ。社会の担い手としての自覚をもち責任を果たすこと、税や福祉制度について正しい知識をもつこと、そして本当に困った時には互いに共助の精神をもち、その恩恵を受けてもいいこと等、社会人の大先輩である祖父の姿や言葉から学んだ。

生きるチャンスをありがとう

鹿屋市立高隅中学校3年 宮下 倭摩

十四年前、僕は生まれた。七ヶ月と半月、六八八グラムの超未熟児だったため、鹿児島市立病院の新生児集中治療室で育った。約七ヶ月間入院し、やっと退院できたのもつかの間、心臓が止まりそうになり、二ヶ月くらい別の病院に入院して、在宅酸素療法という治療を始めた。他にも色々と疾患があって、また成長も遅かったので、僕の乳児期は、治療や療育に通う日々だったそうだ。

少し大きくなると身長がかなり小さいことから、成長ホルモンの治療を始めた。毎日打つ注射と酸素のボンベ、色々な薬に、心電計や酸素濃度計、そして吸入吸引器。僕の家はまるで病院のようだったらしい。

そんな日々を過ごし、ひとつひとつを乗り越えて、今僕は元気に暮らしている。楽しく学校に通い、友達と将来の話もする。まだ低い身長が伸びる可能性は、もうないみたいだから、少しだけ悲しいけれど。今日もここにしっかりと生きている。しかし、僕がここまで育つのに、多額のお金がかかったと母から聞いた。それは、僕が一生かかっても返せない、驚くほどの額だ。そのお金を、全額払わなければ治療が出来ないとしたら、ここまで育てることはできなかったと思う、と母は言う。僕はここに生きていなかったかもしれないのだ。そんな親に代わって、僕の治療費を負担してくれたもの、それは税金だ。だから時々僕たちきょうだいのことを語る講演をしてきた母は、治療費がみんなの税金から支払われたことを伝え、講演の最後に必ずこう話す。

「子供に生きるチャンスを、私に我が子を抱ける幸せをいただき、心から感謝しています。ありがとうございました。」

と。沢山の人の「頑張れ」が入っている僕の命。感謝の気持ちを持って、大切に生きたい。そして僕が将来支払う税金は、命への恩返しだ。僕も誰かの命を助け、誰かの家族を幸せにすることができる。ひとりひとりが、見えない応援でつながっているこの国に僕は生まれて幸せだ。

「はあ、今日塾だよ、嫌だあ。」

一人の友達が言うと何人かが口を揃えて言います。実際、私も一年生の頃は、塾というのは勉強をする場所なので楽しいと感じることは少なかったです。みなさんも、一度はそう感じた経験があると思います。ですが、今の私は塾に楽しく通っていますし、とても感謝しています。塾に感謝している人はたくさんいると思いますが、私の感謝の気持ちには特別なものがあります。

私が通う宜野座村営の塾は宜野座村の中学一年生から高校三年生までが通う一五〇人規模の塾です。他の塾と変わらず定期考査対策や受験対策もします。しかし、他の塾と大きく異なる点があります。それは、無料で通うことができます。村民の方々の税金で私は週三日授業を受けることができます。また、授業が無い日でも仕事の合間を縫って教えてくれます。

宜野座村は、人口わずか六千人程の小さい村ですが私達が塾に通えるよう村民の方々は大切なお金を納めてくれます。それだけでなく、研修旅行や海外への語学留学、検定の料金免除などたくさんあります。でも、私は他の地域について知らなかったのが特別恵まれているとは思いませんでした。ですが、他の地域の人に話すととても驚かれ、「良いな。」と羨ましがられます。その時、私はとても恵まれていることに気づかされました。そして、それは税金のおかげ、何より納めてくれる村民の方々のおかげだと思いました。もし、税金が無かったら私は今の塾に通うことができないし、検定にも積極的に受けることはできなかったと思います。他にも、おじいちゃん、おばあちゃんが年金を貰えなくなったり、医療費が自己負担となってしまったりなどたくさん問題が起こり生活しづらくなってしまいます。

以前の私は税金に対して自分の給料からや物を買ったときにも取られてしまうので良い思いは持てませんでした。ですが、自分が住んでいる地域で何気なく使っているものが何気なく通っている施設が税金のおかげで使うことができると考えれば国という大きな組織へのお金も悪い気持ちを持つことはなくなりました。そして、将来自分が払う年齢になったときには私が今、支えてもらっている地域の方々に私がもらった幸せ以上の恩返しができるよう、その一つとしてきちんと税金を納めていきたいです。

「人が人を思いやり、人が人を支え合う」

その一つに納税があると私は思います。

「もったいない」から家を。

千歳市立富丘中学校3年 山内 歌乃

『この避難所は区民対象です。と言われ、地球最大規模という台風の中追い出された男性が、ビニール傘を頼りに一晩中外で過ごした。』という出来事を知っていますか。

二〇一九年十月十二日、台風十九号が東日本を中心に甚大な被害をもたらしました。その際、多くの人が自然の怖さを体感し、多くの人が避難所に避難したはずですが、避難した人は、命を守るために、自分の家より安全で頑丈な所に行きたい、避難したいと考え、そう考えたほとんどの人が「避難所」に避難していたと私は思います。そして私は、あの出来事のように避難所に「～対象」と制限をかける理由は何なのか、制限をかけた時とかけない時の差は何なのか、と疑問に思いました。

そもそもなぜ男性が追い出されたのか。その理由はただ一つ。住所がないから。その男性はホームレスで住所がなく、区民対象の避難所には受け入れてもらえなかったのです。ホームレスの男性を追い出した人に対して様々な賛否両論がありました。例えば「ホームレスは税金を払っていないから追い出されて当然だ。」や、「ホームレスの人でも避難する権利はある。」など。私はこれらの意見を聞いてどちらも正しい事を言っていると思いましたが、それと同時にみんなこの男性には住所がないという事に対して何も思わないのだろうか、と思いました。そもそも住所がないのだから避難所には避難できないのです。そこで私は「ホームレス支援ハウス」を税金で建てたらどうかと考えました。ホームレスの人は住所がないのが原因で職がないというのが大多数であると聞いた事があるので、ホームレスの人のための家を建てることで仮の住所を与え、社会復帰をさせ、ある程度稼げるようになったら家賃を払ってもらったり、労働者不足の職場で働くなど、社会にも貢献できます。またホームレスになる人の中には親の介護費をまかなえなくなり借金をした結果、住む家をなくしたという人がいると聞いたので、公立学校の児童・生徒一人当たりの負担額を減らし、その分を介護費にまわすということは出来ないでしょうか。税金は普段、私たちが使っている学校の椅子や机などにも使われているそうですが、何十年前から比べると必要な数はだいぶ減っていると思います。実際あまり使われていない椅子をよく見ます。

日本人は「もったいない」という言葉を使います。きっと多くの学校には使われていない椅子、体育用具などたくさんあります。それらを放置するのはもったいないと思います。私たち日本人は「もったいない」という言葉を知っている以上、新しく買うのではなく、地域どうし協力し、少しでも使われる税金を減らすことで、誰もが安全に暮らせる家を作れたらいい社会になると私は思います。

命を繋ぐ税金

鶴岡市立鶴岡第五中学校 3年 鈴木 朝

「税金は大切」「税金は私達の生活・命を繋ぐ」私がそう思ったのは、税について勉強してて、作文書がなくちゃいけないんだよね。と母に話したところ、とても身近に、税金のおかげで助かる命の話をしてくれました。今までは、「消費税がなかったから、お小遣いでこれ買えるのに！」なんて思ってたのに、その話を聞いた私は、感謝しかない！そう思えたのです。

平成二十三年十月二十八日、私の妹は山形県立中央病院で生まれました。体重六百二十四グラム、身長三十センチの超低体重児としてこの世に生を受けました。生まれるはずの予定日は、二月十一日だったので、四か月近くも早く産まれてきたのでした。私が、保育園の年長で小学校に入る前の準備で、一日小学校体験をしていた日でした。「朝、お母さんが山形の病院に運ばれたって。」私はびっくりして、泣きそうになりながら、いつもは長く感じる山形までの道のりも、あっという間だったのを覚えています。母が救急車で運ばれてから五日後、小さな体でこの世に誕生したのでした。誰にも抱っこされることもないまま、病院のNICUという救急救命センターの特別な保育器の中で過ごし、妹の生まれた体重での生存率は、六十パーセントから七十パーセントと言われているようで、様々な治療・手術をしなければならなくなりました。全てが発達しないまま誕生したため、まず未熟児動脈管開存症を治すために、心臓の手術をしました。それから、未熟児網膜症の治療でレーザー手術をしました。手術は成功しました。これから成長するにつれて、何も発症しなければ大丈夫と告げられたそうです。そこで、手術と特別な保育器での生活、両親は行う前に全ての説明を聞いたことを話してくれました。「来は一千万以上の手術と治療を受けたんだけど、三千元しか払わなくてよかったんだよ。それは、特別小さく産まれた子供には、県・国からの負担で、まさに税金で補助してもらえたんだよ。もしも、税金がなかったら…来は、助からなかったかもしれないね。一千万以上なんて、すぐに準備できるお金でもないし、そのお金が準備できなかったら、妹の来の命は、数日しかなかったかもしれないね。」私は、その話を聞いて、何だか涙が出そうになりました。目の前にいる、元気で時にはケンカして腹が立つ六歳離れた妹が、あの日、手術ができなかったらと思うと心が締め付けられそうになりました。

消費税が十パーセントになって、もちろん日本国民は反対の人も多いと思います。でも、税金は、東日本大震災やコロナウィルスによる一人十万円の補助金等様々なことに税金が使われています。現に私の妹もみんなに助けられたのだから。だから、私は大人になって税金を払う立場になったら、妹のように助かる命を繋ぐため。困っている人達のために使ってもらおうんだ！と思える大人になりたいです。

住みよい町づくりを支える税

茨城県立並木中等教育学校 1年 角田 妃奈子

突然ですが、私は自分の住んでいる町が大好きです。幾つもある、友人と遊び回れる公園は常に草が刈られており、道路沿いにはきれいに整えられたツツジが植えられています。また、近年子供が急増した影響で、自宅から徒歩五分のところに新しく小学校が建てられました。私が小学校一年生の時は、近くに学校がなかったため、バスで二十分かけて登校していました。だから、新しい学校ができたときにはとても嬉しかったです。

これら全てが税金で行われていると知ったのは、小学校六年生のときに参加した租税教室ででした。説明を聞きながら、友人と顔を見合わせ思わず「えっ、そうなの!？」と言い、驚いたことをよく覚えています。

去年の十月には、消費税が10%に引き上げられました。増税をめぐっては、新聞やニュースなどで、賛成・反対どちらの意見も多く目にしました。当時私は、税金についてあまりにも無知だったため、増税に賛成する人たちの気持ちがよく分かりませんでした。ある晩ニュースを見ながら、「増税なんてしなければいいのにね。」と両親に話したところ、「でも、税金が増えないと災害が起きたときにも困っちゃうからね。」と言われたのです。てっきり両親は消費税が上がることを嫌がっているのかと思っていたので、この意外な答えに驚きました。

私の祖父母が暮らす茨城県日立市は、二〇一一年の東日本大震災で、大きな被害を受けました。道路はひび割れ、建物は傾き、町は元気をなくしてしまいました。震災から九年たった今、道路や建物はきれいになり、震災が起こる前の平和な町に戻ってきたように思います。こうした災害復旧や復興にも税金が使われているという話を聞き、両親の回答にも納得しました。また、現在コロナウイルスの影響で暗くなってしまった世の中ですが、税金を使って明るくしようとしているのを、私自身も生活する中で感じています。

「税金」「増税」、このような言葉だけを聞くととても難しいイメージで、子供の私にはまだ関係のないものだと思っていましたが、私の生活も、税金にたくさん支えられているのだと知りました。税金は私たちの今の暮らしを支えてくれるだけでなく、将来の暮らしまで支える、とても大切なものです。令和二年度一般会計予算における歳入のうち、租税及び印紙収入でまかなわれる額は約六十三兆五千億円で、歳入全体の六割強を占めているそうです。この数字だけ見ても、いかに税金が大事かということがよく分かります。だからこそ、税金は大切に使ってもらいたいし、私たちも税金の使用用途についてきちんと理解していく必要があるのだと思います。税金を嫌なものだと思わずに、どうしたらより良い使い方ができるかをみんなで考えることによって、みんなが自分たちの町を大好きでいられるのではないのでしょうか。

幸せな十年とこれから

習志野市立第六中学校 3年 森田 依露

最近、私はこんなことを知った。

私の祖父がつい先日亡くなった。急にひどい頭痛が襲い、大学病院で診てもらおうと、もう救命はできないと言われ、祖父はそれを受け入れた。その時、祖父は病院の先生達に、十年間、命をいただき感謝しますとお礼を言ったそうだ。

祖父の病気が分かったのは十年前である。リンパがんという病気だった。治すのが難しく、抗がん剤を使ったあと、五百万円もするドイツの薬を使ってみませんかと提案された。

祖父はあまりの高額に驚き、それを受けるかすぐには返事ができなかった。そこで、家に帰って考えることにした。

その翌日、病院と市役所から連絡があり、病院からは医療保険が使えること、市役所からは高額療養費という制度が使えるということだった。高額療養費とは、医療費の自己負担が高額になった場合、一定の金額を超えた分が、市の税金から払い戻される制度だそうだ。

最終的に、祖父が払う分は、最初よりはるかに安い八万円で済んだということだった。

祖父の治療は成功し、七年が過ぎた。その間、一緒に登山を楽しみ、遠くへ何度も旅行し、お祭りに加わり、楽しい日々を過ごした。

ところが、またがんが再発した。

今度は病院で新薬を勧められた。その薬は一錠が一万円も必要であった。一日三錠で三万円となり、一年で一千万円を超えるということだった。

祖父は、これ以上、国や市のお世話になることは望まなかったが、病院や周りの人からアドバイスを受け、服用することにした。三年間服用を続けたが、私はその間も夏休みやお正月に尋ね、宿題を見てもらったり、一緒に図書館で調べ物をしたりした。

祖父の病気について、多くの費用を税金で払っていただき、十年の命をもらったことを知り、非常にありがたいと思った。

多くの人に払っていただいた税金によって祖父と過ごした十年は、とても楽しく、私にとってかけがえのない時間だった。

この経験を通して、感謝するだけではいけないと思い、税金について考えてみた。

税金はたくさんの方が一生懸命働いて得たお金が納められている。限りなくあるものではない。だから、本当に必要なことに、必要な人に使わなくてはならない。

今、私がすべきことは、身の回りに目を向け、無駄な税金を使わないことだと思う。不必要なごみを出さない、公共施設の物を大切に扱うなど節税できることは身近にある。その節税した分の税金で水害や土砂災害、病気の人を少しでも救えるようにしなければいけないと強く思う。

祖父と過ごした幸せな時間を、今度は私が恩返しするために、この経験を多くの人に伝え、節税に取り組もうと思う。

税金にこめる感謝と希望

小松市立芦城中学校 3年 鈴木 奏式

「グンオン。」九十七歳になった僕の曾祖母は、時々この言葉を口にしながら母と会話をする。意味は分からずに聞き流していたが、気になったので母に尋ねた。「グンオン」とは「軍人恩給」のことで、日本の戦時中に軍隊に勤務した人が、今でも国からもらうことができるお金のことだそう。実際に戦争に行っていたのは僕の曾祖父だが、曾祖父が亡くなってからは、配偶者である曾祖母がそれを三ヶ月に一度受け取っている。曾祖母は高齢なので、高齢者福祉施設に入居している。それなりに入居費用は高いそうだが、曾祖母自身の年金と、国から支給されている曾祖父の軍人恩給のおかげで費用はまかなえるそうである。

日本の税金の三割以上は社会保障にあてられている。その中にこの恩給も入っているわけだが、現在は旧軍人と遺族、あわせて約二十三万人がこの軍人恩給を受け取っている。恩給の支給額は軍に従事した年数によって異なるが、今年度は千六百四十億円の予算が組まれていて、平均年齢約九十四歳の人たちに支給されているそうである。

社会や総合の学習で戦争について学習した。長い戦争は人々から平和と命を奪った許すことのできない出来事である。戦争が終わって七十五年がたった。戦争は僕たちにとって、もはや歴史の一部でしかない。しかし、多額の負債を抱えながらも、国は戦争で戦った人たちに保償を続けている。これは、残り少なくなった戦争体験者から、その歴史を後世に伝えてほしいという願いも込められているのではないだろうか。遠い昔、国のために命を捧げた人がたくさんいた。今ある社会保障の一部は、その人たちやその家族への感謝と、未来の平和を約束する思いが込められていると信じたい。

「グンオン。」これは曾祖母にとって自分の命をつなぐ大切なものであると同時に、戦争の歴史を振り返り、曾祖父に感謝し、今の平和に感謝し、穏やかに余生を送れることに安心する大切なものであるに違いない。

僕は今、毎日平和に暮らしている。税金のおかげで学校に通い、学習ができている。それは、将来納税者になるという約束のもとに成り立っていると思っていた。しかし今回、軍人恩給について知り、同じような平和な暮らしは、これまで国を支えていた世代にもしっかりと税金で保障されていると学んだ。今ある快適な暮らしは、今の納税者だけではなく、昔から積み上げられてきたものだ。これまで国を支えてきた世代へ感謝の気持ちをこめた税金、そして、未来を創る子どもたちのための税金。僕も大人になったらしっかりと税を納め、過去と未来を感謝と希望でつなぐ税のリレーに参加したいと思う。

私達の生活と税金のつながり

名古屋市立御田中学校 3年 蒲田 璃子

私は約十年程前に両親が離婚をし、母と姉と三人で名古屋に引っ越して来ました。

私の母は児童扶養手当を受けています。児童扶養手当とは、母子父子家庭の人で十八歳以下の子供を監護している人に給付され、それらは税金で賄われています。この手当のおかげで、他の一般家庭の子達と同じように学校へ行き、幸せで楽しい生活が出来ている事を知りました。私の姉も授業料軽減補助金をもらい、私立の高校に通っています。私立の高校はお金がないと行けない。と知っている人も多いと思いますが、ここ愛知県は保護者の所得によって補助金が出され、親の収入で行きたい学校に行けないなどの事がない様、平等に私立の学校を選ぶ事が出来ます。

これも私達子どもが税金で守られ、平等に権利を与えてもらっているのです。

その他にも、私自身も登録している「子どもの縁の下サポート。」という、ひとり親家庭や生活保護世帯等の中学生を対象に、名古屋市が事業者に委託し実施している学習支援事業があります。学習会場は各区の児童館や地域のコミュニティセンター、消防署等、市内の公共施設を借りて、私達に学習の場所を提供してもらっています。そこにはサポーターさんがいて、学習だけでなく悩み事なども聞いてくれて、私達の側にいつも寄り添ってくれています。私達の居場所を与えてもらっている事も母から教えてもらいました。

母子家庭は世間の目が冷たくなる事も、一人で子供を育てる事など辛い思いや大きな不安をもつ人は少なくないと思いますが、このような制度のおかげで、少しでも安心して子育てが出来ているのだと私は思います。

税金がこんなにも身近で私達を支えてくれている事。税金がこんなにも私達国民の役に立ってくれている事。私が今まで特に不自由なく幸せに暮らせていたのは、税金のこのような使い方があったからだと思いました。

国民の役に立ち国民の生活を支えている税金は無くしてはならないものだと感じました。景気が悪いと言われる今のこの世の中だからこそ一人一人が協力し、より良い世の中になってほしいと思いました。

今回この作文で初めて税について考え学ぶ機会があり、私は困っている人を助けたり、これから私達が大人になりお父さんやお母さんになった時に、自分の子供や次の世代を担う子供達のために、より良い教育や生活を与えてあげられるように、これからの日本がもっと安心して生きられる国になるのであれば、いつかの自分の貯金だと思い、しっかり税金を収められる大人になりたいと思います。

昔の人々が力を合わせ守ってきた日本という国を私達ももっと良くして次の世代に渡せるように、みんなが幸せに生活する事が出来るように。そんな世の中を作っていくための資金。それが税金だと思えるようになりました。

負担の先送り

加古川市立山手中学校3年 秋田 美乃里

「このままだと、日本はどうなってしまうのだろうか。」税について調べたとき、最初にそう思った。同時に、「自分の暮らしに関わる税のことを全然知らなかった。」とも思った。

今の日本の社会保障水準は、外国に比べて良い方である。しかし、それを継続すると、国民の負担が大きくなってしまう。それは、現在の日本は、少子高齢化社会になっているからだ。社会保障のためにかかるお金は増えていく一方、働き手が減っている。では、なぜ税金を高くしなくてもよいのだろうか。それは国債を発行しているからだ。国債とは、国の借金のようなものである。そして、年々国債金の割合は大きくなっていく。つまり、借金の返済を先送りにしているのだ。今の日本は、国の規模のギャンブルに手を出し、抜け出せなくなってしまったようなものだろう。減っていく働き手、増えていく収支と借金、この差は広がっていくだけになってしまうのだろうか。では逆に、国債を発行しなかった場合、日本はどうなっていたらだろうか。おそらく、国民の負担は、大きくなるだろう。そして、国民の不満が高まり、政府に反対する声が多くなっているのではないか。その状況は、国として、良くないことであり、信頼をつくりあげることにはできないだろう。他に良い方法はないのだろうか。

この現状を改善していくには、一時的ではなく、未来の見通しが良い政策をとらなければならないと思う。まず、少子高齢化社会にならないようにする必要がある。例えば、子育てのしやすい環境を、会社等で整えることだ。育休を、男女とわずとりやすくすると良いと思う。次に、社会保障制度の見直しをする必要がある。例えば、医療や介護での、国民の負担を大きくするが、許可をとれば、今まで通りで良いようにすることだ。最後に、高齢者の方の仕事を少しつくる必要がある。例えば、交通整備等の仕事を、高齢者の方がやりやすいものは、高齢者の方にしてもらおうことだ。認知症の予防にもなって一石二鳥ではないだろうか。これからの日本が、少しでも良い方に傾いていってほしいと思う。

税の問題は、思っていたより大きく、難しいものだった。しかし、知らないままではいられないほど、怖いことはないと思えた。だから、これから、もっと知っていこうと思う。未来の日本や自分のために、できることはあると思う。自分も一人の日本国民ならば、この問題を考え、改善していくべき一人でもある。一人ではできないが、一人でも多くの力が必要だと思う。

税のラリー

新庄村立新庄中学校1年 千葉 有里

僕は、小さい頃から卓球をしている。卓球の練習にラリーという練習がある。ラリーとは球をなるべく長く続ける練習の事だ。

税はラリーに似ていると思う。僕たちが打った税金というピンポン球を公共サービスという形で国や市町村が打ち返してくれているように思える。

例えば、僕たちが払っている十パーセントの消費税は社会保障という形で返ってきている。社会保障は国の歳出の三分の一を占める。社会保障は国民に、生活できる最低水準を確保させるための政策である。医療などもその中に入る。高齢化が進む日本では、社会保障は、なくてはならない政策だと思う。

僕たちが、学校で使っている机や教科書、校舎などにも税金が使われている。教科書の裏側には、「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう」と書かれている。改めて読んでみると、税金のありがたさが分かってくる。税金がなかったら、教科書は無料でもらえていない。教科書以外にも僕の身の回りには税金が使われているものがたくさんある。僕の通っている新庄中学校の総工費は六億七千七百万円である。これらは、大人たちが、期待というピンポン球を僕たちに打ってくれているのだと思う。その期待に応えられるように頑張りたい。大人になったら、今度は僕たちがピンポン球を打ってあげられるようにしたい。

その税金のラリーはいつから繋がってきているのか。始めはどのようなものだったのか。疑問がわいてきた。日本で始めて本格的な税の制度ができたのは、飛鳥時代の事だった。僕は今から一五〇〇年も前に税ができていたことに驚いた。しかし、今とは少し違う点がある。それは、お金ではなく収穫したものや特産物、労働を納めるという点である。現金で納めるようになったのは、一八七三年の地租改正の時である。政府が土地の値段を決め、その値段の三パーセントを土地の持ち主が現金で納めるというものである。所得税は、一八八七年から、法人税は、一八九九年から導入されている。僕たちにも身近な消費税は一九八九年に導入されている。消費税は税の歴史からすると、かなり最近から始まったことが分かった。税の歴史は古く税のラリーもずっと続いてきていることが分かった。

一五〇〇年前から続く「税のラリー」。この税のラリーがこれからの一五〇〇年も続いて行ってほしい。そのために僕は、納税の義務を果たしていきたい。

暮らしを支える税

新居浜市立中萩中学校1年 松原 七海

私の祖母は、四年前に認知症と診断された。月日が過ぎていく中で、祖母は物忘れがひどくなり、一人で生活をするのが難しい状態になってきた。私が知っている祖母は、庭の手入れやウォーキングをしている元気な姿だったので、認知症によって日常生活を自分で送ることが難しくなっていく祖母の姿を見るのがとても辛かった。

認知症に対して後ろ向きな気持ちだった私が、祖母のグループホームへの入所をきっかけに介護や税について考えるようになった。祖母がグループホームへ入所した後、私も両親と一緒に介護施設を訪れた。施設では、介護職員、社会福祉士、栄養士と多くの職員の方が、祖母が安全で健康的に生活を送れるようにと考えてくれていることを知った。何より、祖母が施設の方と笑顔で話している姿が、私の気持ちを明るくした。たくさんの人の力と、手助けを借り、介護サービスを利用することで、祖母の暮らしに笑顔が増えることは、家族の幸せでもあると思う。

介護の手助けとなる介護サービスの利用者負担は、サービス費用の一割である。残りの九割は、税金である社会保障制度で、まかなわれている。これらのサービスを自費で負担ということになると、経済力のある人だけが、介護サービスを利用できる、ということになってしまう。これは、医療の分野でも同じことが言えると思う。もし、病気やケガの治療費が全額自己負担となれば、経済的な理由で、治療が受けられない人もでてくると思う。私達の日常生活は、税金がなければ成り立たない。家族みんなが健康なときには気づかないが、どんな人にも社会保障は、平等に必要なものである。それを支えるのは、国民一人一人が払っている税金だ。

日本では少子高齢化がどんどん加速してきている。二千五十年には、一人の高齢者をほぼ一人の働き手が支えなくてはならない社会がやってくる。祖母の介護をする両親を見ていて、家族だけで介護をすることは身体、精神面ともに厳しいと感じた。祖母の介護を通して、税金を納めること、使い道を考えることの大切さを実感する。中学生になった今、大人が考えることだと思っていた税金のことも、考えることが出来るようになった。祖母の笑顔が、ずっと続くように、私もその笑顔を支えられるようになりたい。そのためには、日本の税金について真剣に考え、行動していくことが私達の務めだ。

私たちは今人類の歴史に残るような一大事に遭遇しています。それは、国家や人種地域を問わず感染力の強い新型コロナウイルスという主に飛沫感染する強力な流行り病です。

私の父と祖父はブランドバックや宝石の卸小売業の小さな会社で働いています。仕事の他に消防団員として地域のためにも活動しています。今年二月、祖父が夕食の時「博多どんたくが中止になるかもしれない、大事な会議も今後は書面会議になるやろうや。」と言っていました。私には何のことだか分かりませんでした。四月には東京のデパートで行われる展示即売会があり、私が生まれる前から参加していたそうです。毎月父は二週間ほど出張するのですが今年も中止になったと三月に聞きました。東京や大阪デパート催事は会社の主力事業だそうで「今年は厳しい決算になるね」と父が祖父に話していました。

三月に入ると春休みがそのまま延長されて受験生の私は新学期が始まらず、勉強のことなどだんだん不安になってきました。

四月、安倍総理大臣の緊急事態宣言で我が家も大きく変わりました。会社は三月下旬から閉店になったそうで家族はみな自粛生活になりました。四月下旬に父がパソコンとにらめっこ、国が国民全員に一人につき十万円を振り込むとの情報でした。「私も貰える」と嬉しそうに言うも母から即座に「貴方たちの分は私が管理します」と言い返されました。オンライン申請で五月中旬には振り込まれたそうです。その後、売り上げが昨年と比べてダウンした会社には持続化給付金制度があるとのことで、父は手続きに入っていました。必要な書類を色々揃えるなどかなり大変だったと後から聞きました。

一億二千万人有余の国民に振り込まれた特別定額給付金だけでもネットで調べてみると十二兆八千八百億円や持続化給付金をはじめとする数々の関連経費は新型コロナウイルス感染症緊急経済対策として莫大な金額で中学生の私にはとても想像できない金額です。これらの給付金は、税金から出されています。もし、税金を納めなくていい世界だったら、今以上に深刻な状況になっていたはず。普段から税金にはお世話になっていますが、今回の新型コロナウイルスのことで改めて税金は大切だということを知りました。

税金は国民の命と経済を守るために使われているお金だと思います。今、私が税として払えるのは消費税だけですが、大人になると様々な税を納めなければいけません。私も父や祖父のように期限内にしっかりと納税できる大人になれるよう努力していきたいです。

つながる税金

学校法人都築教育学園鹿児島第一中学校 2年 廣瀬 清楓

「高い体験旅行だったでしょう。」

母が書類の中から一枚の請求書を取り出し言った。一気に気持ちが和んだ。

昨年度末に体調を崩し、一週間の入院生活を余儀なくされた。退院の日、俯いている気持ちを察してか、何気にかけてくれたのかもしれない。その言葉に元気をもらい、請求書を手にとってみた。たくさんの数字が並ぶ中、目を引いたのが『補助』の欄だった。入院費の多くが『税金』で賄われていたのである。その時、改めて税金で支えられていたことを知り『ありがたい』と感じた。

税金は医療費だけではなく、様々なことに使われている。私たち学生に一番身近なものが教育だ。小中学校に無償で通うことができ、高校や大学にも税金が使われている。このことから税金は『つながり』を持つものだと考えるようになった。つながりとは、お金がそれぞれの人々に必要なものに代わって人と人をつないでいるということだ。例えば買い物の場面である。製品を購入し代金を払うことで、お金は生産者と消費者をつないでいる。しかし、税金のつながりはお金のつながり以上のものがある。人々の善意『心』をつなぐものだという事だ。それは、私たちが受ける教育は誰とつながっているのかを考えれば理解できる。一見難しそうだが、税金という概念から考えれば簡単に解決できる。まず、人々が納税することで、教育に必要なお金がもたらされる。そして、教育を受けた私たちが大人になって納税し、かつて納税してくれた方々に年金などの様々な形で返すといった仕組みだ。つまり、教育に必要なお金は、様々なものに代わって、多くの人々とつながっているのである。

日本国憲法には、『納税の義務』『勤労の義務』『教育の義務』とある。働くことで納税し、その税金で子供が教育を受けることができ、将来働くことができる。このように税金は三つの義務をつないでいるのである。税金は時空を超えて未来へと社会をつなげる役割も担っているのだ。そして、私たちはそのつながりによって、様々な権利が保障され、安心・安全に暮らすことができるのだ。

私は将来、医者になりたいと考えている。今回の入院生活で、実際に患者さんを助けている姿を目にして、医者への思いがさらに膨らんだ。そして私は今、税金によって学ぶことができている。勉強できることに感謝し、夢に向かって一層努力しようと決心した。

また、一人前の納税者になった時、現在納税されている方々に微力でも恩返しをしたいと思う。夢に向かって学ぶ子供たちの人生に、元気・希望を与えられたら嬉しい。考えただけでもワクワクする。私の納める税金が、日本国民の『みんなのために』心と心をつなぐものであってほしいと願う。

税金こそ『ONE FOR ALL, ALL FOR ONE』人間の助け合いの精神である。

税金に感謝

古堅中学校3年 上地 由花

毎日コロナウイルスのニュースが流れる中経済政策として「特別給付金支給」や「消費減税を検討」「GoTo キャンペーン実施」などが議論されています。どれに関しても賛否両論ある中で、「税金のムダ使いだ！！」という言葉もよく聞きます。なので税金の使われ方に関心を持つ小中学生も増えていると思います。

もちろん今議論されていることにも関心はありますが、私は小学生の頃から「税金に助けてもらっている。」という強い思いがあります。それは私が生まれつき足が不自由で小さい頃から病院や福祉のお世話になっている状況にあります。これまで大きな手術を三回して、その治療のため入退院も繰り返してきました。そのたびにかかった医療費を全額自分で支払うことになったら、家族みんなの収入を合わせても支払えないくらいの費用でした。私が入院すると、母も付き添いで仕事を休むことになります。とても大変ななか、治療に専念出来るのは医療費を補助してもらっているからで、その補助はみんなの納めてくれた税金からなので、たくさんの人に助けてもらっていると思います。医療費だけではありません。今乗っている車いすも補助金をもらって作っています。車いすがあるおかげで自由に移動することが出来ます。それから小さい頃、児童デイサービスにもお世話になっていました。障がいがあっても安全に楽しく過ごせる施設なので、両親も安心して仕事が出来たと話していました。小学校に行ってから支援学級の肢体不自由クラスを設立してもらい、体調の悪いときや、長期休みの後、復習するための時間をそこで過ごしました。中学に入学してからも肢体不自由の支援学級があり、一日六時間のうち体調に合わせてそのクラスに行き、支援学級担任の先生に体をほぐしてもらったり、遅れている分の勉強を見てもらったりしているので、無理せず学校に通うことが出来ています。

痛いことや、泣きたくなること、不自由なこともたくさんありますが、今こうして同級生と一緒に過ごすことが出来るのはその環境を作ってくれる方たちがいること。そしてその環境を作るのに必要なお金に税金が使われていること。私は誰よりもそこに感謝しないとイケないと思っています。将来、私だから出来ることを仕事にして、たくさん稼げる人になって、たくさん税金を払います。それが今助けてもらっている私の社会への恩返しです。

コロナ禍で知った税の大切さ

浦幌町立上浦幌中学校3年 平田 小雪

今年、大流行している新型コロナウイルスの影響で、消毒液やマスクが品薄になり、それが引き金となりいろいろなデマが流れ、ティッシュやトイレットペーパーの買い占めが起きました。インターネットでは消毒液やマスクが法外な値段で取り引きされ、社会問題になりました。

国は国民の不安からの買い占めや法外な値段での取り引きを防ぐため、対策をとりました。ペーパー類は在庫がたくさんあり、なくなることはないと発表し、酒造会社にアルコール度数の高いお酒を製造し消毒液用に販売するよう要請しました。

また、何度も洗って使えるマスクも配布し、コロナ禍で失業した人や収入が減少した人のために国民全員に一人十万円という特別給付金も支給されました。コロナ禍で多くの国民が困っている時に国が一人十万円を支給してくれるのはとてもいい事だと思いましたが、資金はいったい誰がどこから出しているのだろうという疑問が生まれました。

そんな時、社会の授業で租税教室が行なわれ、公認会計士さんから税について学びました。

租税教室で一番心に残った言葉は「税は取られるものではなく、国民一人一人が豊かに暮らすためにみんなで出し合う会費」という言葉でした。今まで税は何のために払うのかも分からず「税なんて払わなくても生きていける」と思っていたが、学んだ後では考え方が大きく変わりました。まさに今、コロナ禍で経済が落ち込み、個人の消費も減少している時に、国が一人十万円支給したことにより個人消費も増え、うまく経済が回っているのだということを感じました。今まで払って来た会費が困った時に助けてくれる社会保障等になって返って来る、とてもいい制度だと思えました。

私は、新型コロナウイルス大流行や租税教室で税のことを改めて深く考えることができました。

日本には私のように税に対して悪い印象を持っている人がたくさんいると思います。そのような人達に税の仕組みを分かってもらい、「税は取られるものではなく国民一人一人が豊かに暮らすためにみんなで出し合う会費」なのだという事を理解してもらい、税を嫌々払うのではなく納得して気持ち良く払ってもらえるようになってほしいと思っています。

税の仕組みはもちろんです、税の使い方を決める国の方針等にも目を向けて、税が生活に困っている人や支援を求めている人に確実に届く社会になるように、国民一人一人が気持ち良く「会費」を出し合って国を支えていける大人になりたいです。

生きがいにつながる税金

秋田市立桜中学校3年 近藤 晴香

「年金をもらいながら、税金も払っているんだよ。」

冬の日、祖父と祖母がパソコンの入力をしながら笑って言いました。

祖父母は、農業を営んでいます。年齢を考えて、面積を減らしているようですが、年金受給年齢を超えた今でも十ヘクタール（東京ドームの二・五倍）の稲作をしています。そして、冬の農閑期には、パソコンで青色申告の書類を作って税理士さんに提出し納税しているそうです。また、祖母も、専従者給与を受け取り、源泉所得税を納税しているのだそうです。祖母が一連の税金について教えてくれましたが、難しい税金用語が多く、正直私には理解できない部分もあったのですが、高齢でも収入があれば納税の義務があって、祖父母も納税していることを知り驚きました。

年金をもらえる年齢で、なぜまだ働くのだろうと疑問に思い祖父に聞いてみると、「何もしないでいたらボケてしまう」と笑いながら言いましたが、それから、「年を取ると、明日やらなくちゃいけないことがあるというだけでも楽しいんだよ。働くためには、健康でなくてははいけない。だから働くために健康に気をつける。健康でいつまでも働くことが生きがいだ。」と、いつもとは違う少し真面目な口調で言いました。

「孫達が学校で勉強できるのも税金、冬にこんなところまで除雪車が来てくれるのも税金、絶対そうはなりたくないけれど、病気やけがをしたら救急車もお願いしなくてはならないかもしれないしな。」そう言って祖父は席を立ちました。

私は、身近な消費税などしか税金というものを考えたことはなかったけれど、祖父の話聞いて、税金について改めて考えさせられました。普段、当たり前と思って気がつかないことにも税金が使われていて、そして、その税金というのは、たくさんの人や企業からの納税で成り立っているということ、納税者の中には、祖父母のように、もう働かなくてもいい年齢でも、生きがいと思って働いて、納税しているということ。

学生の私たちが、社会人となって収入を得て、納税者になった時には、今まで多くの人達の納税によって過ごしてきたことに感謝して、納税の義務を果たし社会に貢献していけるよう、将来のために今できることを頑張っていこうと思いました。

離れて暮らしているので、祖父母とは時々しか会えませんが、会うたびに小さくなっていく祖父母の背中が、税金の話聞いて、なぜかいつもより大きく見えました。

社会の一員として支えていくということ

清真学園中学校3年 原目 理沙

私の祖父は数年前から人工透析を受けています。透析を受ける前までは、祖父と夫婦二人でそば屋を経営していました。しかし、週三回・一回につき数時間かかってしまう透析を続けながらお店を経営していくのは難しいだろうということからお店を畳んでしまいました。私は祖父のお店で食べるそばやうどんが大好きだったので、閉店すると聞いた時はとても悲しかったです。

私は祖父が人工透析を受けると聞くまでは透析というものが何か知りませんでした。そのため、透析とはどういうものなのか、どれくらいの費用がかかるのかなど、透析に関する様々な事について調べました。そして、透析治療の医療費は高額だが、患者の経済的な負担が軽減されるように医療費の公的助成制度が確立しているということを知りました。医療費の負担を受けられるのは保険のみだと思っていた私にとっては、国や地方自治体からも助成を受けることができるというのは少し衝撃でした。その後祖母にいろいろな話を聞いたところ、経済的な負担だけでなく、病院まで送迎してもらえる自治体によるサービス等もあると知りました。

小学生のころ、学校で税金についての授業があり、税金がどのような使い方をされているのか学びました。道路の整備やごみの処理、教材など身近にある様々なものが税金によって成り立っていると知り、税金は大切なものなんだと思いました。その当時は自分が税金を払うことによって社会の一員として、社会全体を支えてゆくという意識がありませんでしたが、祖父がたくさんの人が払った税金によって本来よりも軽い負担で治療を受けることができているという実際に身の周りで起きていることにより以前よりも、税金の仕組み・大切さについて深く理解することができたと思います。超高齢社会である日本では、今後さらに、医療・年金・介護等の公的サービスにかかる社会保障費が必要になってきます。私が高齢者になる時には年金の額が少なくなるかもしれないというような話を聞いたこともあります。納税に対して消極的な人も世の中にはたくさんいると思いますが、税の重要性を今一度考え、税金を払うことによって支え合っているんだという意識だけでも持つことができればよいと思います。今後も私は、社会の一員としてしっかりと税を納め、社会全体を支えていきたいと思っています。

豊かな暮らしを支える税

練馬区立北町中学校3年 橘川 友輔

あるバラエティー番組を見ていたときのことだ。世界の幸福度ランキング一位の国としてデンマークが紹介されていた。この国の消費税は二五%、所得税が四五から六五%で、日本と比べて非常に高い。一方、医療費が無料で、出産する女性に対する保障が手厚い。衣服やベビーカーなどのベビーグッズを無料で支給する制度も充実している。教育費は基本的に大学まで無料だ。税金がとて高いのにもかかわらず、豊かな暮らしを送れるので、幸福度が高いのも不思議ではないと感心した。

私は今、中学三年生で、来年には高校を受験する。都立高校も私立高校も国や都の補助があり、授業料が実質無料になる。四歳上の兄が私立高校に入学した年にできた制度で、お金がかかると思っていた三年間、とても助かったと母が言っていた。

今年になり、学校から「中学三年生は英検の検定料一回分が無料になる」というプリントが配られた。私はちょうど英検に向けて勉強していたので、こんな制度があるのかと少し驚いた。クラスでもこの制度を利用している人は多い。このお金はどこから出ているのだろうか。担当の練馬区教育指導課管理係に電話で問い合わせしてみた。

私「学校で配られたプリントで中学三年生の英検の検定料が一人につき一回無料になると知りました。なぜそのようなことができるのですか。そのお金はどこから出ているのですか。」

担当者「なぜ、この件について興味を持ったのですか。」

私「私は中学三年生なので、今回、三級を受け、合格したら準二級を受けようと思っています。一回約六千円かかるので無料なのはとても有難いと思い、興味を持ちました。」

担当者「区の教育のための予算があり、税金の一部を使っています。中学生のみなさんが英語に興味や関心を持ち、英語の実力を高めてほしいので、この制度ができました。」

調べたところ、昨年度からできた区の新しい制度だった。板橋区ではまだそのような制度はなく、北区では実施回が限られているが英検、漢検、数検で、小学六年生と中学一年生から三年生を対象に補助している。練馬区では、教育費の中の教育指導費に「国際理解教育推進経費」という項目があり「英語力向上支援経費」によって検定料を補助していることもわかった。区の主な財源である区民税などに支えられて新しい助成制度ができ、私たちの学びが応援されているのだ。

日本の消費税は昨年十月に八%から十%に上がった。国民一人当たり一円集めると一億円を超える。国民一人一人から集めた大切な税金をよりきめ細かに使い、様々な場面で私たちの生活を支え、豊かさと幸福を誰もが実感できる社会を目指していきたい。

税金は何に使われているのだろうか。税金によってどんな良い事があるのだろうか。あなたは税金についてどれだけ知っているだろうか。ほとんどの人々は何も知らず、興味すらもったことがないだろう。かつて私もその中の一人だったが、あることをきっかけに考えが変わった。

今現在、私の家では「児童扶養手当制度」という国から給付金をもらって生活している。この制度は十八歳までの児童を養育しているひとり親に支給されるものだ。この給付金というのは国からの補助金という形で支給されるが、この補助金というのが国民からもらっている税金でまかなわれているのだ。今、私の母は、私と妹、弟と三人の子どもを女手一つで育ててくれている。そんな母にとって「児童扶養手当制度」という支給制度は唯一の希望の光だろう。この制度のおかげで私のようなひとり親の家族でも生活することができるのだ。

また、新型コロナウイルス感染症の影響で収入が少なくなった会社に対する支給制度も税金が使われている。「児童扶養手当制度」と同じように補助金という形で税金が使われている。私の祖父は魚問屋をしているが、魚を買ってくれる旅館が、お客さんが入らないため魚をあまり多く買えず、収入が五割ほどになったと言っていた。祖父の魚問屋仲間はほとんど旅館が休業になって、収入はわずか一割ほどになったそうだ。そんな時に、国から給付金をもらえることを聞いて、祖父は大変喜んでいた。

このように、ひとりで子どもを何人も育てているひとり親の家庭や、新型コロナウイルス感染症の影響で収入が少なくなった会社に対して行われる支給制度によって生活できている人々は多くいる。すなわち、税金によって支えられている家庭がいくつもあるということだ。税金を納めることが誰かを助けていることにつながっているのだ。

税金が何に使われているのか多くの人知らないと思うが、税金で救われている人が周りにはたくさんいる。税金で生活が成り立っている人もたくさんいる。それを、日本人として、納税者として知ってほしい。したがって、税金がないと生活していけない家庭もあるということだ。税金によってその家族の日常や未来も変えてしまうという税金の重さも感じてほしい。これからも立派な納税者として税を納めていきたいと思う。

税の意義

学校法人佐々木学園鶯谷中学校 3年 森 優希

私は三歳から八歳までの間父の仕事の都合でアメリカに五年間住んでいた経験があります。私がアメリカに住んでいた間、私や私の家族はほとんど病院に行ったことがありませんでした。どんなに高い熱が出ても、薬局で薬を買って治していたし、私も弟もハチに刺されたことがあるのですが、その時も薬局で薬を買って飲むだけで病院に行ったりはしませんでした。周りの子もみんなそれが普通で相当なことがない限り病院には行きませんでした。また、母はアメリカの雪道ですべって事故を起こしてしまったこともあり、周りの人が救急車を呼んでも母は乗るのをためらっていました。その当時はどうしてためらっているのか私は不思議でした。しかしそれは、アメリカが医療費は全て自己負担という国だったからです。実際にその時救急車の請求が百万来ていたみたいです。それに対して日本では税金によって医療費のほとんどが負担されています。なので日本では気軽に病院に行くことができます。また、コロナウイルス感染者の増加をアメリカより防いでいるのはこのことがあるからだとも言われています。私はこのことを知って、日本の税金はとても重要な役割も果たしていると感じ、税金がどのように使われているかもっと詳しく知りたいと思い調べてみることにしました。

税金は右で述べたように健康や生活を守る費用である社会保障費があります。これは病院代の他に救急車や消防車でかかる費用も負担しています。私たちが納めた税のうち三割以上がこれに使われているそうです。他には道路や住宅などの整備に使われる公共事業費に六．八％、教育や科学技術に使われる教育費に五．五％、そして国の防衛に使われる防衛費に五．二％、主に税金はこのような使い道で使われているそうです。このように、税金というのは私たちの生活をより豊かにするために使われているのがほとんどだということがわかります。

これを通して、私は税金がとても重要であって、本当に必要なものだと知ることができました。普段私たちはたくさん税金を納めなければならないことを負担に思っているけれど、納めていることによって自分の生活が豊かになっていることも知って感謝すべきなのではないかと思います。また、救急車などは国民が働いて納めたお金で成り立っているものなので、本当に必要としている人に使ってほしいし、無料のタクシー代わりに使うなどといった行為はなくなってくれればと思います。

私が普段納めている税金といえば消費税くらいだけど、これからは今までよりも気持ち良く税金も払える気がします。

税について

大阪市立瑞光中学校 3年 蓮池 咲桜

日本では、現在 47 都道府県すべてで、医療費助成が行われています。それは、私たち国民が払う税金の一部で賄われています。私の住んでいる大阪市では、平成 29 年に対象年齢が 15 歳から 18 歳まで引き上げられ現在、18 歳までの市民が保険証を出せばけがや、病気になった時、最大 500 円までの支払いで済み、後の費用は市が負担してくれるというものです。

それは、大阪市が約 90 億もの費用を福祉・健康医療費としてあててくださったおかげです。

正月に私の祖母が倒れました。その時は、夜だったのですが 10 分もしないうちに救急車と、救急隊の方が来てくださり、処置をしてくださいました。頭を強く打っていたので、心配だったのですが、すぐ、処置をしてくださったおかげか、今はとても元気です。本当に感謝しています。外国では、救急車を要請した場合や、診察した場合などに高額なお金を請求されるそうです。これに比べ日本は移動距離に関わらず無料で利用できるのは良いサービスだと思います。こうして見ると、日本の医療サービスは、世界の中でも、とても親切で優れていると思います。

そして、「税金があってよかった。」と思ったのは、今年流行しているコロナについてです。政府は税金でマスクを作ったり、給付金を配っていただきました。また、コロナにより売上が前年同比 50%以上減少している個人事業主や法人に対しては 100 万円、法人には 200 万円を給付するという支援対策や、失業者に対する給付金などと、税金で私たちの生活を守り、命を守る税金の正しい使い方をしてくださったと思います。そして大阪市では、学校給食が一年間無償化となります。こうした政策で、たくさんの家が助かったと思います。

こうして、いろんな方法でこの不況の中助けてもらっているので将来、私たちがたくさん働いて、コロナで出来た借金を返すお手伝いができたらなと思います。

日本にはいろんな所に税金がありますが、その税金を払うことで、こうした急な出来事に対処できるので、税金は大切だと言うことが分かりました。もし税金がなかったら、私たちは安心して医療を利用できず、私たちが普段利用してきたものや場所が当たり前のように使えなくなり生活がしづらいでしょう。

こうして考えると、私たちは普段の生活から税金に助けられ支えてもらっていたんだと知りました。もちろんそれは、たくさんの人が働いて、税を納めてくださったおかげなので、今、私たちが受けさせてもらっている、制度を粗末にせず、税金と、納税をしてくださっている人々に感謝の気持ちを持っていようと思いました。まだ、私たちが払える税金は、消費税の 10%しかありませんが、今、私たちが払った以上に受けている税金を、将来、私たちが社会に貢献できる歳になった時、こんどは私がたくさん返していきたいです。

税金の果たす役割

海田町立海田中学校 3年 城戸 彩花

お金は経済の血液だと考えられているように、お金の流通なくては経済が成り立たない。それだけでなく、社会に大きな混乱が起こることも、ないとは言いきれないのだ。今年に入ってから、新型コロナウイルスの影響により、緊急事態宣言が発表された時、私はこのことを改めて強く感じた。様々なイベントが中止になり、多くのテーマパークやショッピングセンターは休業体制をとった。そんな状態では、経済も回らない。このようなコロナ禍で、税金は大きな役割を果たしてきたのではないだろうか。

私の暮らす広島県では、県内の感染者数が少しずつ増加していることから、県内のホテル百五十室を借りた。軽症や無症状の患者をホテルに受け入れることで、病院の医療崩壊を防ごうとする計画である。このように、医療体制が圧迫しないような対策はどの都道府県でも行っているだろう。しかし、病床を確保するため、賃料は一ヶ月だけでとんでもない金額になるのだ。そのお金はどこから来ているのだろうか。誰が払っているのだろうか。そういった問題を解決するのが税金だ。一人では負担できない金額でも、みんなで少しずつ負担し合えば、誰かを助けることができる。税金のおかげで、医療崩壊が起きかねない状況からなんとか立ち直り、県内の医療体制を維持する環境が整いつつあるのだ。もし、税金がなかったらと考えるだけで恐ろしい。感染が拡大していく一方だったのではないだろうか。そう思うと、税金を納めるということは日本国民として誇らしい義務を果たしているということだ。

税金は、今回のように特別な時だけに使われている訳ではない。日頃の生活の中には、信号機や水道、教科書など、数えきれないほどたくさんある。中には私達が毎日使用している物もある。当たり前だと思っている日常が、実は税金によって支えられているのだ。

税金は誰もが豊かに、そして安心して暮らすために欠かせないものである。自分が納めた税金が、知らない誰かを救うかもしれない。知らない誰かが納めた税金が、いつか私を救うかもしれない。誰もが納めている税金は、思いもよらぬ場面で何かの役に立っているのだ。今回のコロナ禍はそういったことを考える一つのきっかけになった。私は、日本社会が支え合いによって成り立っていることを忘れず誰かのため、未来のために社会に貢献できる大人になりたい。そのために、税金についての知識をより深めていきたいと思う。

今の自分にできること

阿波市立阿波中学校3年 西村 碧樹

税金と聞いて真っ先に思いつくのは、消費税だ。公民の教科書には、消費税以外の税金についても示されている。例えば、個人の所得にかかる所得税、ガソリンにかかる揮発油税、土地・家屋などにかかる固定資産税など、あらゆるものに税金が課せられていることが分かる。納められた税金の用途を詳しく知らなかった僕は、税金に対して、「税金＝負担」といったマイナスイメージを抱いていた。しかし、先日、両親と一緒に語り合った亡き曾祖母の思い出話が、僕の意識を大きく変えた。

僕の曾祖母は、昨年、九十八歳で亡くなった。僕のお宮参りの写真には、赤ん坊の僕をしっかりと抱いた笑顔の曾祖母の姿がある。ただ、僕には、ベッドに横たわる曾祖母の記憶しかない。僕が会いに行くと、とても喜んでくれた。そんな曾祖母の死は、本当に辛かった。父と母が話してくれた曾祖母は、働き者で、八十歳を過ぎても畑仕事に精を出し、庭の草取りを欠かさない几帳面な人。しかし次第に認知症の症状があらわれはじめ、炊事や洗濯などの日常生活に介護が必要となった。そんな曾祖母の世話をしていたのは、祖母だ。祖母は食事の用意や部屋の掃除、着替えや洗濯など曾祖母の身の回りの世話を献身的に行っていたそう。当時を振り返り、母は言った。「毎日当たり前のようにおばあちゃんのお世話をしていたけど、お母さん、本当は、身体的にも精神的にもきつかったと思う……」

僕は、介護がどれだけ大変かを改めて知った。それと同時に、高齢化が進む日本において、介護は家族だけの問題ではなく、社会全体で解決しなければならない問題だと思った。

祖母の懸命の介護は数年間続いたが、曾祖母の症状は改善されなかった。自分一人での介護の限界を感じた祖母は、市役所に相談し、介護保険制度による介護サービスを利用することにした。そして、曾祖母の特別養護老人ホーム（特養）への入居が決まった。特養では、食事や入浴等の介護、リハビリや医師による健康管理、さらには、季節にちなんだイベントも行っているそう。

祖母の様々な負担を軽減させたのは、介護保険制度である。介護保険制度とは、介護が必要な人にその費用の一部を給付する制度だ。その財源は、四十歳以上の人から集められた介護保険料と国や県、市町村からの税金なのだ。僕の中の税金に対するマイナスイメージが、「税金＝人と人との支え合い・助け合い」というプラスのイメージへと変わっていった。

今の僕も、税金による「支え合い・助け合い」の中で生きている。調べてみると、学校の授業料の他、教科書、教室の椅子や机など、学校教育に関わる全てのものが税金で賄われている。中学生の僕はまだ税金を納めていないが、全力で勉強に励むことで、税金の意義を証明していきたいと思う。そして、曾祖母の思い出と共に、感謝や恩返しの心を大切に、将来、社会に貢献できる人間に僕はなりたい。

支えあいの「輪」の中で

長崎県立諫早高等学校附属中学校3年 松尾 若葉

今まで私は「税金」とは、日頃自分たちが通う学校での生活や人々が使用する公園や道路、ほかにも医療や年金、生活保護などどれをとっても人々が生きる上で決して欠くことができない大切なものに使われるものだと頭では理解していたつもりだった。

今年三月から始まった、いわゆる「コロナ禍」で、私たちの生活は大きく変わった。家から出れず、暗い気持ちで毎日過ごすことになっている。そして私たち家族の中でもこのコロナによって大切なことが奪われている。

昨年四月、私の祖父が亡くなった。最期は意思疎通もままならなくなったが、最期まで命を全うする大切さを私たちに残してくれた。そしてその一年後である四月、本当なら一周忌という形でまた、祖父の事をたくさんの人とともに思い出す機会がある予定だった。しかしそれがコロナで無期延期になってしまっている。父も母もどうにかして実施する道を考えてが、参列していただく方の安全を考えて、そういう決断をせざる得なくなってしまった。正直とても悲しかった。でも仕方がないことである。そして誰よりこのことを悲しんでいるであろう人がもう一人いる。それが私たちがコロナで奪われてしまったもう一つの事である。病床の祖母との面会である。

祖母は、心身のバランスを崩し、病院施設に入院している。私たちは時々祖母へ会いに行き、直接顔を合わせながら、祖母の話し相手になってきた。現在はそれができないのである。祖母は寂しく辛い思いを抱えてないかをオンライン面会という形で聞いてみた。すると意外な言葉が返ってきた。

「大丈夫ばい。みんながちゃんと世話してくるっけんありがたかばい。お父さんも安心しとるやろ。」

私はその言葉を聞いて、祖父と祖母の最期の面会の時に立ち会った時を思い出した。祖母は祖父の病床へ行き、手を握りこう言った。

「お父さん、長生きするとも楽ではなかね。でも、みんなが支えてくれて良かったね。ほんとにありがとね。」

その時祖父もうなずき、残りわずかな力で祖母の手を握り、涙を流していた。

私はその時、税金は目に見えるそして手に取れる支えをくれるだけでなく、目に見えない安心感を与えてくれるものだとはっきり理解できた。祖母は今、税金の支援により病院施設に入ることができ、安心した生活を送っている。それは祖父が生前しっかり働き、納税してしてくれたからである。また祖母がそうして安心した生活を送ってくれることが私たちの安心にもつながっている。そしてその私たちもいずれ、誰かを支える順番が回ってくるのだ。この支えあいの「輪」は決して絶やしてはならないことであり、私たちはそのためにも納税の正しい理由と使い道を正しく理解していかなければならないと思う。大切な人を支えられる人になるために。

あたり前の生活を送るために

芦北町立佐敷中学校 2年 立杉 優海

二〇二〇年、七月。私の住む芦北町に大きな水害が起こった。この日を境にあたり前があたり前でなくなった。私の家は、玄関前までですみ、家族みんなで避難の準備もしていたため被害は少なかった。しかし、おばあちゃんや山のふもとにある親せきの家は被害が大きかった。翌朝から近所にあるあき地には各家庭から出されたゴミの山が日々高くなっていった。水や電気も止まり、道には山から流れてきた木々や石、どろが広がっていて、所々水もたまっていた。「これからどうなってしまおうのだろう」と不安になった。

しかし、不安で不自由な生活を過ごす中でも復興は着々と進んだ。道を通れるように整備が行われると、茶色でどろどろだった道がきれいになっていき、ゴミ収集が始まると、あっという間にゴミが運ばれて行った。三日後くらいからは、役場やお店には支援物資が並びはじめた。水が使えるようになってからは、自分に出来ることを精いっぱい頑張ってきた。

私達があたり前だと思っていたことが、実はあたり前でなく、その裏にある誰かの努力と税金で成り立っていることに気付かされた。私達が安心して暮らしているのは、私達の身を守ってくれている警察や消防、自衛隊、医療関係などの仕事も誰かが毎日努力しているということ。そして、自分の生活をふり返って見てみると、いかに税金が使われているのか驚かされる。机、教科書、テスト用紙、それに校舎まで税金で賄われていることに気付く。この水害で派けんされた自衛隊のみなさんも税金で動いてくれていたのだ。

税金がなかったら私はどうなっていたのだろうか。税金がなかったらぐっすり寝ることも道を歩くことも出来ないのだろうか。水害のおかげとは言わないが、改めて税金の大切さがわかった。自分の納めた税金が誰かの役に立っている。みんなが納めた税金のおかげで今の私達の暮らしがある。考えただけで勇気がわいてくる。だから私は、あたり前の生活を送るために、税金に感謝しつつも、将来誰かに貢献できるように努力していきたい。

笑顔が見れるその日まで

沖縄尚学高校附属中学校 3年 下地 冨弥

「おじいもあと一度だけでいいから孫の顔を見たいさあ。」

祖父はしわくちな笑顔で私に言った。

私の祖父は、網膜色素変性症という難病を抱えている。四千人から八千人の一人にかかる病気で治療法もまだ見つかっておらず、一生治らない病気とされている。しかし、祖父は少しでも病気を治したいと思い毎日薬を飲み続ける。また、手術も数えきれないほど受けてきた。私には考えられなかった。治ると保障されていないのに目薬を何滴もさしたり、目という大切な体の一部にメスを何度も入れなければならないことも。私だったら恐怖でたまらないだろう。しかし、祖父は目が見えないという弱点が少しあるだけで、気持ちや体格は誰よりも強い。そして何よりもとっても優しいのだ。そんな祖父の姿が私にとって幼い頃からの憧れの人である。しかし、私は祖父に対して一つの疑問を持っていた。

祖父は裕福なわけでもなく、宮古島の田舎でおばあといおばあといと幸せに暮らしている。祖父はある程度の農作業は出来るが、仕事はしていない。しかし、一回の手術のお金は何百万円。そして、毎日の薬の代金を考えると膨大な金額になるだろう。なのに、なぜ祖父は手術を受け、毎日薬を飲めるのだろうか。私は祖父の病気に初めて触れた。これまでは、祖父が病気のこと聞かれると嫌がったり嫌な思いをさせてしまうと思っていたからだ。しかし、祖父に病気のことを聞くと嫌がらず、自分の病気について話してくれた。祖父によると手術や薬は国の税金から補助されていると説明してくれた。祖父は税金に助けられているから希望を持てると思う。他にも、死ぬまで真っ黒な景色では無い。それは、国民一人一人が納めてくれる税金によって手術が受けられるからだ。

私は祖父からの話を聞き、税金へのイメージが 180 度変わった。今までの私は、税金とは聞くだけでもネガティブなイメージを持つ人や率先して払いたいという人はまずいないと思っていた。今までは私もその一人だった。けれど今はもう違う。税金があるからこそ、祖父の目にも少しの希望が持てる。税金は人々に希望をあたえ、助けてくれる。他にも税金は違う形になって人々に恩恵をもたらす。私はこの作文を書くにあたって祖父の病気についても税金の使い道についても今まで何も知らなかったが、学ぶことが出来た。この作文がきっかけに税金についてもっと学びたいと思った。そして、私達一人一人が納めている税金によって手術を受けられることで、祖父はもちろん他にも病気で困っている人達にも生きる糧になると思う。税金によって病気の方々により良い手術が受けられることを願っている。私は祖父に伝えたい。

「おじい大丈夫絶対治るよ。その時は、私の笑顔をおじい目で見せてね。」

人を支える税

妹背牛町立妹背牛中学校 3年 石井 治希

私が住む妹背牛町は、自然が豊かで米がおいしい町である。しかし、買い物をする際には隣町まで行くことも多く不便なことも多い。生活する上では、苦労することも多い町ではあるが、町民に対し税金を使ったさまざまな支援が行なわれている。例えば、水道料金の助成や、学校給食費助成などがある。

その中で、私は医療費助成という支援にとっても助けられた。私は、小学校五年生の夏に盲腸の手術を受けた。何度も病院に通院し診察や点滴を受け、とても辛い毎日だった。その際に、私は妹背牛町の医療費助成制度について知った。妹背牛町では、十八歳までの子どもに対して医療費無料という制度がある。そのおかげで、私は入院費・手術費などのさまざまな医療費を、妹背牛町から支援していただいた。

また、妹背牛町ではスポーツ少年団に対して、バスの送迎の支援がある。私は、小学校・中学校とスポーツ少年団に所属していたため、この制度にはとても感謝している。札幌や、苫小牧といった遠い遠征先に行くことができた。これにより、普段、試合ではなかなか対戦できないチームと試合をすることができると、多くの場面でバスを利用させていただいた。

このように、妹背牛町では子どもから高齢者まで全て支援されている。この、町民に対する支援は税金で賄われている。私は、このような支援を受けていることで、税金は身近なものと感じている。

税とは、生活をする上でとても大切である。妹背牛町は、税を活用することで町民の暮らしを豊かにしている。しかし、税金に対して否定的な意見をもつ人も多いと思う。そこで税金をただ納めるだけでなく、自分が納めた税がどのように使われているかを知ることによって税に対する理解ができると私は考える。納めた税が、誰かの役に立つことを理解し、私は将来きちんと納税し社会の一員として貢献したい。

世界自然遺産である白神山地のふもとの町で僕は生まれ育ちました。全校登山では、生き生きとしたブナ林や澄んだ沢水、虫や鳥など、たくさんの自然の中で生活していることの幸せ、豊かさを実感することができます。町には、商業施設や遊園地などの娯楽施設はないので、時々はそのような施設がある町を羨ましくも思います。それでも、建築物を創り上げる何百倍もの時間をかけ、継続的で、丁寧な手入れで守られてきた自然は、僕たちの誇りです。保護・保全に積極的に関わり、遺産としての価値を維持しようと、町の人みんなが愛着をもって、大切に守っています。でも、気持ちだけでは守るにも限界があります。この緑あふれるふるさととは、どのように守られているのだろうか調べてみて、環境を守るための税があることを知りました。

これまでも、生活の中で「税のおかげ」を実感することはたくさんありました。将来、プロ野球選手を目指している僕にとって、夜でもランニングや素振りができる舗装路や街灯はありがたいです。それに、学校や机、教科書、病院や救急医療、消防に、ゴミの収集……。挙げたらきりがありません。それなのに、自然保護にも使われていたなんて驚きです。いや、緑があふれている町が僕にとって当たり前すぎて、「守ること」について、あまり意識していなかったのかもしれない。

当たり前すぎると、大切なものが見えなくなる——。もしかすると、意識していないだけで、僕が思うより、もっともっとたくさんの税がこの町に、生活に生きているのかもしれないと思いました。ただ自然と同じで、税があまりに身近すぎて、しかも、その存在を主張することなく、常に控えめに僕らの生活を支え、潤しているために、その大切さ、ありがたさを意識していないだけではないでしょうか。この町を知らない人、僕の知らない人までもが、この町を支えてくれていると思うだけで、温かなつながりを感じます。

小さいけれど、田舎だけれど、僕の大好きなこの町を支えてくれる人たちに、まだ収入のない僕は何ができるのかを考えてみました。まずは、みんなで支え合えば、今よりもっとよい社会になるということ学ぶこと。そのために、一人一人が納める税の力は小さくても、みんなの力が集まれば、たくさんの人の笑顔と生活を守れる大きな力になるのだということ、その思いを形にできるような立派な大人に成長する努力をすること。そして、その思いをつなげていくこと——。

僕は白神山地のふもとの町で生まれました。父もそうです。そして、母の生まれは鹿児島県屋久島町。「税は、何千年も昔からの美しい自然を守ってくれている。ありがたいね」と母は言います。これからも、僕はみんなの思いが息づくこの町で暮らしていきます。大好きなこの自然と、僕らの生活を支えてくれる人たちの思いに感謝しながら——。

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、二〇二一年度税制改正での炭素税導入が断念されました。地球温暖化はとても大きな社会問題として様々な面で被害が及んでいるのが現状ですが、環境問題への注目が高まる中、それに関する税があるということを知ることが必要だと考え、調べることにしました。

税といえば、消費税や所得税、固定資産税などが挙げられますが、その中に地球温暖化対策税という税があります。これは、二〇五〇年までに八十パーセントの温室効果ガスの排出削減を目指し平成二十四年に施行されたものです。環境省はこの税について、「すべての化石燃料の利用に対し、環境負荷（CO₂排出量）に応じて広く公平に負担を求めるもの」としています。この税収は、エネルギー起源CO₂排出抑制のための対策に活用されることとされています。

私は最初にこの税について知ったとき、地球温暖化に関する税があったということに正直驚きました。それに加え、私の主観かもしれませんが、消費税などと比べて知る機会が少ないとも感じました。もっとこの税について皆が理解すれば、自分も税金を通して地球温暖化対策に貢献しているといった前向きな考えも生まれるのではないかと思います。

では、私達は炭素税をはじめとする地球温暖化対策関連の税と、どう向き合えばよいのでしょうか。

世界では、炭素税の導入は今に始まったことではありません。一九八〇年代から環境問題に対する関心が高まり、一九九〇年にフィンランドで世界初のいわゆる炭素税が導入されました。翌年にはスウェーデンやノルウェーがそれに続くなどヨーロッパを中心に広まり現在に至ります。決して歴史が浅い訳ではないのです。だからこそ、私達はまずこの税について知ることが必要です。そして、よく理解した上で正しく納めることが大切です。

更に、私達にはもう一つ出来ることがあります。それは、省エネに取り組むことです。税とは関係ないと思うかもしれませんが、そうではありません。地球温暖化対策税の目的は、エネルギー起源の二酸化炭素排出量を削減することです。省エネルギーに取り組むことで、自分が負担する税も減らすことができます。そうすることで、財源効果だけでなく価格効果やシナリング効果なども生まれてきます。より生きた税になるのです。

私達は、持続可能な社会にするためにたくさん問題について考えなければなりません。解決の方向の一つとして「税金」があること、そして税金を最大限に生かす工夫があることを忘れずに、これからも社会に貢献していきたいと思えます。税金には、よりよい未来をつくっていく役割もあるのです。

命を繋ぐ税に感謝の気持ちを

豊島区立池袋中学校3年 南塚 美咲

中学生の私が税という言葉聞いて思い浮かべるのは、消費税です。消費税とは商品・製品の販売やサービスの提供などの取引に対して広く公平に課税される税で、消費者が負担し事業者が納付する仕組みです。私は税の作文を通して消費税の他に、税にはどのような役目があるのかより多くの知識を身につけたいと思いました。「税金って何?」と聞かれた時、皆さんは何と答えますか。実は税金についての知識がない、関心がない、そういった人は非常に多いようです。

私はこの夏休みに祖母の家に行きました。祖母と二人きりでいる時、祖母はふと年金について私に話をしてくれたのです。年金について今まで考えたことがなかった私は話を聞くうちに年金がどれだけ重要なものかを知ることができました。そして、深く興味を持ち自分で調べてみることにしました。年金とはある事由に該当する場合に毎年定期的に支給されるお金のことです。一般的には老後の安定した生活を送るためのお金というイメージが強いですが、種類によっては怪我や病気が原因で障害状態に陥ってしまった時や、万が一の死亡時にも支給されるそうです。

では、税と年金にはどのような関わりがあるのでしょうか。国の税金が最も使われているのは「社会保障関係費」だということ調べて初めて知りました。これは私たちの生活を守るためのもので、医療や年金、介護、生活保護となっているものです。社会保障費のために多くの税金を納めなければなりません、それにより病院での自己負担が3割で済む、そして年金を受給できるなどの恩恵があるという仕組みになっています。私たちはこのような税金の使い道が見えない、わからないことが快く税金を納められない理由の一つにあるのではないかと考えました。

もし年金制度がない場合、自分自身や家族の加齢による障害やリスクに対して、自分たちだけで必要な金額を用意しなければならないということです。これらの費用をすべて個人で賄うのには限界があるので、社会全体で対応できるようにするために年金制度が必要とされているのです。私はこのようなことについて知識があるかないかでは大きな差があると感じました。また、年金制度に加入していない人がいるという現状が信じられません。なぜならそれは私たちの義務であり、世代と世代の支え合いで成り立つものだからです。

自分の将来と家族のためにも、私は二十歳を超えたら年金制度に加入してきちんとお金を払っていきたいと思います。私は税について考え学び、「喜んで払います」と笑顔で言うことのできる人間に成長したいと思いました。税とは人を幸せにするものです。税の作文を通して私たち若い世代はもっと税について勉強し、自らの社会や国のあり方を考えるべきだと実感しました。これからも税金が最大限の力を発揮することを、私は信じています。

こどもテイクアウト

敦賀市立栗野中学校 2年 手島 梨菜

今年、新型コロナウイルス感染拡大により、国からは非常事態宣言が発令されました。多くの方が、新型コロナウイルス感染拡大を防止するため、不自由な生活をおくっています。会社では、時差出勤や在宅勤務で、朝や夕方の密を避ける対策がとられました。学校では二ヶ月以上の休校、お店では営業時間の短縮、休業などの対策がとられました。

そんな中福井県敦賀市では「こどもテイクアウト事業」が市内の飲食店三十店以上の協力のもと、開催されました。「こどもテイクアウト事業」とは、市内の三歳から十八歳の子どもの対象に、五〇〇円のお弁当を二〇〇円で販売する事業です。これは、新型コロナウイルス感染拡大により、お客さんが少なくなったお店を助けるという側面もあります。ですが、これは仕事をしている親の負担を減らし、美味しいお弁当をおなかいっぱい食べてほしい、という願いのもとでできた制度です。私たち家族も、この制度を利用してお弁当を買いにいきました。そのとき私は、五〇〇円のお弁当が三〇〇円も安い二〇〇円になるのはなぜかと思い、母に聞きました。

「なんで、お弁当を三〇〇円も安い二〇〇円にできるの。」

「税金をつかっているからだよ。」

母がそう言ったとき、私は驚きました。こんなことにまで、税金がつかわれているなんて全く思わなかったからです。私は、今、福井県の市町村で税金がどのようにつかわれているか、気になったので、調べてみることにしました。

鯖江市では、中学生以下の給食費が学校再開時から年度末まで無料になりました。美浜町では、マスクを全戸に最低二箱無料で配布しました。また、全町民に一万円分の商品券を発行しました。勝山市では、中学生以下の子ども一人に六万円を給付しました。大野市では、「子どもに笑顔を届けるテイクアウトチケット」を十枚配布しました。調べてみると、他にも福井県のいろんなところで税金は、人々の役に立っていました。それには、敦賀市の「こどもテイクアウト」のように、税金にさまざまな願いがこめられていました。

私は、まだ税金をはらっていません。でも、大人になったら税金をはらいます。税金は、必ず人々の役に立つようなつかいかたがされています。大人になって、税金をはらうときには、この税金がどのようにつかわれているのかを考えたいです。

おばあちゃんの笑顔のために

西尾市立幡豆中学校 3年 山本 里瀬

「行ってらっしゃい、おばあちゃん。」

「じゃあ、いってくるね。」

私の祖母は、二年前からデイサービスの施設に通っています。祖母は糖尿病を患い、左手と下半身の麻痺で介護が必要になったからです。それまでの祖母はとても元気で、祖母に会いに行くとよく昼食やおやつを作ってくれました。しかし、身体が不自由になってからは常に家族の助けが必要となりました。そこで、家族の負担を減らすため祖父がデイサービスを利用することに決めました。

祖父から聞いた話では、祖母は週に三日、朝から夕方までをデイサービスの施設で過ごしているそうです。送迎や入浴、食事やお楽しみ会などのイベントもさせてもらっていると聞きました。すごく良いサービスだと思うと同時に、どれだけのお金を払わなければならないのだろうか。祖父の経済的な負担は大丈夫なのだろうか。と、疑問がわいてきました。気になったので、祖父に聞いてみました。すると祖父は、

「利用料金の負担は、たった一割で残りの九割は、税金でまかなわれているんだよ。税金のおかげでおばあちゃんの介護はすごく助けられているんだよ。」と私に教えてくれました。さらに、介護用のベットや車イス、段差を越えるためのスロープまでも税金でまかなわれているんだと話してくれました。祖父の話聞いて、税金がすごく身近なことに使われていて、驚きました。そして税金は、祖母や私たち家族の幸せを守ってくれているんだと実感しました。

日本は、現在世界一の長寿国です。少子化高齢化が同時に進んでおり、これからはさらに総人口に占める高齢者の割合が増加していくと考えられています。だから国民の皆が元気に安心して暮らしていくためには、社会保障の充実が必要不可欠なのです。社会保障の充実には、たくさんのお金がかかります。そのお金のほとんどは、私たちが日々納めている税金によって負担されています。だから消費税の増税は、皆がずっと安心して幸せに暮らしていくためには仕方のないことではないだろうか。増税はいやだなと感じることもあるかもしれませんが、しかし「塵も積もれば山となる」ということわざがあるように、たった数十円のお金でも日本にいるたくさんの人が協力すれば、困っている人や苦しんでいる人を救うことができます。そう考えると税金を納めていることは、誰かの幸せを願う優しい行動であると思います。

あと数年経ったら私は社会人になります。そして、今よりも多くの種類の税金を納めていかなければなりません。その時、税金が本当に私たち国民のために使われているのかについてしっかりと関心を持っていきたいです。税金の大切さについて、もっと多くの人が理解し、笑顔と優しさが広がっていくことを願って。

あなたの知らない税

赤磐市立桜が丘中学校 3年 安東 美藍

「人の役に立ちたい」そう思うのは私だけでしょうか？多くの人が困っている人がいたら助けたい、将来は人の役に立つ仕事をしたいと思ったことが一度はあると思います。仕事をしている大人も同じです。やりがいを感じるのは仕事をして役に立ち、感謝の言葉をもらうことという人がほとんどです。それにも関わらず、税金という言葉を知るとお金をとられてしまう、というイメージが真っ先に湧き、あまり良いイメージを持つ人がいません。私もそうです。その原因は、私のように税金が人の役に立つ重要なものだと思わないからだと思います。

まず税金は、私たちの身近だと学校で多く使われています。例えば、私たちが使っている教科書やパソコン、体育用具などの備品、また校舎を建てるお金にも税金が使われています。このように、みんなが平等に教育を受けられるように税金が使われています。私は身近なものにも税金が使われていることを知り、あたりまえに通っていた学校や使っていた物はあたりまえではないと実感しました。それと同時に、感謝の気持ちを忘れてはいけないと思いました。

他にも税金は日本だけでなく、世界中の人々のためにも使われています。日本は苦しみ困っている人たちが多くいる国を助けるためにお金を貸しています。それだけでなく、ダムや道路、病院を建てたり、病院で使う薬や注射器などを送っています。私は、このように国際社会の平和を願って、世界の人々のために支援することは、すばらしいと感じました。また、税金がこんなにも重要な役割まで果たしていることに驚きました。

このように、税金を納めることも立派な人の役に立つ手段なのです。「人の役に立ちたい」という人は多いのだから、税金の使い道について多くの人が学ぶべきだと私は考えます。税金を納めることで、実際に人が笑顔になっている様子が見られたり、感謝の言葉をもらうことはできません。だから、人は税金を納めることにためらいを感じてしまうのだと思います。そんなとき、税金の使い道について学んでいけば、自然と誰かの役に立っている様子が想像できるはずです。そうすればやりがいを感じ、税金を何のためらいもなく納められるでしょう。私は、これから買い物に行き商品を買ったときに、消費税が上乗せされても、「人の役に立ちたい」という思いで支払おうと思います。みなさんも、まずは誰にだって出来る税金を納めることから始めましょう。人の役に立つために。

「豊かな生活」に気付いたら

小豆島町立小豆島中学校3年 小林 美櫻

救急車のサイレンが遠ざかっていく。一刻を争うそんな場面が今の今まで目の前で起こっていた。まだ心臓がバクバクしたままだけれど、私ができることは終わっていてあとは祈るばかりだ、とわかったとたんその場に座り込んでしまった。

さっきまで十五人ちかくの大人が祖父を救おうと右往左往していた。声が飛び交い、たくさんの機械や道具を使ってみんな懸命に動いていた。緊急事態に家族ができることはほんのわずか。緊迫した場面でテキパキと仕事をこなしていく救急隊のみなさんには感謝しかない。このように緊急通報をしたら救命のプロが助けに来てくれる。それがどんなに心強いことか。当たり前になっているけれどこれは公共のサービス。もし税金が使われていなければ救急車を呼ぶだけで有料になる。救命士の人件費も衣服や装備も、使用される医療機器も緊急車両も、車両を動かす燃料も全てお金がかかっている。本当に忘れがちだけれど、お金がないと何もできない。命の危機に直面して緊急通報するとき、お金の心配をしないとイケないのは結構キツイ。誰だって命とお金を天びんにかけて迷いたくはないと思う。救命を求める人はみんな平等にサービスを受けることができる。これって今まで考えたことがなかったけれど「豊かな生活」ということかもしれない。衣食住が足りていて更に命とお金を天びんにかけ迷うこともない。これこそ国民生活が豊かな証だ。

緊急通報だけではなく、公共サービスは国民生活に溶け込んでしまって当たり前になりすぎていると思う。病気になって病院に行き診察やお薬を処方してもらってお金を払っているけれど、国民が払うのは一部の医療費で全てではない。家庭で出たゴミを決まった曜日に出せば収集して処分してもらえる。これも公共サービス。不審者がいたときや落し物をしたとき、何か困ったことがあったときに交番にかけこむ。交番が有料だったら？小さな子供からお年寄りまでみんな必要になる可能性があるのに「あなたを助けるには有料になります」だなんて言われると本当に困る。公共サービスはどれも必要不可欠で平等に使えないと困ってしまうものだとわかる。公共サービスはみんな使う可能性があるから、みんな税金という形でお金を出し合って支え合っているものだ。個人では平等に同じサービスを継続して提供できない。個人でできないことを助け合ってやっていく。それがみんなの税金によって可能になっている。「豊かな生活」を送っていることに気付かないで生活をしてきたというぜい沢。納税がどれだけ大事なことがよくわかった。将来、私も税金を払う立場になるとき、もう一度納税の大切さを思い出したい。

「税と生きる」

福岡教育大学附属久留米中学校 3年 酒井 叶愛

「今年の夏は…」

今年は例年と違い短い夏休みであったが、忘れられない夏となった。

令和二年七月、私が住んでいる久留米市では豪雨の影響により、筑後川で氾濫が発生した。近年、熊本地震、西日本豪雨、九州北部豪雨など多くの災害が起こっている。

そのような中で、久留米市からは、災害見舞金、住宅消毒、ごみ回収など様々な支援についての連絡が届いた。また、今年は新型コロナウイルス感染症の関係で、災害時の避難所、ボランティアの人数の制限など大変な状況の中での支援だったようだ。

私は、今まで災害時のこのような支援は当たり前だと思っていた。しかし、近年毎年のように起こる災害に加え、未知のウイルスの不安の中で、この当り前の支援を受けられることについて深く考えるようになった。

私達は生活の中で、当たり前支援を受け、そのおかげで幸せに安心して生活することができている。警察、消防の方々の活動、教育、医療など様々なことは、なぜ当たり前なのだろうか。私達が当たり前で受けていることは、大人の方々が払って下さる税金のおかげなのだ。もし、これらの税金がなければ、災害がおきても道路は復旧せず、壊れた水道からきれいな水が出てくることはない。私は、身近な場所で災害が起きる前、遠くの被災地のために貯金から募金活動に協力したらよいと思っていた。しかし、それだけではその時一回のみで終わってしまう。また、税金は難しく、少し嫌なイメージもあった。自分の支払った消費税などについて気になっていたが、このように使われていることを知り、税金の恩恵に改めて気付かされた。人々が払って下さった税金は、別の形で困っている誰かを救うことにつながっているのだ。

今年は、新型コロナウイルスのPCR検査、治病床の確保、ワクチン開発など今までなかったことも必要とされている。これらも税金によって成り立っていることを知り、改めて税金の大切さを感じた。私達は、今の日本の現状を理解する必要がある。私は社会は人と人との繋がりで成り立っているのだと思う。税金によって、日本が今まで以上に豊かで幸せになるよう、私達若い世代が今まで受けてきた当たり前感謝し、支えて、未来へとつなげていけるようになりたい。

「これからの日本のために、私達にできることを一つずつ、感謝の気持ちと共に。」

税金は社会のエネルギー

宮崎市立大塚中学校 3年 古谷 明希歩

なぜ、税金に対してマイナスなイメージを持つ人がいるのでしょうか。私も、前までは、

「税金ってなぜ払う必要があるのだろう」と、あまり良くない感情を持っていました。消費税や所得税、住民税などのように、生活する上でのほとんどのことに絡んでは、お金を「払わされて」しまうからです。

しかし、税金について詳しく調べると、これは、身近な場所で想像以上に活躍しているということに気付きました。

例えば、私が小学生の頃です。通学路を歩いていると、アスファルトの一部がへこんで穴が空いたようになっており、危うく転びそうになったことがありました。内心ヒヤリとした私は、次の日から別の道を通るようにしていました。しかし数週間後、久々にその道を通ろうとすると、穴はきれいに埋められ、ぴかぴかに舗装されていました。

「誰か親切な人が修理したのかな」

なんて考えていましたが、あの時に道を修理したことによってかかる費用は税金から出されていたそうです。

中でも一番驚いたのは、毎日のように使う教科書も、義務教育の間は、全て税金で賄われている、ということです。確かに、全ての教科書の裏には

「これからの日本を担う皆さんへの期待をこめて、税金によって無償で支給されています。」

と書かれていました。教科書使用歴九年目にして、初めてこの文に実感がわきました。

私は今まで、税金のありがたみを全く理解していなかったことに気付きました。警察も消防も学校も、全て税金によってまわっています。もし、日本から税金が消えたら、と思うとゾッとします。今の豊かで安心安全な生活は、税金の力で保たれていると感じました。

また私は「税金は払うもの」と思っていたのですが、それも間違いだと知りました。払うには自分に、選択する権利が多少なりとありますが「納める」という表現には、絶対・必ずという意味があります。税金は払うものではなく「納める」ものなのです。

この日本には一億人以上の人々が暮らしています。確かに税金を納めても、一人一人への実感は小さくなるかもしれません。しかし、私達がより良く豊かに生きるためには、絶対に税金が不可欠なものなのだと、私は声を大にして訴えたいです。

それに、自分が納めた税金が、社会のどこかで息づき、苦しい思いをしている人を助けているかも知れない。そう考えると、マイナスどころかプラスなイメージさえも持てる気がします。

税金とは、納めることでこの社会をより良く変えられるものだと、私は信じています。

「消費税増税って、無駄じゃない？」

「なぜ、払わなきゃいけないの？」

消費税増税に対して、よくこのような声を聞きます。私も、この作文を書くまでは、そう思っていました。しかし、実際に税について深く学び、消費税増税について考えてみると、今までとは違う見え方になりました。

まず、私の一番の疑問は、『増税された分の税金が何に使われているか』という事でした。増税分の税金は、主に、国の借金の軽減・教育の支援・医療や福祉の充実の三つに使われていました。

この三つの使い道には、ある共通している問題が関連していることに気付きました。それは、少子高齢化です。現代の日本は、だんだん高齢者が増えると共に、出生率が下がる事で、日本を支える働き手が少なくなってきました。消費税増税は、その状況を抑えるために行われたのかな、と自分なりに考えてみました。増税分の消費税の使い方を一つひとつ見ていくと、これから多くなっていく高齢者数に対応するための医療・福祉の面が一つ。教育費負担を軽減し、少子化を抑えるための教育の面が一つ。そして、そのような問題の解決にとりくんでいく未来の負担を軽減するための国債費の返済が一つ。これら全てが、次の世代のための貯金箱のようなものだと思います。少子高齢化は、すぐには解決できず、私達が大人になる十年後、二十年後も向き合っていかなければならない問題です。だから、その時代に向けて、今すべきことが十パーセントの消費税をきちんと納めるという事だと感じました。

私達は、これから、今までにはなかった新しい問題に立ち向かって時代を築いていきます。そのためにも、消費税や他の税金に対しても、マイナスに捉えるばかりではなく、その問題解決の支えになるものとして、しっかり学び、意見していく必要があると思いました。

また、最近では、ネットを開くと、『誹謗中傷』という言葉をよく見かけます。日本は、『おもてなしの国』と言われるほど、相手のことを考えられると思います。しかし、顔が見えないネットの世界では、乱暴な言葉があふれていて、その差に驚きやショックを感じた人も少なからずいるはずですが、仮に一人ひとりがもう少し他人の気持ちを考えられたら、その状況は変わっていくと思います。税に関しても、ただ払うのではなく、年齢関係なく学び、考えを持つ事で、日本の助け合いの精神は、どんな時、どんな場所でも生きてくるのではないかな、税にはそういった役割も秘めているのではないかなと思いました。

私はこれから、社会の一員として、誰かを支える身として、令和を築く一人として、税を納める意義を考えながら、日々を過ごしていきたいです。

支え合える未来が続くように…。